
仮面ライダーディケイド×電撃学園 C r o s s o f w o r l d

ツリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド×電撃学園 Cross of world

【Nコード】

N2773R

【作者名】

ツリー

【あらすじ】

ライダー大戦を終えた仮面ライダーディケイドこと門矢士一行が次に訪れた世界は多くの物語が複雑に絡み合う電撃学園の世界だった。

絶夢率いる謎の組織により改変されつつある世界の崩壊を防ぎ、各々の物語を紡ぐために。

再び全てを壊し、全てを繋げ。

世界の破壊者ディケイド。新たな世界でその瞳は何を見る。

(仮面ライダーディケイドと電撃学園Cross of venusのコラボです)

第0章 夜の購買部（前書き）

新作です。

興味を持たれた方はどうぞご覧ください。

第0章 夜の購買部

「一体これは何の世界なんでしょうね？」

光写真館の突然降りた背景ロールに写っていたのは何とも気味の悪い夜の丘。しかもそこには修道女やら旅人やら女子高生と見える女子が10人ほど十字架に架けられているというものだった。

「それに・・・これは!!」

しかもよく見るとそれぞれの少女には何故かライダーの紋章があるものには腕、あるものには服に等、不規則に刻まれていたのだ。

「というか、行ってみれば分かるだろ。絵柄からして一応、ライダーと関係がありそうだしなあ」

そのまま写真館の扉を開け、外へ出る門矢士、光夏海、そして小野寺ユウスケ。

「・・・何だよ真っ暗闇じゃないか！」

外に出て早々ユウスケが叫ぶ。

「ユウスケ、静かにして下さい！周りの人に迷惑でしょう！」

「えい、ごめん・・・」

「ねえ2人とも、アレ見て下さい!」

夏海が指さす先には男子と女子のこの学校の生と思われる人物が校門を上っているところだった。

「あれ、不法侵入ですよ」

「夜の学校に侵入か。俺も中学の時にやったっけな」

等と何やら昔の思い出に浸かりはじめたユウスケ。

「とりあえず追ってみるか。この世界の事が何か分かるかもしれないしな」

場面変わって先程の二人。

「暗いわねえ」

「そうだな」

「・・・って、ひゃあ! ちょっと変なところ触らないでよ!」

「しょうがないだろ。暗いのに目が慣れていないんだ」

「『学校に出る幽霊の噂、俺達目で確かに行こうぜ!』・・・
って言い出したのレイジでしょ。懐中電灯くらい用意しておきなさいよ!」

「昔っからホントいちいちうっせーなあ！あ・・・目が慣れてきた」

校舎の扉を開け、購買前まで来た二人。

「で、購買で何しようっていうの？」

「噂じゃ購買の周りが1番幽霊の目撃例が多いんだよね」

そう言いながら怜治が購買部のドアを開け、少女も続く。

そこで彼らが見たものは、購買のまるで引き剥がしたかのように壊れているシャッターと、髪の毛の長い何故か日本刀を持っている少女だった。

「いきなり！？出、出、出、出た~~~~~！！！」

「落ち着きなさいって。メロンパン食べている女の子でしょ。に・ん・げ・ん・よ。・・・でもウチの制服じゃないわね。それにこんな時間に購買が開いている訳無いし・・・」

おっかなびっくりな態勢だったレイジも漸く身構えを解く。

「な〜んだ、ビックリさせんなって。ただの女の子か」

と安心しきっていた彼らの元に赤ん坊のような怪物が現れた。赤ん坊といっても容姿だけで体格的には相撲の力士を思わせるものがある。

「・・・ってアレ！？アレなんだ！？・・・今度こそ本物の幽霊！

？うわあああああ！！！！」

その叫び声を聞き付けた3人。

「ねえ、今向こうで声がしませんでしたか」

「行ってみよう！」

「おい、俺を差し置いて勝手に行くなよ！」

3人が声のした場所へ行ってみると・・・

先程の日本刀の少女が赤ん坊の怪物を倒した所だった。

少女は二人の方を向くとキッと睨んだ。

「敵を目の前にしてボケっと突っ立っているなんて、お前死にたいの！？」

「はあ！？何だよえらっそうに。お前誰だよ、それに・・・あなた達は？」

レイジが士達の方を向いて尋ねる。

「俺は・・・門矢士」

「あっ、小野寺ユウスケです」

「光夏海です」

「私はフレイムヘイズ『炎髪灼眼の討ち手』。名前はシャナ」

その瞬間、レイジと士の脳裏にある光景がフラッシュバックの様に流れた。それは夜の丘に十字架に掲げられたそれぞれ異なる部位にライダーの紋章が刻まれた光景、そう、あの写真館の背景ロールと同じものだった。

「うっ！・・・」

「くっ！・・・」

「士君！？」

「士っ！？」

「どうしたのレイジ。頭でも痛いのか？」

「いや・・・大丈夫だ」

「俺も・・・何でもないよ。それより・・・ふれいむへいずう？えんぱつしゃくがんのうちて？」

「そう。世界のバランスを守る者」

「世界を守るって・・・何かディケイドとは真逆みたいだな」

「そうですね・・・」

と3人が真剣に話しているのに対し、少女（春日井キズナ）は、

「はっはっ！ あゝ、なるほど！ いわゆるコスプレってヤツね！ 服も刀もよく出来てる！」

と、何だかふざけてるのかと言われても文句が言えそうにない返答が。動じずシヤナは

「ここに居合わせたって事は・・・お前たちが世界を守るものなのね・・・一緒に来て」

「ちよっ・・・いきなりそんな事言われても・・・」

「逃げようとか無駄な事考えないで。もう因果の糸は結ばれてしまった」

「うんうん！ 似てる似てる！ 口調もソックリ！」

「あのコまったく緊張感がないな」

「??? どういう事だよ、キズナ？」

「シヤナって小説の中の登場人物なの。この子、その真似して遊んでるのよ」

「遊びじゃない！」

「あはは。またまた。ムキになっちゃって」

ここまでなら、まだ笑い話ですんだ。だが・・・

「じゃあ証拠見せたげる！ 行くわよ！」

シヤナがそう言い終わったと思いきや突然シヤナ、レイジ、そして士の足元が光り出した。

「ちよっ・・・士君、それ何ですか!？」

「俺に聞くな!何だこれは・・・」

「えっ!?ちよっと・・・うわあ!」

足元の光が3人を完全に包み込んだかと思いきや・・・その場から消えてしまった。

「えっ、士君!士君!」

「士・・・士!」

「!・・・・・・3人が消えちゃった」

これがこの世界でのプロフィールである。少々長すぎたかもしれないが、本当にこれは始まりに過ぎなかったのである。

第0章 夜の購買部（後書き）

電撃学園は一部の人から電撃版デイクイドと呼ばれているようで今回僕がこの作日をかいてみたのもそれがきっかけです。

感想、誤字脱字の指摘等宜しくお願いします。

第三種接近遭遇（前書き）

キーワードは

？夏休み最後の夜

？園原中学校

？夏のプール

因みに今回出てくるライダーは・・・本編で！

第三種接近遭遇

園原中学校屋外プール。

外はすっかり真っ暗。本来ならこんな時間帯に人がいるのはあり得ない筈。だがそこには二人の男子と女子らしき姿があった。

バシャバシャバシャ・・・

「ほら、つかまって。ここなら」

「・・・っ」

「!あ、わ、うわ!あの・・・」

「はなぢ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うわあああああああああああ

あああああッ!!」

「あああああ……って、アレ？」

「どうやら、何処かに飛んだみたいだな」

「ここ何処だよ!? 学校？」

レイジと士が立っていたその場にはレンガ建てと思われる学校の校舎があった。士は幾つもの異世界を旅してきたのでさほど驚いてはいないが、レイジはそんな経験は全く無かったので驚くのも無理はなかった。

そんな中、シャナはそんな二人の事を少しも気にせず、

「言ったでしょ、世界を守るって。さっき見えたはず。二人の出逢う場面が。私達は絶夢という存在から「夜のプール」を守る」

「大体分かった。要はその絶夢とかいう奴を倒せばいいんだろ」

「そういう事よ門矢士。アンタも分かった？」

「分かんねーよ! 絶夢って何だよ! もうちょっと分かるように説明してくれよ!」

「そんなヒマない」

「少年、先ずはこの娘の指示に従っておくのが得策だぞ。この異世界に放り出されてもいいというなら話は別だがな」

「異世界？・・・ってペンダントが喋った！？何だよこれ最新型の携帯！？」

「コイツまるで緊張感がねえな」

「・・・はいこれ。自分の身は自分で守るの」

そう言うとシヤナはレイジにかなり大きめの剣を渡した。刃先が結構長く、真っ直ぐに立てるとレイジと胸元と肩の間くらいの長さだった。

「何だよこの剣？」

「それは『ブルートザオガー吸血鬼』。あなたの護身用の武器よ。ただ・・・門矢士、あなた用のものまでは用意していなかったけど、何とかなるわよね？」

「ああ。俺に出来ないことなどない。・・・写真を撮ること以外はな」

「おい、アンタ。さっきからその子の言っている事にまったく動揺していないけどなんでだよ」

「グダグダ言うよりは素直に言う事を聞いて早く終わらせた方がいいだろ？」

「そりゃあそうだけど・・・ああ、はいはい。やりますよ、やればいいんですよ」

「最初からそう言えばいい。さ、この世界の何処かに絶夢の手下がいるはず。そいつを倒すの。分かった？」

「ああ、大体分かった」

「よく分かんねーけど・・・やりゃあいいんだろ？」

その頃、その校舎の裏側には彼らとは異なる、また別の世界の人物がいた。

「ここは一体・・・今まで行った所の何処とも違うみたいだな。そういうばアंकが・・・いない!？」

その青年は辺りも見回してみたがいつも傍らにいる少し口が悪く、また少し事情があって普通の人間ではないアイツがいない。

手持ちのものを確認してみると・・・

「よかった。明日はあったみたいだ・・・あとは・・・」

一通り自分の持ち物を確認する。腹部に当てるの同じ大きさの穴が3つ開いたもの、そして赤や緑等のメダルが24個のくぼみ全てに埋めであるケースがあった。

「あれ、これは確かアंकが持ってたはずなんだけどな・・・」

疑問に思いつつも、現状を把握するために独自にこの世界の事を調べる事にした。

その一方、三人は・・・

「とりあえずこっちの側にプールはなさそうだな」

「ああ。向こうにちよつと気になる防空壕みたいなところはあったが・・・今は入れそうにないな」

「ロックを解除する為のカードを探す必要があるやもしれんな」

「・・・向こうへ行くわよ」

隣の画一された区域には体育倉庫や水量調節の部屋があり、なにより存在感を露わにしているのがその区域のど真ん中に大きく設置されている屋外プールだった。見た目からして何も以上はなさそうだった。だが・・・

突然プールの水位が下がり始めた。その速さは早くものの数秒も経

たない内にプールの水が完全に無くなってしまった。

「ん？何かさっきと見た光景が違うな」

「水が無くなってる・・・元に戻さないと物語が変わってしまう！」

「物語が変わるって・・・何か都合が悪いのか？」

士は呆れて、

「お前、ちょっとは頭を働かせろよ」

「うるせーな」

「仲間割れをしている場合ではない。それに、都合の悪いどころの話ではない。あの二人の出逢い・・・「夜のプール」が守られなければ大変な事なるのだ」

「この場面があったから、後に何か影響があるかもしれないって事だな。確かにこの場面が無くなったら、先が変わっちまうかもしれないって事だ」

「なるほど・・・じゃあ、水道の元栓を探さなきゃな」

「その通りよ。この近くにあるはず。二人とも急ぐわよ！」

3人が入ってきた方向から見て右側の奥の方のに小部屋があった。太い2本のパイプと幾つかのメーターが設置してある機械が置いて

あることから察するに、バルブ室なのだろう。

「さて、ここの調整をして・・・ってハンドルがないぞ！」

「すぐ気付けよ」

「誰かが外したのね。早く探さないと！」

「ちょっと待てよ」

「どうしたんだよ士。早くしなきゃいけないんだろ？」

「だからって当てずっぽうでくまなく探す気か？」

「それは・・・」

「何が言いたいのだ、門矢士？」

「この下を見てしろ」

士が指さす先。そこには・・・

「あっ！これは」

「『灰色のカードキー』・・・みたいね」

「あの防空壕を開ける為のものやもしれん。とりあえず持っていた方がいいだろう」

「・・・じゃあ行きましょ！」

3人がプールサイドから校舎サイドへ走って行き、辿り着く直前、

「あゝ?」

と向こう側から来た青年がその勢いで怯んだような姿勢でこちらを見ていた。

「誰だアイツ?」

「!まさか・・・アイツがこの世界での絶夢の手先!？」

シヤナはすぐさま夜傘を身に纏い、刀を構える。同時に青年は両手をあげる。

「えっ、ちょっと!そんないきなり刀をこっちに向けるなって!」

「お前誰、絶夢の力でここに来たの?」

「絶夢?何それ・・・」

「惚けてるの!？」

「本当に知らないって!俺だって何時の間にかここに來ていたんだから!」

その時士は背景ロールを思い出した。あの絵の中に1つだけ自分が見覚えのない紋章があった。

「(まさかコイツ、仮面ライダーなのか・・・?)」

「シャナ。疑いは晴れぬが、このようにオドオドしている様なヤツが絶夢の手下とは思えん。それに殺気の様なものも感じられん」

「でも、油断は出来ない」

「どうすればあの人が絶夢と関係あるかを証明できるか・・・」

そこへ・・・

「ウウウウウウ~~~~」

「グウウウウウ~~~~」

と全身ミイラの様で頭部の一部だけが何故かぽっかり空いている不気味なやつらがこっちにゾンビの様にフラフラな足取りで向かってきた。

「な、何だよアイツらは！」

「ヤミーだ。それも屑ヤミー」

そう青年は腰にバックルを付け、先程のホルダーから赤と黄色と緑のメダルを取り出してバックルにはめ、右腰に現れた円盤状のものをバックルにスライドさせた。

「変身！」

—タカ！トラ！バツタ！—

ータ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！

そんな少し変わったメロディが聞こえたかと思ったら青年の姿が変わった。

仮面ライダーオーズ、タトバコンボになったのである。

「なっ！？」

「姿が変わっただと！？」

シヤナとアラストールの驚愕を余所にオーズは屑ヤミーの元へ。

折り畳まれていたトラクローを開いて屑ヤミーを攻撃する。

「はあっ！やあっ！」

攻撃により倒れるものの、再び起き上がってくる。正にゾンビのようだ。

「はあ、やっぱり普通の攻撃じゃダメか」

そう言うతోオーズはメダジャリバーを構え、開いている挿入口へセルメダルを3枚入れてレバーを押す。そしてオースキャナーでセルメダルを読み込んだ。

—TRIPLE！SCANNINGCHARGE！—

その発生音と共に目の前にいたヤミーを一気に切りつけた。

「セイヤ~~~~~!!!」

屑ヤミーとともに周辺の空間が切断され、次の瞬間空間だけが元に戻り屑ヤミーは4体とも爆死した。

「ど、どうかな。これで信用してもらえる？」

オーズが変身を解除しながら尋ねる。

「うむ。少なくとも我らの敵ではない様だな」

「でも・・・」

「大丈夫だ」

そう口を割ったのは士だった。

「どうしてそんな事が言いきれるんだよ」

「コイツは仮面ライダーだ」

「仮面ライダー？」

「まあ、お前らと同じく世界を守る為の存在・・・ってトコだ」

「……分かった。今はとりあえずお前の言う事を信じる。お前、名前は？」

「俺は火野映司。はあ、良かった信用してもらえて」

「良かったじゃない！こうしている間にも世界の改編は進んでいるのよ。さ、早く防空壕に行くわよ」

「さて、行くか」

「「ああ、ちょっと待ってよ」」

防空壕へ向かう4人。しかしこの時、プールサイドの片隅でとある卵が複数、増殖して大きくなっている事に誰も気付いていなかった。

第三種接近遭遇（後書き）

更新がちょっと遅くなったかな。

という訳でこの世界で出てきたライダーは
オ~~~~~~~~ズ！！（鴻上さん風に）でした。

ディケイドの変身は次回か2話後になります。

第三種接近遭遇？（前書き）

遅くなっちゃった・・・

第三種接近遭遇？

「少年、先程のカードキーを」

「ああ」

士が見つけた灰色のカードキーをセキュリティゲートに縦にスライドする。すると、ゴゴゴ、という鈍い音と共に基地の扉が開いた。

「やった！」

「行くわよ」

基地の中には六角形の形をした柱の様なものが3つ建っていた。

「へえ、中はこうなっているのか」

「あれ何だろうな？」

「恐らく転送装置の一種であろう。あれを使えば別の階へ移動できるはずだ」

「へえ、アンタ物知りなんだな。それにしても、何で学校の中に秘密基地みたいなものがあるんだ？」

「防空壕よ。戦争中に敵から身を守る為のもの」

「敵って・・・まさか俺達に攻撃してくるのか!？」

「あくまでこの世界での話よ。私達には関係ないから大丈夫」

3本の転送装置のうち、真ん中は電気が通っていないらしく、右側のは入り口で使ったのは別のカードキーが必要らしい。よって、使えるのは必然的に左側のだけという事になる。

幸い電気は通っているらしく、使える様だった。

地下1階。降りた場所には対になる様にもう一つの転送装置があった。

「こっちは・・・」

「敵がここに来る事を予想してあんのにそう簡単に通すわけがないだろ」

「それもそうか」

「部屋は四隅にちょうど4つ。こっちの人数も4人。何が言いたい分かるわね？」

「うん。各自一人一部屋ずつ調べるって事だね」

「そういう事。何か使えそうなものがないかを調べて再びここに集合よ。あまり時間はかけていられないわ。急いで」

「ああ」

「うん」

「了解」

各自4隅に散った。

「それにしても防空壕っていうから散らかっているのかと思っていたけど、案外片付いているんだな」

火野映司はオーズになる以前、海外で様々な活動をしていた為こういったものに詳しくかった。

「でも、使えそうなものは・・・なさそうだな」

かくして再び集合した4人。

「どう？使えそうなものはあった？」

「いや、さっぱりだ」

「俺の方も、コレっていうものは・・・」

「そう。レイジは？」

「一応部屋の床にこんな物が落ちていたけど・・・」

そう言いながらレイジが差し出したのは防空壕入り口で使った灰色のカードキーの色違いである黒のカードキーだった。

「もしか、それがもう一つの転送装置の起動キーなのかもしれぬな」

「善は急げよ、レイジ」

「ああ」

転送装置に黒カードキーをスライドし、システムは稼働した。

その勢いで地下2階に降りる。

装置から出た途端、シャナは即座に後ろを向いた。

「?どうかしたのかシャナ？」

「・・・いる」

「え？」

「うむ。あの壁越しに何者かが潜んでおるな」

「なら、とっとと行くか」

左上の扉から入ろうとするがロックがかかっているのか開かない。

「仕方がない。他の道を探すわ」

「普通に扉を壊せばいいんじゃないのか？」

「そうはいかない。この場所は後々に重要になってくるから」

「どこかダクトから入れる場所はないかな？」

「ダクト？」

「うん。さっき上の階でダクトが開いててそこからパイプに入れる所があったからさ」

「・・・皆、急いで通れそうなダクトを探すわよ！」

4人で一気に右上の部屋を調べる。

「あった！」

「うむ。あのダクトなら開けられそうだな」

「おっし、一気にやるか。レイジ、それと火野！」

「「ああ！」」

引っ掛かっているフックに力を込めて、

「「せいのっ！！」」

ガシャン！！

という音と共にダクトが外れた。

「よっしゃ！」

「行くわよ！」

パイプは土や映司でも少しかがめば通れるほどの大きさだった。

問題の部屋に通ずるパイプの直前でレイジが足をとめた。そのすぐ

後ろをついていたシャナ、士、映司はずっこけた。

「何で途中で止まるのよ!」

「・・・何か黒服の男が二人いる」

「多分私達を感じた人の気配は奴らね。さっさと片付けるわよ!」

「なら、俺達も」

「いいえ、ここは私とレイジだけでやるわ!」

勢いよくダクトから出て刀を構えるシャナ。レイジも後ろから押されて一瞬怯んだものの、すぐに態勢を立て直して吸血鬼ブルートザオガを構える。黒服も迫ってきた。

「はっ! やっ! おりゃあ!」

「はっ! やっ! 邪魔!」

シャナはもとより、レイジもようやくこの戦いに少し慣れた様だ。

「「くらえ!」!」

レイジの「兜割」とシャナの「必殺の斬撃」がきまり、黒服二体は煙の様に消滅した。

「よっし！」

「当然の結果ね」

「・・・あっ、これ！」

ダクトから出てきた火野が手にしていたのはバルブだった。

「ようやく見つけたか」

「すぐにプールの水を戻さなきゃ。行くわよ！」

防空壕を出て、校舎を通り過ぎ、プールを迂回しながらバルブ室へと入った。

「このバルブをセットすれば・・・」

バルブをはめ込んで回すと外からジャーーーーーーーー！！！！という水が勢

いよく流れる音が響き渡った。

「よし、これで・・・」

「爪が甘い！ちゃんとこの場面が進んでいるか確かめない」と

「ああ・・・そうだったな」

バルブ室を出た途端、4人の目先を一発の銃弾が通り過ぎた。

「うわッ！！な、なんだこりゃ！？」

銃声が聞こえてきた道をたどると服装を少し着崩した兄貴という言葉葉が似合いそうな体格のいい男が立っていた。しかし、その表情は明らかに何かを企んでいるかのように不気味な笑みを浮かべている。

「お前は！？」

「ヒヒヒ・・・俺だ、俺。えゝのゝもゝと」

「榎本・・・お前の出番は伊里野加奈が泳ぎを覚えてから。お前はまだ現れてはいけない者。それにこの世界の人間はこんな力を持っているはず！」

「頭の回りも早いし隙もないねエ。この世界の人間に化けてりや油断を誘えると思ったのによォ・・・ご明察。俺は榎本の偽物だよ」

「創造物の偽物で世界を改ざんしようなんて許されない。世界のバランスが崩れる」

「絶夢に創造者と同等の能力が備わっている証でもある。厄介な事になった」

「何だよ、その創造者って？」

「・・・」

「お前ら、ちょっとは説明しろよ！」

「敵は目の前よ。そんなの後」

「漸くこいつを使う時が来たって訳か」

そう言いながら士がディケイドライバーを巻いた途端、榎本は静かに笑った。

「何がおかしい？」

「残念だが・・・お前らの相手は俺じゃねエ・・・仮面ライダー君」

「!!」

「お前が何でそれを!!」

士がそう言いかけた次の瞬間、校舎の端で大きな水風船が破裂したような音が次々と聞こえた。

「何だ!？」

士と映司が振り返るとそこには多くの2種類のヤミー、ピラニアヤミーとウナギヤミーがいた。

「コイツらが俺の相手ってか。上等だぜ、変身!」

—KAMENRIDE DECADE!—

カードを装填し、勢いよくバックルを閉じる。すると九つのヒオリーメントが重なり、仮面ライダーディケイドへと姿を変えた。

「なっ!？」

「うおっ!?! 凄っ!」

「おお、バーコードピンクだ」

映司の言葉にディケイドはずつこけた。

「誰がバーコードピンクだ! コレはマゼンタだ!! お前のさっさと

変身しろ!!」

「ああ」

映司もドライバーを装着し、メダルを3枚はめる。だがこの時真ん中は黄色ではなく黄緑色だった。

「変身!」

一タカ! カマキリ! バッタ! —

その音声と共に映司はオーズの亜種形態の1つ、タカキリバに変身した。

「おい、あん時の変な歌はどうした?」

「あ、ああ・・・アレ、いつもする訳じゃないから・・・」

「まあいい。行くか!」

「私達も行くわよレイジ!」

「ああ!」

第三種接近遭遇？（後書き）

ふう、やっと終わった。

今回は戦闘描写ですが敵がそれほど大した実力ではないという設定にしているのでそれほど長くはならないと思います。

それとウナギヤミーですがサメヤミーと同じく二本足があって人の様なスタイルをしています。

では。

第三種接近遭遇？ 戦闘（ライダー編）

「チマチマした相手は苦手だぜ。オーズ、ピラニアの方は頼んだぜ」
「うん、分かった」

二人はそれぞれ相手にする方へと向かって行く。それぞれがライドブッカーとカマキリソードを構えて。

「はっ！」

剣先でウナギヤミーを一匹、二匹、三匹、四匹と斬りつけていったが、五体目に腕から伸びた触手を絡みつけられ、電流を流された。

「うわっ！」

「士さん！」

「俺の事は気にすんな！チツ、そっちが電気ならこっちも！」

拘束されている身で足掻きながら別のカードを装填する。

「変身！」

—KAMENRIDE BLADE!—

そして青いヘラクレスオオカブトの絵が描かれた壁の様なものが出現し、ディケイドを囲んでいたウナギヤミーは吹き飛ばされた。

「なっ！」

「ええ！？嘘オ！？まったく別の姿に変わった！？？」

「お前は目の前の敵に集中しろ。さて、ウナギか。俺が一丁前に料理してやるとするか」

—ATTACKRIDE MACH!—

—ATTACKRIDE BEAT!—

素早く2枚のカードを装填し、ウナギヤミーの腹部を一匹ずつアッパークットで飛ばしていく。そしてディケイドの姿に戻り、

「仕上げだ。蒲焼きにしてやるぜ」

—FINALATTACKRIDE DE DE DE DECA
DE!—

ウナギヤミーがディケイド視点で丁度一直線上に並んだ所へ黄色いディケイドのクレストが描かれた十のディメンジョンが現れる。高く跳び上がり、ディメンジョンを通過してウナギヤミーを蹴りつけ

ていく。ディケイドの必殺技の一つ、「ディメンションキック」が炸裂した。

そしてスタツと地上に着くディケイド。

「まあ、こんなもんか」

とパンパンと手を二回叩いた。

一方、オーズは・・・

数多くいるピラニアヤミーに手を焼いていた。何しろ元となる生物のピラニアは好戦的で、大群で獲物をしとめる習性があるのだからいくら怪人となってもその習性は変わらない。

「やっぱりこいつらに対抗するなら・・・」

オーズは左腰のメダルケースから緑色のクワガタムシが描かれたメダルを取り出し、左のタカのメダルと入れ替えてスキャンした。

一クワガタ！カマキリ！バッタ！一

一ガータ、ガタガタキリッバ！ガタキリバ！一

虫系のメダルのコンボガタキリバにコンボチェンジしたオーズ。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおお！！！！！！！！！！」

その強大なる力ゆえに雄たけびをあげるオーズ。力のオーラがディ

ケイドやレイジ達にも伝わった。

「なんだ、コイツは!？」

「凄い力を感じるぞ」

「少年、油断するな！」

「あつ、ああ。そうだった・・・」

見るとピラニアヤミーがフェンスを越えてプールに侵入しようとしていた。

それを阻止する為にオーズはガタキリバの能力、分身能力を使って応戦する。迫りくるオーズにピラニアヤミーも迫る。あるものは足に、あるものは腕に、あるものは顔に噛みつく。その攻撃に一体はバッテリーで、あるものはカマキリソードで、またあるものはクワガタヘッドの電撃で攻撃する。

「仕方ない。少し手伝ってやるか。変身」

— K A M E N R I D E K A B U T O ! —

「一瞬の下ろし技をお披露目するぜ」

— A T T A C K R I D E C L O C K U P ! —

ライドブッカードソードモードを右手に、刃先が下になるよう構え直して一瞬のスピード技が始まる。

シャキン！シャキン！とカブトクナイガン独特の切れ音がする。

結構な数がいたピラニアヤミーも二人との戦闘で数が半分ほどに減った。

すると残ったピラニアヤミーは集束し、一体の巨大ピラニアヤミーを形作った。

「士さん。最後は俺がキめます！」

「ああ、任せるぜ」

分身したオーズ各自がオースキャナーで再びメダルをスキャンする。

— SCANNING CHARGE! — SCANNING CHARGE! —

— SCANNING CHARGE! — SCANNING CHARGE! —

一斉に分身したオーズが巨大ピラニアヤミーに向かって行き、各自がキックを繰り出す。

オーズガタキリバコンボの必殺技、「ガタキリバキック」がきまり、分身を解いた本物のオーズ一体が地上に戻り、変身を解除した。しかしそれと同時にバッテリーと倒れてしまった。

「おい、大丈夫か」

士が変身を解除しながら火野のもとへ駆け寄っていく。

「お、俺は大丈夫です。それより士さん。そこに落ちてるメダルを拾うの手伝ってくれませんか。一枚残らず」

「そういや・・・あのウナギもピラニアも攻撃する度にメダル落としていたな。あいつ等は一体何だ？」

「それもあとで話しますから・・・うつ・・・」

そのまま気を失ってしまった。

「おいっ！しっかりしろ・・・ったく。それにしてもなんなんだこのメダルは・・・」

第三種接近遭遇？ 戦闘（レイジサイド）（前書き）

今回結構短めになりそう。

そもそも相手が元々戦う様なヤツじゃないからなあ・・・

第三種接近遭遇？ 戦闘（レイジサイド）

シャナの日本刀、そしてレイジの吸血鬼^{ブルートザオガー}。

その気迫にも屈することなく、偽・榎本は

「めんどくせえなあゝゝ・・・」

とぼやきつつも、ミニグレネードとマシンガンを構える。

「はっ！」

「くっ！」

「後ろがから空きよ」

「何!？」

「はあっ！」

レイジに集中していた偽・榎本は背後からシャナの「炎の斬撃」を受けた。

「うおっ！」

と、ここまでは順調だった。

が・・・

「はあ、仕方ねエ。ちよっくら助っ人を呼ぶか」

そして右腕をあげて指をパチンと鳴らした次の瞬間、何時の間にも、そして何処に潜んでいたのかあの防空壕の中で遭遇した黒服の男達が集まってきた。「達」というだけあって1人や2人ではない。そう多くもないがざっと数えただけで3、40はいた。

「そう大した事はないと思ったが、案外手間がかかりそうだぜ。野郎ども、各自位置につけ」

その指示どおり、黒服は4人一組にかたまった。

「敵が一気に増えたわね」

「うむ。背中あわせに戦っているのはハチの巣にされるやもしれぬ」

「レイジ。アンタは榎本と戦いなさい」

「えっ!？」

「これだけの大人数でも見た感じじゃ戦闘能力はそんなに高くない。でも私の足手纏いになるのだけは困る」

「何だよその言い方」

「いいから！あの黒服達は私がまとめて相手をするから、アンタはてっぺんを潰しなさいって言ってるの！」

「・・・はいはい」

「お喋りはその位でいいのか？」

「ええ。十分すぎる位よ」

「そうかよ。野郎ども、かかれ！」

「アンタ達の相手は私一人で十分よ！」

剣先の炎で黒服達を圧倒していく。

「おりゃあ！」

「甘いつ！」

「なっ！？うわっ！」

偽・榎本との一騎打ちになってからは形勢が逆転していた。榎本のちょこまかとした動きもあるが、大本の原因はレイジの戦闘経験の少なさにあるだろう。彼自身、戦いに巻き込まれた立場であり、状況が判断しきれない事。

そして彼の武器、ブルートザオガー吸血鬼について。

その大きさ、その長さ、そしてその重さ。レイジが引きずっていることから分かる様に、両手で持ってもそれ自体がかなりの重さがある。それゆえ一撃一撃の攻撃は強めで攻撃範囲も広いが、小回りが利かず、怯んだり転んだりした時、他者と異なり態勢を立て直すのに時間がかかる。そこをまだ戦い慣れていないレイジは克服できていない。

「ヒヒヒ・・・あの譲ちゃんがいなけりや、手も足も出ないってか？」

「そんな訳あるか！」

「威勢はいいんだな。その勇氣は認めてやるよ。ならその勇氣を称賛して俺が最後に輝かせてやるよ」

何をするのかと思いきや、

「野郎ども、コイツをしとめろ！」

自身の戦闘によって25体ほどの黒服を倒したシャナ。そんな所へ、

「野郎ども、コイツをしとめろ！」

と、偽・榎本の声がした。

「何なの、一体」

「・・・シャナ、奴らの狙いはあの少年だ」

「!!」

気付いても時既に遅し。残った黒服がレイジを中心に取り囲み、バズーカ砲を構えている。しかも当のレイジはまだ吸血鬼ブルートザオガを使いきなせていないのか、態勢を維持できていない。あれでは一方の攻撃を防げたとしても残りの方向から袋だたきに遭う事は目に見えている。

「レイジ！」

「野郎ども、やれ！」

レイジはこの時、死を覚悟した。

その時、

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおお！！！！！！！！」

と火野映司の雄たけびが聞こえた。

「なんだ、コイツは！？」

「凄い力を感じるぞ」

「少年、油断するな！」

「あつ、ああ。そうだった・・・」

敵がその瞬間もオーズの雄たけびで怯んで動かずにいたのが幸いした。

ブルートザオガー
吸血鬼を構え直して偽・榎本を一直線に突っ込む。シャナもその間に黒服を切りつけていく。気付いた者もいたが既に後の祭り。

「レイジ、そいつで最後よ！」

「くらえ~~~~~!!!!!!」

精一杯飛び上がり、力を振り絞って吸血鬼を降り下ろす。ブルートザオガー
「兜割」
がきまった。

「ハア、ハア、ハア・・・」

「ヒヒヒ・・・絶夢の力も、まだ大した事ねエか・・・ああ・・・
クソったれめ・・・」

そう言い残して偽・榎本は煙の様に消えた。

「始まるわよ」

「はぁ？始まるって何が？」

「さっきの続きよ。ほら」

「あのさ、もしよかったら教えてあげるよ、泳ぎ方。これに捕まっていれば溺れたりしないから。あのさ、水に顔つけられる？」

白いビート板を使いながら男子に泳ぎを教わる伊里野。

「凄いよ。この調子でいけば来週は水泳部のエースだ。じゃあそろそろビート板を卒業だ。大丈夫だって。もう一人で泳げるって。もうビート板なんかあってもなくても一緒だよ」

「・・・・・・・・・・」

「あ・・・あのさ。それじゃあ先ずは僕が手を捕まえてやるからさ。それなら平気でしょ」

「あ！アイツ『僕が手を捕まえてやるからさ』・・・とか上手いこと言っちゃって。女の子の手、握ろうとしているぞ。やゝらしく・・・い！？」

「しいゝ・・・邪魔しちゃダメ。次が肝心なんだから」

伊里野の手首の辺りには藍色の球の様なものが埋め込まれた様にあった。

「痛くないから・・・何でもないから・・・」

「・・・・・・・・・・」

「舐めてみる？電気の味がするよ・・・」

「どう？見たでしょ、お前がこの世界を守った証を」

「俺が世界を守った？」

「そう。創造者が魂を込めて用意した最高のシーン」

「最高のシーン・・・？でもあの女の子は確か・・・」

「さあ、もどるわよ」

「ああ・・・ところであの二人は？」

サイドの壁に行くと、突っ伏した火野映司。そしてそんな彼を余所に懸命にメダルを集めている門矢士が。

「アンタ一体何やってんだ！人が倒れているのに」

「しょうがねえだろう。コイツが切羽詰まってメダルを全部拾ってくれっていうからよ」

彼の両手には銀色のメダルが一杯で零れ落ちても無理のない数だった。

「お前らも手伝え」

「はぁ！？何でそんな事」

「コイツを置き去りにする気か」

気絶している映司を顎で指す士。

仕方なく、シャナとレイジで分担し、火野をおぶった士。

「じゃあ帰るわよ」

購買部の時と同様に足元が光り、4人はその場から姿を消した。

第三種接近遭遇？ 戦闘（レイジサイド）（後書き）

伊里野の世界やっと抜けた。

やっぱり短いなあ・・・

原作ではエンターテイナーという言葉を使っていますが、何となくしっくりこなかったのでその部分は「創造者」という言葉を代替で使っています。

次回は電撃学園のメンバーの交流（？）と、S章の「狼と香辛料」をやってから2つ目の世界へと行きます。

感想をお待ちしております。

今起きている現象（前書き）

前回と違って今回かなり長い。

今起きている現象

あの図書室へ戻ってきた4人。

「士君！」

「士！」

「レイジ！」

夏海、ユウスケ、キズナが駆け寄ってくる。

「一体何処に行ってたんですか。それとその背負っている人は誰ですか」

「ねえ、何そのメダル？レイジも何処行ってたのよ」

「一気に質問するな。とりあえずこいつを寝かせろ」

「大丈夫なんですか、この人」

「ただの過労だ。寝かせておけば時期に目が覚める」

火野映司を横にした後、士、レイジ、シャナは関わった出来事を話

した。

「・・・で、小説の世界へと行って物語を変えようとしたのを止めてきたっていうの？」

「まあ、そんなトコだ」

「そいつは絶夢の手下らしくてさ・・・ホントだって！」

「分かった分かった。信じるわよ」

「コロツと態度が変わったな」

「??? 何だよ突然。さっきまで全然信用しなかったクセに」

「だってレイジの後ろに・・・」

皆が振り向くと、本棚と本棚の間からなんと伊里野加奈が現れたのである。世界で見た時はプールにいたのでよく分からなかったが、腰まで届く薄紫の長髪の様だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なっ！嘘ォ！？」

「ハア、やっぱり連れて来ちゃったみたいね」

「創造者の創造物が互いに引き合うという話は真だったようだな。その引き合う力は異世界の壁すらも越えるか」

「ずっと言ってる異世界とか創造者とかって一体何の話だよ」

「ホントに、小説の世界・・・作り物の世界が実在するっていうの？」

「そんな訳無いだろ。小説はそれをかいた人が作った作り話なんだからさ」

そこで口を割ったシャナ。

「お前は世界が自分の暮らすこの世界だけだとも思っているの？世界は私達の世界から僅か5分の距離に、他の世界もまた異なる接点で幾つも無限につながっている」

その頃、

?????????—

「やっぱり元々戦闘能力のない榎本だとコピーの力もたかが知れているね」

「でも俺達はそうじゃねえ。ひやはははははは！絶夢のヤツも知恵つけてんな」

「僕達が相手なら彼らにも楽しんでもらえると思うよ？」

「やつらの墓8人分、おっ建ててやろうじゃねェか。俺達の手で！
ひやははははは！」

電撃学園Ⅰ

「……つまり創造者っていう不思議な力を持った人達が……
無限にある世界の一つ一つを丸ごと創ったって訳ね」

「そう。世界は創造者の作った沢山の物語の集合体。創造者は別の
世界の出来事を物語として人々に届ける」

「物語とはそれぞれの世界とそこに存在する人々の存在そのものだ。
物語によって全ては生まれ、世界は世界として、人は人らしく在る
事が出来る」

「そこに絶夢とかいうのが現れた？」

「絶夢は創造者の創り上げた物語を改ざんする。その場で起きた真
実を捻じ曲げ、人々が本来生きるはずだった道を、そこにあった感

「ん、ん！気を取り直して。レイジ、アンタ今までの話分かった？」

「絶夢ってのをとっちめるのに無理矢理協力させられそーになっているのは分かった」

「この学園は世界と世界を繋ぐ通り道になってる。どうしてかは知らないけど。だから世界を守り、人々を救うのはあの時あの場所に居合わせたお前たちの運命なの」

「ヘイヘイ分かりましたよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「というかコイツがいるのは話を聞いた限りじゃ仕方ねえ事なのかもしれねェが戦わせて大丈夫なのか？」

「大丈夫。創造者が世界の中心にするほどだから伊里野加奈にも必ず凄い力がある」

「ま、自分の身は自分で守れて事か。言われるまでもないが」

「・・・で、次はどうするの？」

「次はこの世界へと行く」

そう言ってシャナが差し出したのは着飾らず旅人の様な恰好をして右手に拳銃を構える少女が描かれたもの。

「キノの・・・旅？」

「じゃあ私はこの本を読み返して後で色々教えてあげるから、その間にアンタは準備とかしておきなさい」

「んじゃ、お言葉に甘えさせてもらうか」

購買部に行くと荷物の下ろし役という感じの男が購買の前に立っていた。

「あれ、アンタは？」

「俺はロレンスという行商人なんだが気が付いたらどういいう訳かこんな所にいたんだ。聞けばここは別の世界とやらで今、商いをする者がいないそうじゃないか。他にする事もないから暫くここで商売させてもらう事にするよ。何か必要なものがあつたらいつで俺に言ってくれ。可能な限り力になるよ」

「そいつはありがたいな」

そこへ、席の方にいたシャナが指でこっちを誘った。

「何だよ？」

「今、絶夢の事で分かっているのは創造者の創った世界を改ざんしようとしているって事だけ」

「改ざんされ、人々から感動の失われた世界が滅びる。それは確かなのだが・・・何故絶夢が世界を滅ぼそうとしているのか、その理由は分からぬのだ」

「本当の事を言えば、絶夢が個人の名前なのか、或いは組織の名前なのかすら今の私達には分からないの」

「正体も目的も不明。まさしく謎の存在なのだ」

購買を出て教室に行こうとすると、廊下に浅羽直之がいた。

「あっ！」

「すみません。あの・・・ここ何処ですか？」

「お前、夜のプールで伊里野に泳ぎを教えた・・・」

「???? どうしてそれを!?!」

「ああ、それはだな・・・」

レイジは浅羽に今までの出来事を話した。

「はあ。絶夢に創造者・・・それに別の世界・・・ですか・・・」

「(それにしても創造者の創造物が引きあうって話は本当なんだな。って事は他の世界のやつらもこれからどんどん現れるってことか)ところで伊里野は?」

「伊里野なら、教室にいますよ」

「そっか。サンキュ」

教室に入ると伊里野は一人で呆然と何もせずに教室の窓際にいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「伊里野もさ、突然別の所に連れて来られて困ってるだろ?もし不安な事があったらオレに・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ あっちいけ」

「・・・・・・・・ はあっ!?!」

「あっちいけ」

「何だよそれ！俺は仲間だと思って親切心で・・・・・・・・ハイ分かったよ。余計な世話焼いて悪かったな」

そのままガツクリと頭を垂れたまま、外へと出る。

外には満開の桜が4本咲いていた。その一角には坂井悠二がいた。

「・・・・・・・・」

「やっぱ創造者の創造物が弾きあうって話、本当なんだな。あんた、シャナの知り合いだろ？」

「・・・・・・どうして君がシャナの名前を？それにここはどこ？」

「まあまあ、そう身構えないでさ。実は・・・」

と浅羽の時の様に話をする。

「絶夢がすべての世界を滅ぼす・・・その事件にシャナとアラストールが・・・？」

「そういう事。でも別の世界だっていうのにあんた随分落ち着いているんだな」

「落ち着いてるのかな・・・？シャナと出逢ったおかげでこういう事に慣れたんだろうね。ん？そういえば君のポケットに入っているしおりって・・・」

「しおり？・・・あつ、そういえばあのでっかい剣は何処に行ったんだ！？」

「でっかい剣って・・・ブルートザオガー吸血鬼の事？」

「そうそう。シャナから護身用に渡されたんだけど・・・何処に行っちゃったんだ」

「まあまあ、落ち着いて。そのしおりに変わっているだけだから」

「そんな訳無いだろ！両手で持っても引きずっちゃまうようなものを・・・」

「まあまあ、今度は僕の話聞いてよ」

そんな訳で今度は悠二がレイジに話をした。

「・・・つまり念じる事であのでっかい剣がしおりになるってことか？」

「まあ、簡単に言えばそういう事かな」

「でもコレあんたのなんだろう。だったら返した方がいいんじゃない・・・」

「いや、僕は多分シャナと一緒に戦いにはいけないだろうし、何より今それが必要としているのは君なんだし」

「そっか・・・そうだな。アリガト。戦いが終わったらちゃんと

返すからさ」

「うん」

一方、士達は・・・

「士君。今までの話を聞いた感じだと何だか私達がやってきた事に
凄く似ていますよね」

「似ているつつうかまったく同じだろ。時に世界を救う為に戦い、
時に破壊者として物語を紡ぐ為に全てのライダーを破壊したり・・・
な」

そこへ気を失っていた映司が目を覚ました。

「あれ？ここ何処？」

「やっと気付いたか」

「あれ？俺は確かプールで気絶して・・・」

「その世界から出たんだよ。全く、随分と寝ていたみたいだが・・・
」

「そっか。ありがとう」

「別に礼を言われるほどの事じゃない。それより俺もお前に聞きたい事がある」

「ああ・・・俺が答えられる事なら・・・」

「じゃあまず・・・」

と本題に入ろうとした途端、バン!と向こうの扉を乱暴に開ける音が聞こえた。

「きゃっ!」

咄嗟に身構える士とユウスケ。だが・・・

「アंक!?!それに比奈ちゃん!?!」

「映司君!」

「おい映司!ここは一体何処だ?それとお前、俺のメダルケースどこやった・・・・・・というかこの大量のセルメダルはどうした」

「アंक、一気に色々聞くなって!」

「なんかややこしいのが来たな、士」

「・・・・・・」

「どうしたんだよ士?」

「いや、何でもない。(気のせいかな?あのガラの悪そうなやつ、何

処かで会った事があった様な・・・」

その後、各々の事情を話し、何とか状況を理解した一同。

「要するにその絶夢ってヤツが俺達を呼び寄せたつつうのか」

「まあ、どうやらそういう事らしいね」

「つうか、何でお前が俺のメダルケースを持っていたんだ？」

「さあ、俺にもサッパリ・・・」

「・・・まあいい。そいつはお前に預けとく」

「えっ!？」

「今回お前は大量のセルメダルを稼いできた。お前にしちやあ上出来だ。それにメダルがなけりゃオーズとしては戦えない」

「アंक・・・」

「だが勘違いするな。俺はお前を信用している訳じゃない。そいつを預ける以上、責任もある。何せ俺の命を預けるのと全く同じだからな。失くしたり奪われたりしたら承知しねえぞ!」

「・・・分かった」

そこへ、シャナ、伊里野、そしてレイジが入ってきた。

「そろそろ次の世界へと行くわ」

「ちょっと待って」

そう言ったのは春日井キズナだった。

「どうしたの？」

「実はレイジが図書室を出る前にコレを落として言ったんだけど・・・」

「コレって・・・『狼と香辛料』？」

「そう。なんだけどね、どうも普通の本じゃないみたいなの」

「どういう事だ？」

「ちょっと見てみて」

本を見てみると表紙は至って普通だが、側面のタイトルが書かれている面が赤黒かった。つい先程行ってきた伊里野の本は真っ赤なのだが。

「・・・うわっ！何だコレ!？」

突如、『狼と香辛料』が蝕まれ始めた。まだそれほど速くはないが、確実に侵食を始めている。

「相当に異常な事が起きているみたいね」

「うむ。こちらの世界の問題を解決する事が優先事項かもしれぬ」

「だったら行こうぜ」

「・・・行くわよ！」

「行くってどうやって？」

「こうするのよ！」

「えっ、ちよっ・・・うわあああああ！！！！！」

レイジ、シャナ、伊里野、士、映司の足元が光り、その姿は図書室から消えた。

S章 狼と香辛料（前書き）

キーワードは

？好物はリング

？ムギに宿る豊作の神ホロ

？店を持つ事を夢見る行商人クラフト||ロレンス

？二人の旅が始まる夜の収穫祭

S章 狼と香辛料

一行が降り立った場所。それは一言で言うならば森、しかしただの森ではなく、木々が枯れ果て、まるで世界が壊滅寸前である事を象徴しているかのような光景だった。

「ここは・・・？」

「どうやら絶夢によって滅ぼされた世界の様だな」

「絶夢に滅ぼされた？」

「絶夢の改ざんを止められず、感動が失われた世界のなれの果てよ」

「おい、じゃあこの世界はもう・・・」

「いいえ、まだ希望はある」

「後輩はしていても、完全に消滅していないのがその証だ」

「完全に消える前に『物語の種』を回収できればまだ再生の望みもある」

「何だ、その『物語の種』っていうのは？」

「創造者が物語を紡ぐ核となるものとした、世界の鍵、象徴、感動の源が具現化したものだな」

「この世界の象徴が具現化したもの・・・」

「海東アイツに言わせればお宝・・・って事か」

「とにかくこの世界が完全に消滅する前にその『物語の種』っていうものを見つければいいんだな？」

「そう。でもそれはあくまで再生のきっかけにしかない。でも絶夢を倒せば創造者の力によって『物語の種』を中心に世界は再生するでしょうね」

「んじゃ、早速探すとするか」

至る所に木々が生えている。その中にはまだ青々と葉を付けているものもあったがその何か出てもおかしくない様な雰囲気に加えて空が暗い事がより一層各々の不安を煽らせる。

「何だか寂しげな所だなあ」

「場所が場所って事もあるかもしれないけど人が一人もないし」

「言ったでしょ。これが改ざんを止められなかった世界のなれの果てよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

伊里野は無言の中に微かな怯えを表情で表した。無理もない、下手

をすれば自分の世界だって同じ運命を辿っていたのかもしれないだから。

「絶夢はこんな事を別の世界でもやろうとしてるってか」

「そう。絶夢の改ざんを阻止できなければ全ての世界がこんな風に殺風景に変えられてしまう」

「それにしてもシャナやアラストールの言うこの世界の『物語の種』ってというのは、どういうものなんだ？」

「さっき言ったでしょ。『物語の種』はその世界を象徴するもの。だから世界によってその姿は異なるはず。こればかりは足で探すしかない」

周囲を見渡すと樽やら墓石やら壺やら斧やら色々な物が落ちているが、所々が壊れていたり亀裂が入っていたりで触れても何とも反応がない。

「これも違う……これでもない」

「狼と香辛料……っていうからてつきり毛皮とかそれこそ胡椒とかが入った籠かとも思ったのにそういうものは見つからないんだな」

「或いはそういう商品をのせて運ぶ荷車とかってセンはないのか？」

「荷車か・・・確かに可能性はあるやもしれん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そう言った会話の中にも敵はぼちぼちと出現していた。もっとも現れたのは伊里野の世界の将兵と黒服、それに屑やミーだけだったの
でこの程度なら変身する必要はなかった。そしてレイジの戦いのな
れの訓練としても丁度良かった。

「くらえ！」

これで20体。シャナから見ればまだまだであるが初期に比べれば
少しは吸血鬼ブルードザオガの扱いにも慣れた様だ。

「少しはマシになったみたいね」

「そうかな？」

「まっ、俺に言わせりゃまだただけだな」

「・・・・・・・・あれ」

「ん、どうかしたの伊里野さん？」

「・・・・・・・・荷車」

伊里野が指さす先には車輪や取っ手が少々傷ついているものの、何とか原形をとどめている荷車があった。

「これが物語の種？」

「そう。この世界にもまだ力が残っている。きっとお前にも力を感じる事が出来るはず」

「世界を感じる？」

次の瞬間、目の前が真っ白になり、どこかの映像が脳内に浮かんだ。それは探検を持った体格からして男と思える人物、そして何故か髪の毛の一部が猫耳の様に立っており尻尾が生えている女性が。

「わっちに剣を向けるとは礼儀知らずじゃな」

「なんだと？」

「ん？あ、そうか。脱出成功しとるんじやった。ごめんよ、忘れつつたわ。わっちの名前はホロ。暫く振りにこの形をとったがな。うん、中々上手くいっとるの」

「ホロ？」

「ん、ホロ。良い名前じゃろ？」

「奇遇だな。俺もホロという名で呼ばれるものを一人知っている」

「ほう、わっちゃあわっち以外にホロと呼ばれる者を知らなんだ。そいつは何処の者かよ？」

「この近辺の豊作の神の名だ。お前は神なのか？」

「わっちは神と呼ばれて長い事この土地に縛られていたがよ、神なんて程偉いものじゃありません。わっちゃあホロ以外の何者でもない」

「どう、あなた達のも見えたでしょう？二人の出逢うシーンが」

「まあな」

「ただ・・・ちょっと・・・」

「いきなりだったからちょっと過激な感じで驚いたけどね・・・でもアレがこの世界の鍵になるシーンなんだな」

「そういう事。この世界で私達がやる事はもうないわ。戻るわよ」

そして5人の足元が光り、その世界から消えた。

電撃学園ー

「・・・ふうん、滅ぼされた世界の『物語の種』か。成程ねえ・・・じゃあその種は私が保管しておくわね」

「ああ、頼んだぜ」

「でも絶夢の改ざんで滅んだ世界があるなんてショックだわ・・・尚更急いで絶夢を倒さないと・・・」

「そうだな。他にも滅びつつある世界があるやもしれん」

「その時はまたその世界の『物語の種』を見つけられればいいんだし、きっと何とかなるさ」

「まったくお気楽なやつだなお前は」

「まあまあ士さん。何事もポジティブに考えた方がいいですって」

「で、どうすんだ？今すぐキノとかいうヤツがいる世界に行くのか？」

「すぐに行きたい所だけど・・・5分だけ時間をやるわ」

「えっ、何で？」

「次の世界でへばられたら困るから」

「何だそりゃ」

「うるさい、うるさい、うるさい！さっさと休んで来なさい！」

「へいへい」

レイジがジュースを買う為に購買部へ入ると・・・何故か見覚えのある猫耳をしていて独特の口調で喋る女性が。

「ああ~~~~~!!!!」

「どうかしたのか？わっちの名はホロ。ここは中々面白そうな場所

じやのう。別の世界という事じゃが、長生きはするものじゃ。このような珍しい経験も、まだ出来る。ロレンス共々しばし厄介になる。宜しくな」

「はぁ・・・（本当にこの人が豊作の神様って言われていたのか・・・？）」

「そなたもその事を疑問に思っておったか。賢狼、豊作の神等等・・・皆、わっちの事を好きに呼ぶがわっちはホロ以外の何者でもない。だからそんなに身構えずとも好いぞ」

「そうか・・・」

「まだこっちの世界に着いたばかりで出来る事は何もないのじゃがよ、少し時間がたてばお前さんの手伝い出来るやもしれぬ。しばし時を頂けぬか？」

「慌てる事はないからゆっくりしてってくれよ」

「ありがとうのお。恩に着る」

そして図書室に戻ったレイジ。

「もういいのかしら？」

「ああ、ちゃんと水は飲んできたから。ところでキズナ、次の世界はどんな所なんだ？」

「ああ・・・『キノの旅』って世界はちょっと不思議な世界なの。
喋るオートバイが登場したり、主人公が不思議な国々を旅したり。
で、その主人公の命が危ないの。凄腕剣士と戦うハメになるのよね」

「その主人公つつうのが決闘でも申し込まれたって事か？」

「んー、それとは少し違うんですよ士君」

「じゃあどういう所なんですか？」

「それは行ってみてのお楽しみよ」

「じゃあ行くわよ！伊里野加奈、いい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

伊里野は無言で頷いた。

そして光が5人を包み、図書室から消えた。

S 章 狼と香辛料（後書き）

次の世界で出てくるライダーは・・・

次回のお楽しみです！では。

コロシム(前書き)

キーワードは

? パースエイダーVS刀

? 国王による独裁

? 市民権を得るか 奴隷に堕ちるか

コロシム

丸く囲まれた空間。外側には観客とみられる老若男女問わぬ数多くの人々。そして身長より遥かに高く、薄高く積み上げられた岩場。そしてその空間に立つ二人の人物。一人は刀を構え、もう一人は拳銃を構えていた。

「シズと申します」

「ボクはキノ」

「キノ君か。一つ頼みがあるんだけど」

「何でしょうか？」

「今ここで降参してほしい。認めるから」

「シズさんは市民になりたいのですか？」

「ああ・・・になりたいね」

「こんな腐った国の？」

士達5人が降り立った場所。そこはとある大昔の宿舍の様な場所だった。とはいっても中も非常に汚く、その区域から非常に強い異様な鼻を刺す様な臭いがする。

「一体何処だここは」

「ここはコロシウム。戦いの場。この臭いは7年間人が人を殺し合った血の臭い。何時誰が襲ってくるか分からないから気を付けて」

「・・・・・・・・」

「はぁ！？殺し合い？血ィ？物騒な冗談言うなよ！」

「お前もう少し静かに出来ないのか」

「動揺が過ぎるぞ少年・・・いや、多少なりとも怯えのある方が耳も目も冴えるというものか」

「そうね。さあ、行くわよ」

「それにしても胸やけしそうな匂いだな・・・」

「血のニオイは最初のうちこそ気になると思うけれど、そのうち慣れるから心配ないわ」

「血のニオイになんて慣れたくなんかないぜ・・・」

「血になれてるのは伊達さん位なもんじゃないかな・・・」

「誰だよソイツは」

「ああ・・・俺達の仲間ですけど・・・あの図書館には来てないみたいですけどね」

「その人に代わりに来てもらった方がいいんじゃないのか・・・」

「言ったでしょう。因果の糸は結ばれてしまったって。悔むならあの日の夜に購買に忍び込んだ自分を恨みなさい」

「はいはい・・・」

各自で少し部屋を調べてみると所々でレバーが存在し、どうやら正しい順番で操作すると対応する扉が開くようだ。

入口から見て右側のレバーを動かすと・・・ギーッという軽い音をして世界に到着した時の近くにある柵が開いた様だった。

「おっ、向こうの扉が開いたな」

「コロシウムっていう位だからな。恐らくこの建物の中にあるはずだ」

早速柵の先を行こうとした一行。ところが・・・

何者かがその先への道に行く跳ね橋の機械を動かして跳ね橋をあげてしまったのである。

「あゝあ。これじゃあ向こう側に渡れないじゃん。どうすりゃいいんだよ」

「仕方ない。他の道を探す」

「橋の上をジャンプして飛び越える・・・何て事できないよな？」

「俺達ライダーやシャナだったら出来るかもしれねエがそれじゃあ意味がないだろ」

「そうだね・・・」

浮かんでいる岩場に一人の兵士がいた。

「おい、ちょっと・・・」

「誰だ跳ね橋を上げやがったのは！コロシウムへ行けねえじゃねエか！」

「お前、人の話を聞きやがれ！」

「門矢士。この世界の者と不用意に話を拗らせる様な行いは極力謹んでくれ」

「・・・分かったよ」

先程の十字路の間に戻り、一番左端の先程は開かなかった扉が開いていた。

「今度はレバーが三つか」

「この形式は恐らく三つのレバーを同じ方向へ倒すというものであろう」

「恐らくそうね。火野映司、頼める？」

「ああ、うん」

火野の海外でのスキルが生かさせたのかこの手のからくりは5秒もかからなかった。

「よし！」

何処か遠くとも近くとも言えない距離で小さくカシャンと何か歯車が動いた様な音がした。

「今のは何処が開いたんだ？」

「とりあえず行ってみるか」

出口付近の扉に近付いた時、コロシアムの参加者と思われる殺し屋と火炎放射機を背負っているロシアのコサック兵の様な恰好をしている男、そして灰色の異系の怪人。

「オルフェノクか」

士がディケイドライバーを巻き付け、ライドブッカーからディケイドのカードを取り出そうとしたその時、

—EXCEED CHARGE!—

と、独特の音声が聞こえたと思いきや、目の前にいた敵が全て灰と化し、それが晴れた向こうにいたのは・・・赤く細長い警棒の様な武器を持ち、黄色い目が特徴の携帯電話で変身するライダー、仮面ライダーファイズだった。

コロシアム（後書き）

跳ね橋が上がっているならオーズのバツタレッグを使えばいいと思った方。

そんな事は分かっていますよ。分かっていますけどそんな簡単な事じゃつまらないだろうしファイズの登場シーン全く無いし。

次回は戦闘直前まで行きます。

感想お待ちしております。

コロシム？（前書き）

2回目です。

コロシウム？

「仮面ライダー・・・ファイズ」

士のその呟きにファイズは少し反応した。

「お前、何でお前がファイズの事を知っているんだよ。まさか、スマートブレインかラッキークローバーの回し者か？」

「スマートブレイン？ラッキークローバー？何それ、ランプのゲームの名前？」

「違う。スマートブレインつつうのは高校の名前で、ラッキークローバーつつうのはそこにいる4人のいけ好かないエリート的事だ」

「違えよ。スマートブレインは高校なんて小っこいものじゃねえ。大企業会社だ。まあ、ラッキークローバーに関しては間違っているとも言え切れねエが」

「まあいい。それよりお前は誰だ？そしてどうして此処にいる？」

ファイズは一応目の前にいる5人を敵ではないと判断したのかベルトからファイズフォンを抜き、適当にボタンを押す。すると赤いラインが消え、人の姿に戻った。

「俺は乾巧。何でこんな所にいるかだと？そんなのこっちが聞いたいぜ。いきなり変なオーロラみたいなのが現れたかと思った次の瞬間にのみ込まれて気付いたらこんなところにいやがるし。その少し前にはベルトが2本盗まれるし。ったく、草加も三原も管理がなっ

てねえんだよ」

「盗まれた2本のベルト・・・もしかしてカイザとデルタか？」

「!! お前、一体何処まで知っているんだよ。まさか本当にアイツらの回し者か」

「ま、まあまあ。乾さんも落ち着いて」

「痴話喧嘩は何時でも出来る。今は何よりもこの世界に紛れ込んでいる絶夢の一味を倒すのが先決よ」

そんな話をしている矢先、建物の入り口、つまりはファイズが入ってきた場所から再びコサツク兵や殺し屋、そしてオルフェノクが現れた。

「とりあえず今は目の前の敵を倒す事だ。お前も協力しろ」

「面倒臭えなあ。後でちゃんと説明してもらってからな」

左に乾、真ん中に士、そして右に火野。3人が並び立つ。

ファイズフォンを開き、5を3回押してENTERを押す。

デイクイドライバーを腰に当て、自分の変身する戦士の絵柄が書か

れたカードをサイドのライドブッカーから抜き取り、バツクルに装填する。

オーズドライバーを装着し、右に赤、真ん中に黄色、左に緑のメダルをはめ込み、ドライバーを45度傾け、オースキャナーをスライドさせる。

—STANDING by—

「「「変身!!!」」」

—COMPLATE—

—KAMENRIDE DECADE!—

—タカ!トラ!バツタ!—

—タ・ト・バ!タトバ!タ・ト・バ!—

「さて、いっちょやるか」

ディケイドはライドブッカーをソードモードにして構え、ファイズは右手首を一回スナップし、レイジ、シャナ、伊里野は各々の武器を構える。

「「「「はあああああ!!!」」」」

そして敵を後ろへ追いやり、外へと出た一行が見た者は想像を絶する光景だった。

外から見て、今まで自分達がいた建物はかなり古いものではあるものの、かなりしつかりしているものだった。が、その外にある下町の有り様は酷かった。王の無茶苦茶な政治を肩代わりしていると言われたら誰しも否定できない位に。家は家とは言い難く、瓦礫を組み合わせた隙間が目立ち、雨が降ったらどうしようもないもの。国民が着ているものもボロボロの布切れをかき集めて辛うじて繕ったとみえるもの。何より外に出ても匂う血のニオイ。寒さをしのぐ為に表面積の半分以上が錆びているドラム缶に薪を放り投げ、火をくべている。

「うわ、何だこりゃ！外はゴミだらけ。まさかこれがこの国の在り様なのか？」

「うむ。寧ろ、愚かな王に支配され人と人が殺し合う姿を娯楽としている国としてはかえって相応しい街並みと言えるだろう」

「・・・・・・」

「こんな所に長居なんてしたくねえな。絶夢の手先を探してさっさと潰すぞ」

コロシアム？（後書き）

ちょっと無理矢理になってしまいました汗。

感想をお待ちしております。

コロシウム？（前書き）

3回目です。

次回から戦闘に入ります。

コロシウム？

目の前の惨状、とてもじっと見ていられるものではない。

「こんなところ、人がいる様な場所じゃねえ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・気持ち悪い」

「伊里野さん、大丈夫ですか？」

「ゴミのニオイにやられたのね。早く通り過ぎましょ」

そこへ、

「おい、そこのお前ら」

と、門番らしき兵士の男が迫ってきた。

「これから試合が始まるって時に何処へ行こうっていうんだよ」

「俺達は何処へ行こうと勝手だろ」

「ふん、折角のこの国最高の見物を見ないなんて、もったいない奴らだぜ」

ディケイド達は無視してやや段数のある階段を降りていった。

「全く、どうかしているぜ。人が人を殺し合う様を見物として楽しむなんざ頭のいかれたやつがする事だろ」

「それでもこの世界の創造者が作った物語の1つ。たとえ気に入らなくても、そのまま受け入れるしかないのよ」

そのまま、偶に出てくる敵を倒しつつ、進んで行く。

すると一方通行の通路で小さいながらも門に鍵をかけて通せんぼをしている男がいた。風貌からして恐らくこの国の国民なのだろう。

「おじさん！ちょっとそこ通してくれない？」

「ういゝ、ここを通りてえなら通行税を払ってもらうぜえ。お前ら、酒は持ってねエのか？」

「酒だあ？そんなの持つてる訳ねえだろ」

「じゃあテメエらに用はねエし、此処を通すわけにもいかねえ！とつとと失せろ！ういゝ」

「このジジイ、一発ぶん殴ってやろうか！」

「おうおうなんだ！やれるもんならやってみろってんだ！」

「乾巧、異世界の住人と面倒を起こす事は好ましくない。極力謹んでくれ」

「んな事言ったって、急がなきゃならねえんだろ？」

「それでもよ」

「チツ・・・」

ひとまずその場から離れる一行。

「なんなんだよあのオッサン。お酒なんか持ってるはずないだろ」

「感情的になってもしょうがない。怒るのは後にしてお酒を見つけないと・・・・・・宿舎の中、くまなく探すわよ」

「おいおい、あんなに沢山ある部屋の中を虱潰しに探すってのかよ」

「じゃあ他に方法があるの？」

「・・・ある」

そう言ったのは火野映司、オーズだった。

「どうすると言うのだ？」

「まあ、任せて下さいよ」

先程の建物の十字の交差点に立つ5人。

「一体何をするってんだ？」

「こうするんだよ……ハッ！」

オーズの鷹の紋章が光り、緑色の複眼が点灯する。

「うおっ！すげえ！」

「成程。鷹の力を使って中の物を透視する訳か。確かにこの方法なら1つ1つの部屋を風潰しに探すよりは有効かもしれぬな」

「……………あつた！あそこの部屋に酒が入った樽がある！」

オーズが指さした部屋には幾つか樽が置いてあり、その中の1つに酒が入っているらしく、他と比べて異様に重かった。

「よし、この酒があればさっきの道も通れるな」

「・・・お酒って聞くと嫌なヤツの顔を思い出すわ」

「嫌なヤツ？」

「弱いくせに見境なく飲んで翌日頭が痛いつてのたうち回るのよ」

「そ、そりゃタチが悪いな・・・」

「ソイツは弱いくせに無類の酒好きで飲んだ翌日には必ず二日酔いでのたうち回るのよ。しかもそうなる事が分かって『我が麗しの酒盃』なんて叩きつけるヤツもいる始末。絶夢と戦う間だけはあの二人と会わずに済むと思うと清々するわ」

「その『我が麗しのなんたら』とか言うのは、バーのマスターか何かか？」

「違うけど、立場を考えると当たらずとも遠からずってところかしらね。飲めば頭痛が起きると分かっているのに何で酒なんて飲むのかしら？」

「・・・その間は・・・嫌な事を忘れられるから・・・」

「何だかまるで飲んだことのあるみたいな口調だね、伊里野さん？」

「・・・？榎本が・・・そう言ってただけ」

「無駄話が過ぎたわ。早くさっきの場所に戻りましょ」

樽をディケイドとオーズで担いで先程の場所へ戻る。士は仮面の中でめんどくさそうな顔をしていたが、当然それに気付く者はいなかった。

「おい、オメエら。酒を持ってねエか？此処を通りたきゃ通行料代わりに置いて行きな！」

「ほらよ。これでいいんだろ」

ディケイドは樽を下ろすと、ライドブッカードをソードモードにして樽のてっぺんを切った。

「いやあ、アンタらも話の分かる男前じゃねエか！どうぞ、どうぞ！お通り下せえ！」

「何だよその二重人格・・・まあ、いいや。さあ行こうぜ」

通路を少し進んだ時、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

伊里野が口元を押さえこんでしゃがみ込んでしまった。

「お、おい。大丈夫かお前。顔色が悪いぞ」

「・・・・・・・・気持ち悪い」

「酷いニオイだものね、無理もないわ。こんな所早く通り抜けちゃいましょ」

そして木の橋で作られた一方通行の道を進んで行くと、何と王宮の地下らしき場所が現れた。無論そこは地上だが、壁に小さく等間隔で明かりが灯っている事に加え、騎士の鎧でも配置されていたら完全に誤解してしまいそうな空間であった。

「随分遠回りをしている気がするが・・・」

「道がこれしかないんじゃないけどね・・・」

そこへ、再び敵が出現。殺し屋、コサツク兵、オルフェノク。それに加え、今回はライオトルーパーまでいた。

「あれ？あれももしかして仮面ライダーってヤツ？」

「間違っちゃいないがアイツらは恐らく敵だ」

「はぁ！？敵！？だってアンタ、仮面ライダーは世界を守るために戦う存在って言ってたじゃないか！」

「何物にも例外はある、そういう事だ。シャナ、お前の世界でもそういうのがあるだろう？」

「うむ。我らで言う所の屍拾いラミーの様なものか」

「ラミー？誰だよそれ？」

「会う事があったらその時教えてあげるわ」

「しかしちょっと数が多いな」

「だったら、早目に終わらすか」

そう言うのと、ファイズはファイズフォンのミッションメモリーを外し、右腰のファイズポインターに装着する。

—READY—

そして左手のファイズアクセルのアクセルメモリーをファイズフォンの装着。

—COMPLATE—

の音声と共に胸部アーマーが展開し、ファイズアクセルフォームとなった。

「おお！何かすげえな！」

「・・・なら俺もやるか」

そう言うのとデイクイドはライドブッカーから今日の前で変化した戦士のカードを取り出す。

—FORMRIDE FAIZ！AXEL！—

何とデイクイドはDファイズアクセルフォームへと姿を変えた。恐らくその事に1番驚いているのはファイズである乾本人だろう。

「なっ！？何でオルフェノクじゃないお前がファイズになれるんだよ！」

「細かい事は気にするな。それよりアイツらを潰すぞ」

「・・・そうだな」

「火野、コイツらを頼む。怪我をしたくなかったら下がってるんだな」

「分かった」

「行くか」

「ああ！」

ともにファイズアクセルのスイッチを押す。

—START UP!—

その電子音が聞こえたかと思いきや、突如二人がレイジ達の視界から消えた。

「あれ!? 何処行っただ!?」

「!!」

二人は消えたのではなく、人の動体視力を遥かに超える音速で敵を攻撃しているのである。オーズでさえ、姿こそ確認出来るものの、目で追う事が精一杯である。

そしてレイジ達の時間感覚で数秒が経過した時、赤い円錐が先っぽを敵に向けて出現したかと思っただけその中を素早く貫き、敵が次々と爆破していく。

「うわっ!」

そして音速の世界から二人が出てきた。

—THREE TWO ONE...

—TIME OUT—

Dファイズはディケイドの姿に、乾ファイズはアクセルメモリーを取り外す。

— REFORMATION —

アーマーが閉じ、フォトンブラッドも銀から元の赤に戻る。

「結構やるみたいだな」

「当然だ」

そうして、進むと何処かの部屋の裏口の入口の様な場所に出る。そこに入ると・・・それは先程跳ね橋を上げられたせいで通れなかった道の様だ。それでも血のニオイは相変わらずだ。寧ろ、逆に強くなっている気がする。

「それにしても人殺しの為のコロシウムにゴミ溜めみたいな街・・・この世界って全部こうなのか？」

「いいえ、この世界の全てが酷い訳じゃないわ。この世界には多くの国が存在する。その中には美しい国もあるし、素晴らしい人もいる。『世界は美しくなんか無い。そして、それ故に美しい』。これはこの世界を創造した創造者の言葉よ」

「美しくないのに美しい？何だか謎々みたいだな」

「確かにこの言葉だけじゃ分からないかもね。でもこの世界の物語を読めば少しは理解できるはずよ」

「矛盾した言葉の中に真実を封じ込める・・・正に至言と呼ぶべき

であろうな」

「そうね。見た感じこの先はコロシアムの会場ね。絶夢の手下は恐らくそこにいるはず」

二つの人によって作られた水路を抜け、最後のドアを開ける。向こう側にスタジアム入口の金網があがっているのが見えた。

その入り口から一人の青年が出てきた。左手に刀を鞘に収めた状態で持つその人物はこの世界にた時に最初に見た青年と瓜二つだったが、表情は伊里野の世界に現れた榎本のように何かを企んでいる様なものである。

「シズと申します」

「.....」

「.....」

「.....」

「.....」

「.....」

「.....」

「.....」

「おい、聞こえねエのか？名乗ってんだぜ、名乗り返すのが礼儀だろうが。ああ？」

「芝居の下手なやつだな」

「ふん、世界を改ざんし腐らせるだけの存在だけに、流石に品がない。本物のシズには似ても似つかぬな」

「ひやはははは！大きなお世話だこの野郎！オレの相手はオメエらだけじゃねえ。本物のシズもキノもこの後まとめて始末してやる。そうすりゃ俺様こそが『シズ』ってあんばいよお！」

「つまりコイツ・・・偽者？」

「そういう事」

「まあ確かに6対1じゃ流石にアンフェアだ。だからライダーのテーマエらは専用のやつらが向こうにいるぜ」

そう言うと、コロシアムの入口の空間が歪んだ。

「なっ！」

「この歪みは時間が経つにつれて大きくなる。早目に行かなきゃ手遅れになるぜ？ひやはははははは！！」

「・・・門矢士、火野映司、乾巧。貴方達は行きなさい。コイツは私達が倒す」

「ああ、任せたぞ」

ディケイド、オーズ、ファイズはその歪みの中へと入る。

「へっ、テメェら程度で俺を倒せるかな？」

「寝言は寝て言いなさい。お前はシズにはなれない。何故なら、ここで私達に倒されるんだから」

「威勢のいいお譲ちゃんだぜ。かかってこいや！」

「レイジ、伊里野加奈。いくわよ！」

「コク」

「ああ！行くぜ！」

コロシウム？ 戦闘（ライダーサイド）（前書き）

今回、キャラが崩壊している可能性が大了。

予めご了承ください。

コロシウム？ 戦闘（ライダーサイド）

「う、うわあああああ！！！！」

ゲートに出現した歪んだ空間に入った瞬間、慣れない衝撃が3人を襲い、3人とも変身が解除してしまった。その感覚はブラックからRXの世界に戻る時の感覚に似ていた。

「ん・・・此処は？」

「おい、お前ら。大丈夫か？」

「あ、ああ。何とかな」

「オレも大丈夫です。それにしてもここは一体・・・」

士はその場所を見た覚えがある様な気がしたが少し違っていた。その場所を具体的な例で一言で言い表すなら東京ドームの様な場所だった。

だが士の代わりにこの場所を覚えている人物がいた。乾巧である。

「そんな・・・どうして此処が・・・」

かつて園田真理を誘拐し、彼女を奪還する為に乾はスマートブレインが開発した二つの『帝王のベルト』を使ったライダーを倒し、その際にこのスタジアムもといビルは全壊したはずだった。それが今は傷跡が1つとして見当たらない。

そこへ、

「へー、思ったより来るのが早かったね」

と、選手入場口から声色こそやや大人だが口調がかなり子供っぽい声が聞こえた。

そして、

「まさかまた貴様の面を見る事になるとわな・・・」

といかにも人を見下したような口調の青年らしき声。この声には士だけでなく映司も反応した。

「この声は・・・」

「えっ!? まさか・・・アंक!?」

更に、

「Welcome to your's grave」

と、完全英語口調。

向こうの3人の姿が完全に見える様になった時、士達の3人のリアクションは各々別々だった。

士はアंकもとい百瀬の復活に少々驚愕し、

映司はアंकと瓜二つの百瀬に驚き、

乾は北崎とレオが目の前にいる事に動揺を隠せなかった。

「もうちょっと手間取るかと思ったけど・・・何か知らない人が二人いるなあ」

「ふん、何人いようと関係ない。要はこいつらを潰せばいいだけの話だ」

「Year」

そう言うのと北崎はデルタ、百瀬はカイザ、レオはサイガのベルトを装着する。

「お前ら、まさかそのベルトは」

「そつ、君達から奪い返したものだよ。だって、コレは元々僕達のものだもん」

「ふざけんな！そんな事の為にベルトを盗んだっていうのかよ！」

「成程な、大体分かった。コイツらを倒さない限りさっきの歪みは続き、この世界は滅びに向かうってことか」

「そんな事させない！」

「な〜んか熱くなって所悪いんだけどさ」

「ここから先の世界にお前達を行かせる訳にはいかないんでな」

百瀬はカイザフォンに913、レオはサイガフォンに315を入力してENTER。北崎はデルタフォンを顔に近付け、グリップのトリガーを引きながら、

「「変身」」」

—STANDING by—

百瀬とレオはフォンをそれぞれベルトにはめ、北崎はデルタムーバーにフォンを接続させた。

—COMPLATE—

すると百瀬は金のフォトンブラッドが斜めに走り、紫の仮面にXがモチーフの仮面ライダーカイザ、北崎は黒と銀色のΔがモチーフの仮面ライダーデルタ、そしてレオは白を基調に青が所々に走り、背中にはライジングアタッカーを付けたΨをイメージとした仮面ライダーサイガに変身した。

「上等だ、やってやろうじゃねえか！」

士、乾、映司は各々の変身ツールを腰に巻き、変身の態勢に入った。

「「変身！！！」」」

—KAMENRIDE DECADE!—

—STANDING by—

—COMPLETE—

—タカ！トラ！バッタ！—

—タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！—

「ふうん、ファイズ以外にも変身する人がいたなんてねえ・・・」

「関係無い。俺達のやる事は変わらん」

「Let's the game begin！」

成り行きからファイズはデルタ、ディケイドはカイザ、オーズはサイガと戦う事になった。

ーディケイドとカイザーー

お互いにパンチとキックを数発ずつかました後、カイザが一步下がって距離をとる。

「さてっと・・・お前は前の因縁で気に入らねえから遠慮せずに倒してかまわねえな」

「俺をラッキークローバーの一人と知っておきながら相変わらずの口調だな。だがその位の方がかえって倒しがいがある」

カイザは右腰のカイザブレイガンを抜き、ミッションメモリーをセツトする。

—READY—

「やっぱそれでくるか。ならコッチは・・・」

—ATTACKRIDE SLASH!—

ディケイドもライドブッカードソードモードにして構える。

「はあああああああ!!!」

「たあああああああ!!!」

「フアイズとデルター」

「何度蘇ろうとお前は俺が倒す!」

「嫌だなあ、そういう妙に暑苦しいの」

左手で一回スナップを振ったファイズはそのままデルタに突っ込み、パンチを喰らわせようとするが、デルタはそれを受け止め、逆に返り討ちにされた。

「ぐわっ！」

「あれ、それだけ？」

デルタはデルタムーバーを取り外し、静かに

「FIRE」

—BURST MODE—

その音声にファイズは素早く反応し、ファイズフォンをベルトから外して106を入力してENTERを押す。

—BURST MODE—

互いにビームの撃ち合いになった。

ピシュン！ピシュン！

が、12発撃ったところでファイズの方が弾切れになってしまい、打ち返しきれなかったデルタのビームがファイズにヒットしてしまった。

「うっ！んの野郎！」

ファイズはファイズショットにミッションメモリーをセットしてファイズアクセルのアクセルメモリーをベルトにはめる。

—COMPLETE—

「つたく、コレ何度も使うのは楽じゃねえんだけどよ」

そう呟きながらもファイズアクセルのスイッチを押す。

—START UP!—

音速の世界に入ったファイズ。目的は目の前の敵である北崎を倒す事だが、ベルトを取り戻す事もそれと同じくらい重要だと言う事を忘れてはいなかった。

「ヤアッ！」

デルタの脇腹にアクセルグランインパクトが入る。その衝撃でデルタのベルトが外れ、北崎の姿に戻る。

「デメエ・・・何度も何度も調子に乗ってんじゃねえぞおおおおお
おおおお！！！！！」

北崎は怒りを露にしたまま、ドラゴンオルフェノク魔人態から龍人態へと姿を変え、ファイズアクセルフォームを上回る素早さで猛攻をしかけた。

「くっ！」

長いクロールでファイズの態勢を崩しても立て直す余裕を与えず、怯んだその背後に素早く移動して再び攻撃。

—THREE TWO ONE・・・

—TIME OUT—

その電子音と共に姿が元に戻ってしまうファイズだった。

ーオーズとサイガー

「俺がやらなきゃならないなら絶対に止める！」

「All right. Here we go！」

折り畳んだトラクロールを開き、迫るオーズだったがサイガはその手を弾いた後、3連続の回し蹴りをきめた。

「なっ！うっ！ぐわっ！」

そのまま後ろに転がされたかと思ったらサイガはフライングアタッカーを使用して空中へと飛び、ブースターライフルを乱射した。

オーズはそれを動き回ってかわすしかなかった。

「くっ、このままじゃ・・・」

その時、

—FORMRIDE DEN—O GUN!—

という発声音がディケイドから聞こえたかと思いきや、その姿は紫の竜の様な仮面をした別のものになっていた。

「えっ、ちょっと・・・士さん？」

D電王ガンフォームは無言のままステップをしながらライドブッカーガンモードで、銃弾をサイガに向け、気を逸らした。

「今だ、映司！」

「あっ、はい！」

映司は脚部のバツタレッグに力を入れる。すると足がバツタの様に変化し、高く跳び上がった。

「What!？」

それに驚くサイガ。構わずオーズは真ん中と左のメダルを変えようとするが、拍子に抜いたメダルを落としてしまった。

「（あっ!）」

と、一瞬思ったが気にしてられる余裕はない。真ん中に黄緑、左に黄色のメダルをはめ、スキヤナーをスライド。

—タカ! カマキリ! チーター!—

一瞬の早業で亜種形態、タカキリーターにチェンジ。カマキリソードでサイガの胸部を切り裂き、バランスを崩して急降下したところを見逃さなかった。

—SCANNINGCHARGE!—

その音声が聞こえた瞬間、オーズは自分の体を高速回転させ、渦を作った。やがて小規模の竜巻になった渦の中を下りの階段の様に高速移動し、一気にサイガに迫った。

「セイヤ~~~~!!!!」

そしてカマキリソードがサイガのベルトを一刀両断した。

「Ohhhhhhhhhhh!!!!」

地上に叩き付けられたサイガはそのまま変身が解けた。ベルトはミッションメモリーその他に横一直線の亀裂が入って使えそうにない。

「Wow! You're interesting rider.
But you can't defeat me!」

そういうとレオは本来の姿、ライオンオルフェノクになって映司に襲いかかってきた。

コロシウム？ 戦闘（ライダーサイド）（後書き）

いやぁ・・・戦闘描写むずかった。

中でもレオの英語表記が特に。どこかおかしい所があったら指摘して下さい。

戦闘は次回に持ち越しです。流石に3対3を一回で書くのは難しいです。

感想お待ちしております。

コロシァム？ 戦闘（ライダーサイド） part 2

ライオンオルフェノクと化したレオがオーズに襲いかかる。

「くっ！」

コンボを使えば目の前の敵は倒せるかもしれない。が、その直後に反動で身動きが取れなくなり、残り2体の敵に的にされれば助かる保証はない。見たところ先程少しばかり自分を助けてくれたディケイドも、今はカイザの対応に手一杯の様で、ファイズはどちらかといえは若干押されている様な感じでもある。

しかし、そんな状況でも諦める訳にはいかない。自分達が諦めてしまったらこの世界は崩壊してしまうし、何より映司自身の信念に反する。だからたとえどんなに不利でも折れる訳にはいかない。再びカマキリソードを両手に構えて向かって行く。

「はあああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

—ディケイドVSカイザ—

「貴様・・・さっきはよくも俺を無視したな・・・」

「生憎だが勝負は常に1対1とは限らねえだろ。仲間だから助けた、それだけの事だ」

ソードモードにして振り回してくるカイザブレイガンをストックで避けながらガンモードにしたライドブッカーの銃口からエネルギー弾が発射された。

「くっ！」

銃弾によって後方へと押し戻されたカイザはカイザフォンを抜き、106を入力し、ENTERを押した。

—BURST MODE—

その音声と共にカイザフォンからビーム弾を連射するカイザ。D電王は避けようとするも3発目から最後までを諸にくらってしまい、姿がディケイドに戻ってしまった。

「チッ！やってくれんじゃねえか！」

そう言うとディケイドはライドブッカーから黄金の龍をモチーフにしたライダーのカードを取り出す。

「変身！」

—KAMENRIDE AGITO!—

眩い光に一瞬包まれ、それが収まった時、ディケイドはDアギトとなっていた。

「さて、そっちが武器2つならこっちもそうさせてもらうぜ」

そして再びライドブッカーを開き、右腕が赤、胸部が金、左腕が青の姿が描かれた戦士のカードを取り出す。

—FORMRIDE AGITO! TRINITY—

Dアギトの周辺の視界が数秒ぼやけ、その間に左手にフレイムセイバー、右手にストームハルバードを構えたDアギトトリニティーフォームになった。

「あの時もそうだったが、お前の能力は多くの姿に変身し、その力を使いこなすというものの様だな。だが所詮は人間、1度はしくじったが今度はそうはいかない！」

「そうかよ。だったら教えてやる、人間に無様に負ける、人間を自

分達より劣った存在だと思い込んでいる、お前達のような（・・・・・・
・）オルフェノクにな！」

「！！」

士、もといディケイドの言葉を聞いて反応したのはファイズだった。

かつて乾は自身がオルフェノクである事を仲間知られた時、仲間を裏切ろうとするのではなく、自ら彼等の元から離れようとした。しかしそれは仲間から裏切り者扱いされるのを嫌がったからではない。自身が人間としての心を失い、仲間を裏切ってしまうのではないかと恐れたのだ。

無論ディケイドはそんな事は知らない。しかし別の世界のファイズである尾上タクミは自身の正体が大切な人に知られてしまっても、どんなに忌み嫌われようとも守ろうとした。どんなにちっぽけでも守りたいもの。その時士は言った。

「ちっぽけだから、守らなくちゃいけないんだろう！」

と。

ライオンオルフェノクとドラゴンオルフェノクがそれぞれオーズとファイズをディケイドのもとへと蹴り飛ばした。

「やだなあゝ。なゝんかカッコつけちゃって」

「H e y, w h o a r e y o u ?」

「俺は・・・通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！」

ドラゴン、ライオンオルフェノク、カイザが再びこちらに迫ってくる。

Dアギトはドラゴンとカイザの攻撃を受け止め、両手の武器で弾き返した。

「ふゝん、僕達の知らないライダーと戦うっていうのも中々面白いかも」

「そうかよ。生憎だがコッチはそんなに暇じゃない。すぐにでも終わらせる！」

一方、オーズは再びライオンオルフェノクと戦っていた。

「そう・・・俺達は諦められない！」

「Huh! You sounds fun！」

「ああああああああああああああああ！！！！」

カマキリソードを手にライオンオルフェノクと真っ向から挑むと思わせた直前にチーターレッグの力を発動させ、敵の大きく振り上げた詰めの間を素早く掻い潜って背後に回り、ソードを背後を横に切り裂く。

「はああああああ！！！！」

「Ooh！」

その隙を逃さず、オーズは鷹のメダルを抜き、オレンジ色のメダルと変えた。

—ライオン！カマキリ！チーター！—

亜種形態、ラキリーターに変身したオーズは再度スキャナーをスライドさせる。

—SCANNING CHARGE！—

ライオンヘッドのライオシヤネルにライオンオルフェノクは身動きが出来ない。そしてチーターレッグで素早く懐へ潜り込んでカマキリソードを縦に振り降ろした。

「せいや~~~~~~~~！！！！」

その斬撃を受け、体が灰となって一気に崩れたライオンオルフェノクだった。

「.....」

その頃、Dアギトは二体を相手に時に攻撃を受け流しながら、素早く淡々と技をきめていた。

「デメエ！」

「んの！」

態勢を立て直したドラゴンオルフェノクとカイザが同時に迫ってきても士は慌てず、ドラゴンオルフェノクの両脇にストームハルバードとフレイムセイバーを挟み込んで怯ませ、カイザの腹部に拳をストレートに叩きこみ後退させたところで黄色いクレストのカードをライドブッカーから取り出す。

—FINAL ATTACK RIDE A A A AGITO!—

Dアギトの足元にアギトの紋章が浮かび上がり、それが両足に吸収される。高くジャンプし、一回転してから両足をそろえてライダーシュートのカイザに叩きこんだ。

「今だ、乾！」

「ああ！」

「んなっ!?!」

宙に浮いたカイザが首を後ろに向けるとファイズショットを右手にはめて待機していたファイズが。

—EXCEED CHARGE—

「やああああああ!!」

グランインパクトがカイザにクリーンヒットし、その衝撃でカイザドライバーが外れ、百瀬の姿に戻った。

「貴様らああああ!!!!」

百瀬は物凄い形相と共にタイガーオルフェノクへと姿を変えた。そして触手の様なものを出して灰の塊に突き刺すと、なんとライオンオルフェノクが復活した。

「そんな!」

「分かったか。幾らお前らが倒そうとしたところで、所詮無駄な足

搔きにしかない」

「そうかな？」

「何？」

「結論を出すにはまだ早いだろ。勝負の決着がついた時にそういう事は言うもんだ」

「ハッ、ならばこれで終わりにしてやる」

「それはコッチの台詞だ」

ディケイドのもとにファイズ、オーズがやってきた。

「でも、倒しても復活しちゃうならどうすれば・・・」

「簡単な話だ。3体一気に倒せばいい」

「アイツらを一気に倒すって？」

「ああ。だがこれにはお前らの協力が不可欠だ。いいか、作戦は・・・」

デイクイドはファイズとオーズに素早く作戦を伝える。

「それしかないなら・・・」

「やるしかないな」

オーズはドライバーのメダルを全て抜き、左に赤、真ん中に青、右に黒のメダルをはめてスライドさせる。

「タカ！ウナギ！ゾウ！」

亜種形態タカウゾに変身する。

デイクイドはドライバーからファイズと武器の様なものが描かれて絵柄が二分されているカードを取り出した。

「乾、ちょっとくすぐりたいぞ」

—FINAL FORM RIDE FA FA FA FAI Z!—

「なっ・・・うおっ!？」

背中 of フォトンブラッドの一部に光が走ったかと思ったらその体に装甲が加わり絵柄に書かれていた武器、ファイズブラスターへと変形した。

「オーズ!」

「はい!」

ウナギウィップを伸ばして、オルフェノク二体をとらえようとする。

「フン! そんな小細工が聞くと聞いたか」

三体とも素早い動きの為に中々捕まらない。

「あまりに幼稚な作戦だ。人間が我々と比べて劣っている何よりの証拠だ」

敵が動き回っている為、ディケイドは標準が定まらず必殺技を放つ事が出来ない。

「貴様の方が、隙だらけだあああ!!!」

タイガーオルフェノクがディケイドの背後から襲いかかろうとした。ファイズブラスターの大きさをゆえに両手がふさがって後ろまでは対応しきれない・・・百瀬もとい、タイガーオルフェノクはそう思っていた。が・・・

「甘いな」

「何!？」

ディケイドは左手にこっそりとライドブッカーを隠し持っていた。肘を利用してガンモードにして狙い撃つ。

「グワッ!」

その間にオーズはタカとウナギの力を駆使して、残り二体のオルフ

そしてそこから大量のフォトンブラッドが発射され、3体は灰と化し、一瞬、Φのマークが浮かんだ。

「はぁ・・・終わった~~~~」

ディケイドはファイズブラスターから手を離す。すると装甲が消え、元のファイズの姿に戻った。

「んぁ、今のはなんだったんだ?」

「細かい事は気にするな。それより・・・」

3体が倒されたからか、スタジアムの空間が不安定になっていた。

「ここもそうはもたないな」

「ベルトは確保してある。これでオーケーだな」

「ああ!俺のメダル!」

そう、サイガと戦っている際、オーズはトラとバツタのメダルを落としてしまったのだ。

「どうしよう、一体何処に・・・」

「おい」

そう言って映司の肩に手を置いたのは乾だった。

「探しもんはコレか？」

彼の手にはトラとバツタのコアメダルがあった。

「あっ、そうです。これです。何処にあったんですか？」

「アイツらと戦っている最中に落ちてきたから取り敢えず持っていた。自分の変身に必要なものくらいキチンと管理しとけよ。帰ったら草加と三原にも言ってやらねえとな」

「ありがとうございます」

「さて、そろそろ行くか」

不安定な空間の中で唯一つ、レイジやシャナを写している場所があった。

「あそこだな」

その空間に3人は潜り込み、コロシウムは跡形もなく消えた。

コロシウム？ 戦闘（ライダーサイド）part2（後書き）

漸く更新！

次回はレイジサイドです。

感想、宜しくお願いします。

コロシァム？ 戦闘（レイジサイド）

ブルードザオガー

吸血鬼をひきずりながらもまっすぐに前を見据えるレイジ。夜傘を身に纏い、日本刀を構えるシャナ。コンバットナイフを両手に握りしめる伊里野。

三人を相手にゆっくりと刀を抜き、鞘を投げ捨てる偽・シズ。

「へっ、テメェら三人程度でこの俺を倒すつもりかよ」

「勿論そのつもりだぜ！」

「お喋り好きなヤツにロクなヤツはいないって聞いた事があるけど、案外間違ってもいないかもね」

「なんだと！調子にのってんじゃねえぞこの小娘がああああ！！！」

刀の塚を両手で握り、一気にシャナとの間合いを詰める偽・シズ。シャナはそれを夜傘の背中から出現した紅蓮の翼を使って避ける。

「うおっ！！シャナって空飛べたのか！？」

「レイジ！油断しないで。そっちに来るわよ」

「危ない……」

ふと正面に向き直ると偽・シズの刀を伊里野がコンバットナイフで受け止めているところだった。

「サンキュ、伊里野」

「・・・・・・・・」

伊里野は無言で返事をした後に更に余裕を持たせようとコンバットナイフを振り回す。

「くそっ！邪魔するな！」

「うるさい・・・」

ナイフを振り回して攻撃の隙を与えない伊里野。続けて刀を降り下ろすシャナ。

「よっし、オレも！」

ブルードザオガ
吸血鬼を握り直し、後にかけて攻めようとするレイジ。

が、

「へっ、いつまでもテメエらがペースを取れると思ってんじゃねえぞ！..!」

ブルードザオガー
吸血鬼を払いのけ、刀でレイジの左腕を風ぎ払う。

レイジの左腕から真っ赤な血が迸った。

「ぐわあああ！！！！」

「レイジ！」

「少年！」

「・・・・・・・・！！」

「おいおい、仲間の心配なんかしていいのかよ」

追い討ちをかけるが如く、続いて横に迫る刃を右腕で地面に突き立てた吸血鬼でやりすごす。
ブルードザオガー

「ちっ、テメエの相手は後回しだ」

矛先をシャナと伊里野へと変えてそちらに視線を向ける偽・シズ。

ある意味九死に一生を得た訳だが、それで出血が止まるわけでもなく、止めどなく流れ続けている。

「ぐっ！」

左の二の腕を押さえていた右手が鮮血で真っ赤に染まる。

その間にも偽・シズはシャナと伊里野を相手にほぼ互角の戦いをしていた。

「あっちいけ！」

「おっと」

「くらえ！」

「チィ！」

シャナの刀を受けて一歩下がる偽・シズ。再び追加の攻撃を加えようと間合いを詰める伊里野。しかし偽・シズはその時を待っていたのだ。

「これでもくらえ！」

そう言いながら細長い一見するとダイナマイトの様なものを二人に向かつて投げつけた。シャナは咄嗟に翼を出してよけたが、伊里野はそれを諸に受けてしまった。

「伊里野加奈！」

その円柱状のものは爆発せずに空中で破裂しながら光を撒き散らした。

「・・・っ！」

そして伊里野は方向感覚が麻痺していた。

「お前、今のはなんだ！伊里野に何をしたんだ！」

「へっ、コイツはスタングレネード。コイツの光を受けたヤツは暫く自分自身の方向感覚を失うことになるんだぜ、ひやははははは！」

方向感覚が麻痺した伊里野に矛先を向けた偽・シズが背後から引き裂かれる様な痛みを感じたのはその直後だった。

「なにっ!？」

切りつけたのはレイジだった。左腕の出血は未だ治まっておらず、貧血状態に陥ってしまったのか足元もおぼつかず、ブルードザオガー吸血鬼を杖がわりにして漸く立てる状態だ。

「レイジ！」

「相当の出血量だな。早目に切り上げなければ危険だ」

「へっ、そんな通りだ。どうやらテメエから死にてえらしいな。だってらこれでも喰らいやがれ！」

と、シャナと伊里野に放ったスタングレネードを投げる。

「レイジ！」

「………！」

伊里野も自身の方向感覚を回復させたが既に遅い。シャナの翼を使

ってもあの距離では間に合わない。

誰もが終わ리と思ったその瞬間・・・

光は確かに撒き散った。だが、それも一瞬の間だけ。それが収まった時彼等の先に見えていたのは先程と変わらないレイジだった。足元がふらついて今にも倒れそうなのは変わりない。だが、先程力を振り絞って敵の背中めがけて吸血鬼を振ってたあの時とは変わりがなかった。

「どういふこと。何が起きたの！？」

「分からん。だが今が絶好の機会だ！」

「チィ！」

「おおおおおおお！」

レイジが両手で吸血鬼^{ブルードザオガー}を横に振るう。受け止めようとした偽・シズの刀の切っ先が折れた。

「なっ！？」

目の前の現状を理解できず、戸惑う余裕もなく、シャナと伊里野の追撃が来る。

「はっ、やつ、邪魔！」

「負けない・・・」

シャナは刀で、伊里野は何処で工面したのかマシンガンを発射してクリーンヒットした。

「今よレイジ！^{ブルードザオガー}吸血鬼に力を念じて！」

「はあああああああああ！！！！くらええええええええええええええええ！！」

レイジの^{ブルードザオガー}吸血鬼を力任せに降り降ろす「兜割」を発動させた。

「ぐわあああああああああああああああ！！！！」

力尽きたかの様に膝をつく偽・シズ。

「げふ・・・ああ、ちきしょう。オレも所詮はコピー。この程度の力か・・・一度でいい・・・本物として・・・創造者の創造物として生きてみたかったぜ・・・」

そう呟くと他の敵と同様、煙の様にその姿は消えた。

「ぐっ！」

それを聞いた瞬間、レイジもまた膝をついた。

「・・・大丈夫？」

伊里野が非常に細い声で尋ねる。

「あ、ああ・・・何とか・・・」

そこへ、コロシウム入口のねじれた空間から士達も出てきた。

「そっちもどうやら終わった様だな」

「レ、レイジ君！？どうしたのその腕！？」

「油断しているからそうなるのよ」

「おいお前、幾らなんでもそんな言い方はないだろ！」

「・・・止むを得ん。シャナ、特別にアレを使ってやれ」

「仕方ないわね・・・皆、少し離れてて」

士達と伊里野がレイジから離れると、シャナはレイジに炎を吹きかけた。

「うわっ！」

「おい、アイツを焼き殺す気かよ！」

「・・・」

その炎が取り去られたかのように無くなると、レイジは元の姿で立っていた。しかも切り裂かれていた左腕と制服も元通りになっていた

た。

「な、何だったんだ今のは」

「清めの炎。私達フレイムヘイズが戦いなんかで傷を負った時などに使う、言ってみれば自己再生の手段というところかしら」

「フレイムヘイズでない少年に効果があるかどうかは正直半信半疑だったが、とりあえず傷は癒えた様だな」

「あ、ああ。ありがとう、シャナ」

「今回は事が事だったから仕方なかったけれど、次はないと思ってちょうだい」

「相変わらず厳しいな、シャナは」

「ほら、続きが始まるわよ」

あのスタジアムでキノは拳銃の安全装置を外し、リボルバーを回す。その目は冷静を保ちながらも真剣そのものだ。シズも同様だった。

「シズさんは、市民になりたいのですか？」

「ああ………なりたいね」

「こんな腐った国の？」

「驚いたな。それが分かっていて、こんなふざけた試合に参加しているのかい？ しかも、決勝まで勝ち進んで………キミは市民になりたい訳じゃないんだろう？」

「ええ………でも、そういうあなたこそどうなんですか？」

「私には市民になってどうしてもやらなければならないことがある………だからキミには降参してほしいんだ」

「それが何かは分かりませんが、お断りします」

「何故だい？市民になりたくないのに何故戦う？」

「答えは簡単ですよ。今、ここで戦いたいんです。だからです」

その会話を最後に試合開始を告げるラッパ、つまりファンファーレが鳴り響いた。

「って、やっぱりあの二人は闘う事になるのか！？じゃあキノって砲を助けなくちゃ……」

そこまで言った途端、6人の足元が光り、その世界から消えた。

コロシウム？ 戦闘（レイジサイド）（後書き）

キノ編終了！

次回は学園での話をやった後、皆様がよくご存じのあの世界へと参ります。

感想お待ちしております。

・・・よく考えてみたらバギーアタック出せなかった（汗）

旅人として似ている者

6人が電撃学園に戻ると、夏海、ユウスケ、比奈、浅羽、悠二、そしてキズナが心配そうにしていた。

「士君！」

「士！」

「映司君！」

「伊里野！」

「シャナ！」

「レイジ！」

「……」

「士君、この人は？」

「コレだ」

士はライドブッカーから1枚のカードを抜いて夏海達に見せる。

「ファイズ!？」

「別に驚く様な事じゃねえだろ。1つのライダーに変身する複数のやつをお前らだって知っている筈だ。ブレイドに変身するのがカズマと剣崎一真・・・って言う様にな」

「乾巧だ」

言い方や見た目はぶっきらぼうだが少なくとも悪い人ではないという事は分かった様だ。

「それにしても・・・」

「どうしたのよレイジ?」

「いや、ついさっきまで戦ってきた世界で決闘をやっててさ。大丈夫なのかなアイツ、勝てるのかなあ?」

「これでいいのよ。キノとシズの戦いはあの世界の創造者が用意した大切なものだから。私達が余計な手出しをしたらそれこそ改ざんになる。そうなってしまったら本末転倒よ」

「けどよお、あの刀男だってすっげえ強そうだったぜ。キノは拳銃を持っていたけど勝てるのか？」

「んー、少なくとも命は無事なんじゃない？だってほら、レイジの後ろに・・・」

そう言われて振り返ると本棚と本棚の間、伊里野が出てきたところと同じ場所からゆっくりとキノが近付いてきた。

「あっ、そうそうたしかこんな・・・ってうわあああああああ
あ！！！！」

キノは無言で拳銃のホルスターを回してこちらに突き付けてきた。

「きゃっ！」

「お前、どういふつもりだ？」

「・・・何処ですここは？返答次第では撃ちますよ」

その時、レイジと士の脳裏にまたあの丘のキノが十字架に貼りつけにされている様子が浮かんだ。

「くっ！」

「痛い・・・また目眩かよ・・・」

「このパースエイダーはオモチャじゃありません（注・パースエイダーは銃器。この場合は拳銃）」

「うるせえよ！拳銃なのは見りゃあ分かる！銃口をこっちに向けんな！」

「ちっ、こんな時に海東は何処に行つてやがんだ」

「……申し訳ありませんが、貴方方の話が終わるまではこのままで」

「ついでに俺にも話を聞かせてくれ」

そう言ったのは乾だった。

「俺はこのベルトを取り戻して元の場所に戻れば良かったのに何で今夏学校みたいな場所に来てんだ？早く戻してくれよ」

「……いいわ」

「何でこんな物騒なやつらを連れて来ちゃうんだよ……」

こうして新たにこの学園に現れた乾巧とキノに事のあらましを説明する一同。

「……絶夢ですか……分かりました、いいでしょう」

そう言って漸くピースエイダーを下ろした。

「暫く自分の世界には帰れないみたいですね。僕もお手伝いしますよ」

「ふう、一晩かかってやっと納得してもらえたよ・・・」

「何で俺がこんな事しなくちゃならねえんだ」

「ちょっと士君！説明したのは殆ど私とシャナちゃんとキズナちゃんじゃないですか」

「気にするな」

「それで僕は・・・僕達は何をすればいいんですか？」

「次はこの世界に行く」

シャナが差し出したその本には何故か白い修道服を着た歳がまだ子

供くらいのシスターが写っていた。

「『とある魔術の禁書目録』？」

「禁書目録と書いてインデックスって読む」

「あゝっ、知ってる知っている！じゃあレジは準備を整えて来なさいよ」

「その間に私達は本を読んで情報を探ってみます」

各自散った。

レイジは校舎を出て外に出てみた。中央に生えている4本の桜の向こうでキノが何かをしていた。その近くには黒い何かがあったのだが、遠すぎてよく分からない。

「おい、キノ～～～～!!!!」

そう言いながら駆け寄ってみると拳銃を構えたキノが銃弾を壁に向けて発砲していた。

「……………前に立つと危ないですよ」

「うわっ! ちよっ・・・学校で拳銃振り回してしかも発砲するなんて何考えているんだよ!」

「試し打ちです。世界が異なれば物理法則が異なる事も考えられるでしょう? いざという時、パースエイダーが使えないと困りますから、常に冷静でいる為の準備ですよ。ある人に叩きこまれたんです。『落ち着きなさい。常に冷静に。怖がるのも、恐れるのも、後で。』」

「言ってる事はまあ、分かるけどさ、キノって大人しそうな顔していながら意外と過激だよなあ・・・そーいや、このバイクは?」

「コレはエルメス。僕の相棒です」

「初めましてお兄さん」

「わっ！バイクが喋った!？」

「すいません驚かせてしまって。こらエルメス」

「だってこの建物の敷地内でモトラドは走っちゃいけないんでしょ？
（注・モトラドは二輪車。空を飛ばないものだけを指す）」

「仕方ないだろ。そういう決まりになっているんだから。当分ここで過ごす事になるだろうし、旅が続けられないのに燃料も勿体無いだろ」

「キノのびんぼーしょー」

「我慢してよ。たまにエンジンかける位はするからさ」

「暫く旅もお預けかゝ。しょうがないなゝゝゝあゝ、でも暇だなあゝゝゝ」

「喋るオートバイかあゝゝさっきは咄嗟の事で驚いたけど、シヤナのペンダントが喋っていた位なんだから、別の世界じゃ案外当たり前なんだろうな」

そのまま校舎の方を振り向くと今度は深緑色っぽい服を着た体格の好きそうな男と、白い動物が見えた。

「あれ？あれってもしかして・・・」

駆け寄ってみると予想どおり、シズと連れらしき犬だった。

「やあ。旅の途中に急に景色が変わったかと思ったら気付いたらここにいたんだ。突然の事で驚いたけど危険はなさそうだね。どうやらここは何処かの学習施設の様だけど・・・」

「あっ！アンタ、キノとコロシウムで戦おうとしてた刀男だ！」

「！？？どうしてそれを・・・キミはキノさんのお知合いかい？」

「んー、まあそうなんところ。キノは向こう側にいるから詳しい話はキノから聞いてよ。尤も今は射撃の訓練をしていて危ないけどね」

「あはは、気を付けよう」

「（それにしてもシャナとアラストールが言った様にこうしてどんな人が増えていくみたいだな・・・この人みたいに戦い慣れた人が来てくれるとオレも心強いぜ）」

「？　どうかしたのかい」

「ん？　ああ、なんでもない。ところでその犬は？」

「ああ、私の連れだ。陸、ご挨拶なさい」

「すみません、つかぬ事をお尋ねしますが・・・」

「うわぁ！　犬が喋った！？　・・・なんてもう驚かねえっの。犬といい、ペンダントといい、別の世界じゃ当たり前みたいだしな」

「おや、いつもなら『犬が喋ってどこが悪い！』・・・という話になるのですが・・・どうやら常識にとらわれない方の様ですね。申し遅れました、私シズ様の忠実なしもべ、陸と申します。以後、お見知りおきを」

と、レイジがキノの世界の人物を程良く仲良くしているのに対して士達ライダーサイドは揉め事が多発していた。

事の始まりは、二人の人物の登場だった。一人は男、一人は女、それぞれ別々の扉から入ってきた。

レイジが部屋を出てから間もない頃に、その扉から女性の方が入ってきた。

「あの、すみません。ここどこ・・・巧!?!」

「真理!?!」

扉から現れたのは園田真理だった。

「!?!」

士、ユウスケ、夏海はその顔に見覚えがあった。特に士は自分に対して敵意むき出しだったその顔を忘れられる訳がなかった。

「（何故あいつがここにいる・・・）」

「ねえ、巧。ここは何処なの？何で私達こんな所にいるの？」

「ああ、うっせえ！一度にたくさん質問すんな！」

「ついでに聞かせてもらおうか」

そう言って割り込んできたのは士だった。

「だ、誰ですかあなた？」

「この期に及んでしらを切るつもりか・・・ファンガイアのクイン！」

「ファンガイア？クイン？チョット待って下さい。一体何の事ですか？」

「おい、真理に手出しすんな！」

「お前・・・いつのまにファンガイアと手を組んだ」

「何なんだよファンガイアって。真理は普通の人間だぞ」

そこへアंकが入ってきた。

「つたく、ここにはアイスはないのか」

「そんなものある訳無いでしょ」

「!! お前、何で此処にいる! あん時あそこで倒した筈だぞ!」

「はっ、何言ってるのか知らないが俺は完全復活するまで死ぬわけにはいかねえんだよ」

「あ、あの・・・アंकはとりあえず俺達の味方なんで・・・」

「こんなどう見ても人間じゃない腕をしたやつが味方だど?」

「あっ!?! やるのか!」

覚えとけ・・・アハハハハハハハハハハツハハハハハハ！！！！」

凄まじき笑いのツボ。

比奈は部屋を出ていったかとおもったら何かを抱えて戻ってきた。

[illegible]

何と、抱えてきたのは少し変わった形の自動販売機、ライドベンダーだった。

「あれ、比奈ちゃん。それ何処から持ってきたの？」

「購買の部屋に行ったら偶々見つけたんで」

「で、それどうするつもり？ まさか、士達の上に落とすつもりじゃないよね？」

⌈
•
•
•
•
•
⌋

「まさかそのつもりだったの!？」

その後、一応取り敢えず事態は沈静化した（正確に言うなら夏海と比奈の圧力に支配された）。購買から戻ってきたシャナは、

「アラストール、これは・・・」

「自業自得というヤツであろうな」

「そうね・・・」

そこへレイジ、伊里野、キノも戻ってきた。

「準備は出来た？」

「ああ、大丈夫だ」

「じゃあ説明するわ。『とある魔術の禁書目録』はSFとオカルト

が両立する世界みたいね。SFはサイエンスフィクション、分かり易く言うとか超能力や科学の事。オカルトは魔法使いや宗教なんかの事ね」

「そう聞いてみると科学と魔術って相反するものみたいに聞こえるね」

「そこだけ聞くと何だかおっかなそうだな・・・」

「なんだ、ビビってんのか？」

「そ、そんなんじゃない！」

「痴話喧嘩は余所でやって」

「話を戻しますけど、進んだ科学技術は魔法と区別がつかないという話ですか？」

「進んでいなくても、見た事がなければ火薬もガソリンも使い方次第で炎の魔法に見える」

「それもそうですね。そう考えると科学と魔法は、案外近い所にあ

るのかもしれませんがね」

「……んで、その世界で俺達は何をすればいいんだ？」

「絶夢の狙いはこれから行く物語のカギになる『歩く教会』に関するみたいなんです」

「『歩く教会』？なんだそりゃ、要塞みたいなもんか？」

「んー、それとはちょっと違うのよね。ま、行ってみれば分かるでしょ」

「次のライダーは誰なのか……」

「えっ？」

「今まで二つの世界を巡り、お前らと会った。なら次の世界でも同様の事があると考えるのが自然だろ？」

「あつ、確かに……」

「それも行けば分かるわ」

「ところでその別の世界へはどうやって行くんですか？」

「またあのオーロラでも使うのか？」

「その方法もあるにはあるんだけどな・・・」

「こうやって行くの！」

士達にとっては恒例の、巧とキノにとっては初めての出来事。足元が紫色に光り始めた。

「おいっ！なんだこれ！」

「これで世界を移動するんだ」

「・・・ツ！うわぁ！」

こうして7人の体が光に包まれ、次の瞬間には図書室から消えていた。

旅人として似ている者（後書き）

はい、というわけで次回からインデックスの世界へと入ります。

その世界で出会うライダーは誰なのか。

息拔きにクエスチョン！

シズの連れ犬、陸の声を演じていたのは誰でしょう？

士

「何かどこかで聞いた様な声だったな」

では、ヒントです。

「○○、ちゃんと○○○○食べた？」

「ええ、そうですよ○○の○○○○です」

分かる人はこれだけでも分かると思います。

答え合わせは次回。

感想もお待ちしております。

魔術師は塔に降り立つ（前書き）

キーワードは

？学園都市の高校生 上条当麻

？歩く教会 インデックス

？幻想殺しと禁書目録

？10万3000冊の魔道書

魔術師は塔に降り立つ

とある学生寮の一室。そこに一人の高校男子らしい生徒と何故か純白の修道服をしたシスターがいる。男子生徒の服装が半袖であることから季節は夏なのだろう。髪の毛は寝癖なのかどうかは不明だがウニの棘の様に広がっている。

この少年の名は上条当麻。床に置きっぱなしにしてあったキャッシュカードを踏み碎いてしまい、カップ焼きそばを作ろうとしていたら流し台に麺を全部ぶちまけてしまい、追い打ちをかける様に担任による補習通告の連絡網^{ラッコール}を受け、気持ちを入れ替える為に布団を干そうと思った時に純白のシスター、つまりインデックスがベランダに引っ掛かっているのを発見したのである。

「……ふうん。てか、つまりアレだ。それが本つつっ当に『異能の力』だってんなら、俺の右腕が触れただけで『歩く教会』とやらは木端微塵って訳だな？」

そう言い終わった途端・・・

彼女の修道服が大きさも不揃いな幾つもの布切れになってストンと彼女の足元に落ちた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・うわああああああああッ!!」

先程の場面が終わったかと思いきや、再び正体不明の光の渦に巻き込まれ、彼らが降り立った場所。そこは学園都市、第7学区だった。

「うう・・・いろんな国を旅したけど、こんな目に会ったのは初めてです」

「そんな事より！今女の子の服が脱げて！ヌードに！」

直後、士と巧の鉄拳が飛ぶ。

「バカかお前は」

「もう少し空気を読めよ！」

「話から察するに、『歩く教会』とは彼女の服の事の様ですね」

「ヌードが！フードが！ふおっはいほへはふふきは・・・！！（もっかい飛べば続きが・・・！！）」

「好い加減にしやがれ！」

「・・・プハハ。ああ！いや違う！絶夢だ！絶夢の手下をさっさとやっつけて続き見ようぜ！なっ？なっ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

ヒロインサイドに非常に白い目で見られるレイジ。

「3人ともなんだよ、その目は・・・」

「やる気があるのはいいけど」

「感心できる動機ではないですね」

「いいだろその位の楽しみあったって！早く行こうぜ、なっ？なっ？なっ？」

「この世界の絶夢の手先を倒したらあのキズナってヤツにコイツを1度徹底的にボコッテもらおうか」

「それがいいだろうな」

そんな彼らの会話にどの辺りで入ればいいか分からなかった映司はただただ苦笑するしかなかった。

学園都市は一目見ただけでも分かるほどの技術が発展している様だった。風力発電用の風車があちこちに見え、歩道橋の下を覗くと清掃ロボットが自動で動いている。ビルも多く建ち並び、学生寮もポコポコと見える。それもその筈で学園都市は全人口約230万人のうち、約8割が学生が占めている。

「何だかこの世界はすっげえ科学が進んでいるみたいだな。そんなもんばっかで息が詰まるかと思ったけど、普通の商店街もあったんだな。なんかホッとしたぜ」

「これが普通なのですか？ 僕の世界とは随分様子が違いますね」

「そう言う割に驚いたりしないんだな、お前って」

「色々な国を旅したせいでしょうね」

「俺も今の役割が一段落したらまた何処かに行こうかな」

「だったらその為にも絶夢の手先を倒さない」と

と話していた矢先に何処からともなく敵が現れた。その風貌は丁度高校生位。

「嘘っ！？学生かよ！」

「別に驚くことじゃない。けどこの世界の学生は超能力を使ってくるから」

「ところであの敵にはパースエイダーを使っても大丈夫なんですか？」

「まったく問題ねえ。あいつらは絶夢が作り出したもので本物じゃないからな」

「そうですか。なら、遠慮は必要ありませんね」

キノはそう言うのと、パースエイダーの安全装置を外した。

「私達もいくわよレイジ、伊里野加奈」

「ああ」

「・・・」

シヤナが刀を、伊里野が両手にコンバットナイフを、そしてレイジ
ブルードザオガー
が吸血鬼を構えて正面の敵と向き合う。

「はっ！」

「邪魔！」

「あっちいてろ・・・」

「そこですね」

レイジは2つの世界を移動してきたことで戦いのコツを一通り掴んだようで、吸血鬼は未だ引きずっているが目の前の敵には取り敢えず対応できている。シャナは元々戦いなれているようで特に言うことはなし。伊里野は戦うというよりは近づいてくる敵を追っ払う様な戦法だが目の前の敵はそれぞれの世界に絶夢が送った手先に比べればそれほどの脅威ではないので今のところは問題ない。

そして今の世界から仲間になったキノだが、両手の拳銃で敵を正確に撃ち抜いていた。恐らく旅に出る前に相当な射撃の訓練を積んだのだろう。

彼等の闘いを見つめていると、不意にライドブッカーが光だした。

「な、何だ!？」

士が中を開くと、一枚のカードが飛び出し、士はそれをキャッチした。そのカードは・・・

「こいつが今、この世界にいるライダーなのか・・・？」

「あれ、これって士さんが前の世界で使ったカードですよね？」

「つうことは・・・」

と、乾が最後まで言い切る前に、

「・・・お出ましか」

銀と銅の亀をイメージした怪人が現れた。

「こいつらは・・・」

「アンノウン。光を嫌い、人が人以上の力を持つのを認めないやつらだ」

士がディケイドライバーを装着しようとすると、

「逃げて！」

と、青年の声がした。

襲いかかるアンノウン二体の降りおろされる腕をかわして背中に蹴りをくらわせる。敵が怯んだ隙に両手を左腰にあて、右手を素早く前に突きだし後ろに戻す。すると青年の腰に金と赤が基調のベルトが出現した。

「まさかアイツ」

「間違いないな」

戻した右手を再びゆっくり前に出す。

「変身！」

両手でそれぞれのベルトのスイッチを押すと、その体が眩い光に包まれた。それが収まった時、青年の姿は、

「仮面ライダー・・・アギト」

金が基調の龍がモチーフのライダー、仮面ライダーアギト、グランドフォームへと姿を変えていた。

魔術師は塔に降り立つ（後書き）

というわけで、今回出現したライダーはアギトでした。

士

「アイツ何処かで見たことあるな」

全員

「ショウイチさ〜ん！」

ショウイチ

「俺を呼ぶなあ〜〜〜〜〜〜〜〜！！！」

感想お待ちしております。

魔術師は塔に降り立つ？

「はっ！」

アギトの軽やかな動きに二体のアンノウンは翻弄されていく。

「よっし、俺達もやるとするか」

—KAMENRIDE DECADE!—

—STANDING BY—

—COMPLETE—

それぞれディケイドとファイズに変身した二人。

「敵はなんか固そうだし、これでいってみるかな」

オーズドライバーを装着し、左に白、真ん中に灰色、右に赤のメダルをはめ、スキャナーをスライド。

—サイ！ゴリラ！コンドル！—

亜種形態、サゴリドル。

「お前ってほんっと色んな姿になるんだな」

「あはは、いやあ、まあ・・・」

「よっし、いくか」

ファイズとオーズは銀色の、ディケイドは銅色のアンノウンを相手に拳を向ける。

「おりゃ！」

「たあ！」

「はあ！」

三人に驚いたのは敵だけではなく、アギトも一緒だった。

「あれ、貴方達はさっきの・・・」

「まあ、助太刀みたいなものです」

「細かい話は後だ。今はコイツらを倒すことに専念しろ」

「そうだな」

背後の甲羅は非常に硬いので、当然正面から攻撃することになるわけだが、何せ元となっている生物は亀なので動きこそ遅いものの、攻撃は強力。特にファイズは装備全体の防御力が低めなので、その点は注意しなければならない。

「乾さん。俺がアレの相手をしますからトドメをお願いします」

「ああ」

乾は左腰にあるファイズギアの1つ、ファイズショットにミッションメモリーをセットする。

— R E A D Y —

その間にオーズは3つのコアの力を利用した戦法で闘いを優位に進めていた。コンドルレッグの連続回し蹴りで反撃の余地を与えず、サイヘッドで頭突きをくらわせ、バコーンプレッシャーで敵を吹っ飛ばす。

「今です！」

その合図を聞いたファイズはファイズフォンのENTERを押す。

— E X C C E D C H A R G E —

赤いフォトンブラットが送り込まれ、ファイズが敵へと走る。

一方、銀色の方を相手にしたディケイドとアギト。

「防御が高いならまずはそいつを崩す事が先決か」

ディケイドはライドブッカーから一見するとライダーとは別と思え

る姿をしたカードを選択した。

—KAMENRIDE HIBIKI!—

ディケイドの体が音叉が鳴り響く音とともに薄紫色の炎に包まれD響鬼に変身。

「さて、その甲羅、崩してやるとするか」

—ATTACKRIDE ONIBI!—

「アギト! 火傷したくなかったらそいつから離れろ!」

「えっ!?!・・・あっ、はい」

アギトが敵から離れたことを確認してからD響鬼は仮面の口辺りから紅蓮の炎を敵の甲羅に吹き付けた。たちまち甲羅は真っ赤な高温になる。敵は発音理解不能な奇声をあげる。

「心配するな。すぐに楽にしてやる」

休む間もなく、続けて緑色の半魚獣をイメージさせる絵柄が描かれたカードを装填。

—FORMRIDE KIVA! BASSIER—

Dキババツシャーフォームに変身し、左手に持つバツシャーマグナ

ムで焼けた甲羅に水の魔弾を集中攻撃。

水蒸気が発生し、伸縮が間に合わず甲羅にいくつもの亀裂が走った。

「さて、派手にいくか」

—FORMRIDE DENO! AXE—

D電王アックスフォームに変身して、次のカードを装填する。

—ATTACKRIDE DENGASHER!—

出現した4つのパーツを素早くアックスモードに組み立てる。

「お前の砦を壊してやるぜ」

アックスで正面の胴体を切りつけつつ、敵の背後をとる。

「うりゃあああ!」

思い切り降り下ろされたアックスは甲羅を粉々に打ち砕いた。

「トドメ、いくか」

もとのディケイドの姿に戻り、自分のクレストが描かれたカードをライドブッカードから取り出す。

「アギト、いくぞ」

「はい！」

アギトが精神を集中すると頭部のクロスホーンが2本から6本に増える。床にオレンジ色のアギトの紋章が出現し、左足を一步さげて構えの態勢をとる。

—FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DE CAD
E!—

ファイナルアタックライドのカードを装填し、ディケイドの前方に10の3Dディメンジョンが出現する。

ディケイドとアギト、それぞれがその場から高く飛び上がる。

「やあああああ!」

「はあああああ!!」

ディケイドの「ディメンジョンキック」と、アギトの「ライダーキック」、更にファイズの「グランインパクト」が同時に決まり、2体は頭部の上を光らせながら爆発した。

「まあ、こんなもんか」

ディケイドはそう言うと、ドライバーを開き、士の姿に戻る。ファイズ、オーズもそれにならう。

「やっぱり皆さん、さっきの・・・」

「あの、突然ですいません」

「あれが・・・アンノウン・・・」

「士さん!」

キノの声と共にレイジ達も集まった。彼らの関心は当然アギトに向く。

「なあ、コイツも仮面ライダーなのか？」

「ああ、仮面ライダーアギト。名前は・・・」

「津上翔一です」

アギトも変身を解き、元の青年の姿へと戻る。

「それにしてもどこなんでしょうね此処。レストランの裏庭で野菜を収穫していたら急に銀色のオーロラみたいなものが俺を包んで、気付いたらこんなすごい所に」

「銀色のオーロラ!？」

「それって、乾さんが言ってた・・・」

「おそらく間違いないだろうな。いいか津上、今ここを含めて、幾つかの世界に改ざんが起ころうとしている。それをしようとしているのは絶夢つつう野郎だ。元の世界に戻るにはソイツを倒すしかない。だから俺達に協力しろ」

「・・・分かりました。俺、やります」

「随分とあっさりだな」

「だって皆さん、嘘をついているようには見えませんし。でも、この子たちどう見ても中学生か高校生ですよ？戦わせるのは危険なんじゃないですか？」

「それについては問題ないわ」

シャナの大太刀や、キノのパースエイダーを披露。

「コイツらはこいつ等で一応の戦力はある。だから取り敢えずは問題ない」

「・・・で、俺は何をすればいいんですか？」

「絶夢を倒す為にこれから幾つもの世界を回る事になる。そこで出てくる奴を倒す。今はまだそう大した奴は出てきていないが、この先徐々にきつくなっていくだろうしな」

「分かりました。オレで力になれるのなら、宜しくお願いします」

「よっし。んじゃま、行くか」

「えっ、行くって何処にですか？」

「今のところ、この辺りに絶夢の手先と思えるくらい大きな反応を感じるヤツはいない」

「だからまずあの鉄橋の先に行ってみようという事になったんです」

「なら、善は急げだな」

鉄橋は見た感じは探せばありそうなもので、下には芝生と川が流れている。

「この鉄橋は案外普通なんだな」

目下のところ異状はない。

しかし、鉄橋の真ん中を過ぎたあたりで歩道橋の下で見た様な清掃警備ロボットが近付いてきた。

「わわわ！何か来ましたね」

「ピピピ・・・学園都市内へ許可なく銃火器を持ち込む事は禁止されています。ただちに警備員の証明書を提示して下さい」

「銃火器の持ち込みに許可？何の事だ一体？」

「多分、門矢士のその本みたいなやつとキノのそれに反応しているのよ」

「ボクのパースエイダーですか（注・パースエイダーは銃器。この場合は拳銃）」

「なるほど。ここの安全を守っているって訳か」

「街の掃除をして＋αで警備機能まで付けた訳か。進んだ科学力だぜ」

と、呑気に話しているとロボットがサイレン音を鳴り響かせた。

「ピピ！ピピ！警告！警告！ただちに警備員の証明書を提示して下さい！！」

「だーっ！ピーピー煩え！もういつそのことぶっ壊しちまった方がいいんじゃないのか」

「ダメよ。今は余計な騒ぎを起こしたくない。それに壊したら壊したで余計に大変な事になる」

「仕方ありませんね。一旦、さっきの街まで戻りましょうか」

「きっとそれが1番ですね」

結局もと来た道を引き返した一同。

「で、戻ってきた方がいいがどうする？このままじゃ先には進めねえし、かといって警備員の証明書なんざ簡単に手に入るものじゃねえ

ぞ」

「やむを得んな。虱潰しに探すほかにあるまい」

「仕方ありませんね。ではまずは街の中から始めましょうか」

とそこへ、女の人はこちらにやってきた。年はまだ若く、体格と見た目からして何処かの学校の体育教師と言ったところだろうか。

「ちょっと君達、悪いけど待ってくれじゃんよ。ここらに財布落ちてなかった？」

「いえ、俺達は見えてないですけど・・・」

「そっか。邪魔して悪かったじゃん。あ、財布がないと困るじゃんよ」

そういいながら向こうへ行ってしまった。

「とはいえ、どうすればいいんだ」

「買って手に入れるものでもなさそうですしね」

「いやなさそうっていうか、そんなことをしたら職権乱用になっちゃうからな！」

「やっぱり地道に探すしかない」

「じゃあ、コレ使うか」

映司はポケットから赤いカンを2つ取り出した。

「こんな時に飲み物飲んでいる場合じゃないだろ！」

「いや、コレ飲み物ではなくて・・・」

そう言いながらプルトップを開ける。すると、

タカ・カン

と、カンがタカの形に変形した。

「うおっ！すげえ！これもこの世界のものなのか？」

「あゝ、えっと、これは元々俺達の世界にあったもので幾つか持っていたんだけど、まさか使う事になるとは・・・」

そのままもう1つのプルトップも開ける。

タカ・カン！

「警備員の証明書みたいなものと、あと財布を探して」

火野の声を聞くと、カンロイドは何処かへ飛び去っていった。

「さて、俺等は俺等で探すか」

「だけどあんまり散らばるとかえって大変だから私達はまとまって探しましょ」

かくして証明書と財布を探し始めた一行だが、科学が進んでいるこ

の世界では目立ったゴミ自体がなく、そもそも財布であったら交番に届けられているか、持っていかれてしまっている可能性が大だろう。

「こんな所探しても見つかるのか？そもそも証明書って手帳みたいなものかIDカードみたいなものなのかも分かんねえし」

「文句言ってねえで黙って探せ」

「んな事言ったって・・・」

そこへ、先程はなった2体のタカカンロイドが戻ってきた。どうやら何かを見つけた様である。

「何かあった？」

「キーン！」

「糸口が見つかったのかもしれませんがね」

「急ぎましょう。こうしている間にも絶夢の改ざんは進んでいるん

だから」

カンロイドの後について行くと、そこはこの世界に降り立った時にいた歩道橋の中間点当たりの場所だった。そこには先程鉄橋でもみた清掃警備ロボットがいたが何処か不調なのか動きがおかしい。

「どうしたんだこのロボット。変な音がするし・・・」

「あつ、吸収口に何か詰まっていますね」

「んゝ、どれどれ・・・あつ、これは！」

ロボットが詰まらせていたのは主に札を入れる時に使用する長財布だった。

「財布っていえば・・・」

「どうやら先程の女性の者の様ですね」

「んじゃまあ、中身をチェックチェックと・・・どの位入っているのかな？」

「ちよっ・・・いくらなんでもそれは・・・」

「お前、他人の財布を無断で・・・」

「流石にそれはちよつとよくないんじゃないかな・・・」

キノ、シャナ、映司に釘を刺されたが、

「固い事言うなって。さっき街を探すって言ったじゃん。これもその一環だよ」

「それにアイツの物が確認出来るものが入っているかも見ておいた方がいい。万が一間違いだったら無駄足になっちまうしな」

「・・・あつ、これは！」

その中にはIDカード形式の警備員の証明書が入っていた。

「ビンゴ！」

「ついでに幾つか抜いておけ。元の世界に戻ったらナツミカンに現

像代やら珈琲代やらを請求されるしな」

「調子に乗るな！門矢士」

「ちっ、お固い奴がいたもんだぜ」

「いやいくらなんでもお金を抜き取るのは流石にまずいでしようし」

「チヨットそのアンタ達！」

割り込んでくるように歩道橋の向こう側から少女が駆け寄ってきた。
見た目は中学生くらい。

「そこで何をしてるの・・・ってあぁっ！！清掃ロボを壊してる！」

「ええっ！？壊してるう！？いや違うって！壊している訳じゃなくて・・・」

「問答無用！ジャツチメント風紀委員に突き出してあげるわ！」

少女の体から電気が放出された。どうやら話して分かってもらえる状況ではない様だ。

「あ、あれって電気か！？で、でもどうして・・・」

「少年、何度も言っているが異世界の人間と面倒を起こすのは好ましくない」

「そうですね。ここは一先ず退散しましょう」

「待ちなさい！カラー！」

少女の頭部から青白い電撃の槍が走る。

「うわああああああ！！！！」

当然その速度を越して移動できるすべを持っていないので全員真っ黒焦げ・・・となるはずだった。

しかし、そうはならなかった。電撃がこちらに届いたかと思った瞬間、それが何事もなかったかのように消えてしまったのである。

「えっ！？嘘オ！？」

「何だよ・・・何でアンタがアイツと同じチカラを持ってるのよ！」

とうとう追いかけてきた。

「あんまりやりたくはないけどしょうがないか」

映司はポケットから青いカンロイドを2つ取り出し、プルトップを開く。

タコ・カン！

開いてタコの形に変形したカンロイドは墨を吐いて、視界を妨害する。

「うわっ！何よこれ・・・」

「皆、今の内に・・・」

とりあえず歩道橋を降りて、死角に隠れる一行。

「はあゝ、おつかねえゝ。なんなんだよあの女の子。ビリビリゝ！
って電気を出して・・・」

隙間から様子を確認して見ると、執拗に自分達を探している様だ。

「アイツら何処に行ったのよ！しかも大の大人が4人もいながら！
絶対、ジャツチメント風紀委員に突き出してやるんだから！」

「ふえゝ、アイツまだ俺達の事探してるぜ。諦めの悪い奴だなあ」

「こうなったら仕方がないな。誰かが囧になるって方法もあるが、
あの電撃をくらったら多分対処をしている暇はないだろうな。あの
鉄橋まで全速で走るぜ」

「シャナの炎で何とかならないのか？」

「出来ない事もないかもしれないけどそんな事をして無駄に体力を消費するなんて愚かな事よ」

「寧ろ貴方が二人の相手をすれば身を持ってその強さが分かるんじゃないですか？」

「俺はモルモットじゃないんだからそんなのイヤだよ・・・」

「そういう無駄口こそ歩きながらしろ」

「急がないとまたあの子と鉢合わせそうですしね」

いそいそと鉄橋へと急ぐ一行。だがこの時、火野と津上だけが違和感を感じていた。

・・・人の気配があまりにも無さ過ぎると。

鉄橋の間を過ぎ、先程の警備ロボットに鉢合わせる。

「ピピピ・・・ただちに警備員の証明書を提示して下さい」

「他人の証明書を勝手に使うのは気が引けるけど、緊急事態だからしょうがないよな」

レイジは先程財布の中から見つけた警備員の証明書を掲示した。

「ピピピ・・・証明書を確認しました。どうぞ、お通り下さい」

「本人じゃないのに認証するとか、案外抜けているロボットだな」

と、士が毒舌を吐く。

「では、行きましょうか」

とキノ。が、またしても

「チョット待ちなさいよ！」

と先程の処女が後方数十メートルにまで迫ってきていた。

不吉な笑みを浮かべて

「この私から逃げ切れるとでも思ったの！？甘い甘い！」

「本当に諦めの悪い奴だな」

「でもどうします？このまま追いかけられていたら俺達ともに戦えませんか？」

「もうこうなったら逃げるが勝ちだぜ」

一同が警備ロボットを通り抜けて向こうに行こうとすると、

「逃がすもんですか！覚悟なさい！」

と電撃を放ってきた。

「うわっ、またかよ！」

レイジは咄嗟に右腕を構えるが、電撃はそこまで届かず幸か不幸か清掃ロボットに直撃し爆破してしまった。

「あ……やばっ……私、知りくらないっ！」

「おい、ふざけんな！自分でぶっ壊しておいて自分だけ逃げる気か！」

「……私、知りくらないっ！」

そう言うと、少女は向こうへ行ってしまった。

「アイツ結局何がしたかったんだ」

「この世界を出てあの図書室にいるようだったらぶん殴ってやろうか」

「まあまあ、乾さん。女の子に暴力は禁止ですよ」

「でも御蔭でこの辺りの通行が自由になったんですから結果オーライですよ」

「どうも腑に落ちねえけどな」

若干ライダーの数人とレイジが愚痴を漏らしていたがとりあえずキノの言う通りなので一行は鉄橋の向こう側へ向かった。

魔術師は塔に降り立つ？

鉄橋の向こう側へついた一行。

「それにしても驚きましたね。超能力というからてっきり物を浮かせるとかそういうのだと思っていましたが、まさか体から電気を出すことができるなんて・・・」

「そう言っている割には全然驚いた感じじゃねえなお前」

「あの人に常に冷静叩き込まれたからでしょうね」

「あの人って？」

「僕に旅の知恵を授けてくれた、師匠と呼ぶべき人ですね」

「師匠か・・・俺にはそんなやつはいなかった」

「乾さんも旅をしていたんですか？」

「ああ。つっても特に夢とかがあったわけじゃねえんだけどな」

「旅をすると色んなやつに会う。いくつもの世界をまわってきたが、まだまだ未知な所が多い様だな」

「感傷に浸るのもあとで出来るわ。そろそろいくわよ」

「お前はしっかりしてんなシャナ」

橋の向こう側にあるこちら側にはマンションの様な建物が多い。どうやら学生寮が密集している様である。

「こんだけ学生寮が多いって事は、学生の数も相当なものなんだろうな」

「この世界のメイン的な場所になっているこの学園都市は人口の約8割が学生なのよ」

「8割もか！」

「凄いですねそれは」

「何でお前はそんなに天然な反応なんだよ津上」

「え、そうですか？それでも結構驚いているんですけど」

工事用の黄色い看板が掛けられている横の通路を通ろうとすると何故か通路入口あたりに戻ってしまった。

「ん？」

「あれ、なんだ？同じ所歩いていないか・・・それとも寝ぼけたのかな？」

再びその通路を歩いてみるが、見えない力で押し返されているかのように先に進めない。

「何なんだコレは！？」

「これがこの世界の魔術ってやつか」

「何者かの手で結界が張られている様ね」

「結界・・・ですか？」

「うむ。この現象から察するに人払いの決壊の類であろう。これほどのものであれば、何処かに力の源となるものがあるはずだ」

「その源を破壊しない限りは先へは進めないでしょうね」

「じゃあとつととその結界の源とやらを見つけて壊そうぜ」

「まったく、何で道一つ通るのにこんな手間をかけなきゃならねえんだよ」

「どれだけ歩いても近付けない・・・悪い夢を見ているみたいです」

一行がもと来た道を手掛かりを求めて進んでいると・・・

「・・・あれ」

「ん、何か見つけたのか伊里野？・・・なんだこれ？こんなのさっ

きは無かったよな・・・？」

休憩所の様に設けられていた空き地に星に赤い丸、それに何かの呪いの言葉の様な言葉が書かれたカードが数枚貼られていた。

「その呪符が結界の元で間違いないだろう」

「んじゃさっそく・・・」

貼り付けてあったカードを破り捨て、先程の通路に戻る。

「・・・ん、ちょっとは進める様になったけど、まだ先には行けそうにないな・・・」

「この結界の力の源があれだけじゃなかったってことね」

「恐らく橋の向こう側にもあのカードはあるかもしれませんね」

「こうなったら手分けして探すか。それぞれに俺達とお前らで一人ずつ組んでこの区域のアレを破壊するってのはどうだ？」

「でも、どの位の数があるか分かんないんだぞ。それに仮にそうしたとしても俺達には互いの状況を知り得る手段がない。一々此処に戻っていたらどれだけ時間がかかるか分からないぞ」

「それもそうだな・・・おい火野、さっきの空き缶で何とか連絡を取り合う事は出来ないのか？」

「ええっと・・・あつ、あつた！」

映司が取り出したのはバッタの絵が側面にプリントされた緑色のカシロイドだった。

「それで連絡が取れるのか？」

「はい。使い方はさっきのと同じでコレのプルトップを開けるだけです。ただ・・・」

「ただ？」

「二つしかないんです」

メンバーはライダーだけでも士、映司、乾、翔一の4人。言うまで

もなく、数が足りない。

「・・・では、こうしたらどうでしょう？」

「何か案でもあるのかキノ？」

「ええ。まず、先程士さんが言われた様に僕達を4つの組に分けます。それぞれ2つの組がここの区域と橋の向こう側を担当します」

「だからそれだと手間がかかってしょうがねえだろ」

「話は最後まで聞いて下さい。火野さんの緑色のものが2つしかないので、向こう側とこちら側で1つずつ使って対応するんです。ただあのカードがどの位貼ってあるかは分かりませんし、もしかしたら物凄く多いかもしれません。そこで、全部破ろうとしないでこの通路が通れる様になったら合図をするんです。僕のパスエイダーか士さんのそれで」

「うむ。確かにその方法の方が効率的だな」

「で、組み合わせと誰が向こうに行くかなのですが・・・」

話し合いの結果。橋の向こう側に行くのはレイジと乾、伊里野と火野になった。

「迅速に行くわよ」

各自、持ち場へと散る。

「・・・さて、そろそろいいだろ。出てこいよ」

通れない通路側を向いて、大声を出す。その声に反応するかのように、アンノウンが、ただし蟻の様な姿をした怪人がこれでもかという位に溢れ出た。

「これが今まで学生寮の裏に潜んでいたんですか」

「そういうことになるな」

「助太刀しましょうか？」

「いや、俺1人で十分だ。キノはここを見張っててくれ」

「・・・分かりました。けど、無茶はしないでくださいね」

「俺を誰だと思ってるんだ」

そう言い残し、ドライバーを装着する。

「変身！」

—KAMENRIDE DECADE!—

「暇潰しにはちょうどいいな」

ライドブッカードをソードモードにしてから一気に突っ込む。

「はあああああああ!!」

次々に出てくるアンノウンもといアントロードを切りつけていくデ
イケイド。

「チッ！面倒くさいやつらだ。一気に一掃してやる！」

—KAMENRIDE KABUTO!—

「一瞬のマジックショーをご披露してやるぜ。その目に焼きつけな・
・できるものならな」

—ATTACKRIDE CLOCK UP!—

傍にいた人、つまりキノの視界からDカブトが消えたと思いきやアントロードの横を赤い残像を走らせながら、ライドブッカーで切りつけていった。

取り敢えず目で確認できる敵が頭上に光をあげて爆発したのを確認すると、クロックアップの世界から出、ディケイドの姿に戻る。

が、その背後にまだアンノウンが潜んで隙を伺っていたのか一気に襲いかかってきた。

「なっ!?!」

おもわず防御の態勢をとるディケイド。

が、キノがパースエイダーを発射し敵の気を剝らした。

「油断しすぎですよ」

「大きなお世話だ」

続けて別のカードを取り出すディケイド。

—FORMRIDE AGITO! FLAME—

Dアギトフレイムフォームに変身し、二刀流のフレイムセイバーを構える。

「あんまし裕著にやってる余裕はなさそうだな。キノ、いざとなったら津上を頼れ」

「いざとなったらそうします」

一方、橋の向こう側へ渡った一行も似たり寄ったりの状況だった。

「うじゃうじやいやがるな」

「コイツらを相手しながらカード探しをしないのか・・・」
「

相手なら俺がします。皆さんでカードをお願いできませんか？」

火野は残りのタカカンロイドを各人に1つずつ配った。

「すまねえな」

「いえ」

そして大量のアントロードの前に立つ。

「こんなに沢山・・・正面から戦ったら消耗戦になるだけだな。けど、ここでガタキリバを使う訳にもいかないから・・・」

十数秒ほど悩んだ末、火野の出した結論は、

「(皆さん、ちょっと暑くなるかもしれませんが我慢して下さい) 変身!」

ーライオン! クジャク! バッタ!ー

亜種形態のラジャバ。

コンドルアームで空中に浮かび、ライオンヘッドのライオディアスとタジャスピナーの光弾で、相手を攻撃する。

「今のうち・・・」

「ああ、急ごうぜ」

オーズが時間を稼いでいるうちに伊里野、レイジ、そして乾はルーンの破壊に向かった。

この世界に降り立った歩道橋の通路をはじめ、壁、鉄橋の柱、河原

にも撒かれていた。

「まったく、こんな所にまで貼りつけるなんてご苦労様だぜ」

「対策に抜かりはないってことか」

「急がないと・・・」

と、各人が見つけたルーンを破いてまわっているとまだオーズが倒しきれていなかった敵が迫ってきていた。

「アイツ！」

思わず乾はファイズギアを装着するが、

「皆さん伏せて！」

と火野の声が上空からした。

ドライバーからメダルを抜き取り、タジヤスピナーに嵌めてからスキャナーで読み込む。

—ライオン！クジャク！バッタ！ギン！ギン！ギン！ギガスキャン
—

「セイヤ~~~~~ッ！」

幾つもの超高熱を持った光弾が発射され、敵が爆散する。

かと思いきや、出番を待っていたかのように次の敵が出現した。

「これじゃキリがない！」

そんな所にバッタカンロイドに通信が入った。

「私よ。通路が通れるようになったわ」

どうやら声の主はシャナの様である。

「そっちの方はどう？」

「あらかた片付いたんだが遊んで欲しいお客さんがお待ちかねですよ・
・」

「地上からそっちに行こうとすると結構時間がかかりそうです」

「不味いわね・・・」

「だったら地上以外の方法で戻ればいい」

士の声。

「おいおい、まさかここで穴掘りでもしろっていうのか」

「その逆だ」

そう言うとしは黄色のカードを取り出す。

「迎えに行く為の下準備だ。1分だけ時間を稼げ」

「1分でいいのか？」

「ああ」

「・・・・・・・・」

そこで通信は途絶えた。

「さて津上。ちよっとくすぐったいぞ」

—FINALFORMRIDE A A A AGITO!—

「えっ、ちよっと・・・・・・・・なんなんで・・・・・・・・うわっ！」

ディケイドがアギトの背中に触れた途端、アギトの姿がスライダーバイクの様な姿に変わった。

「なあっ!？」

「ライダーというのはこんな事までできるんですか・・・」

「こんなのは序の口だ。んじゃまっ、アイツらを迎えに行くとする

か」

アギトのFFR、アギトトルネイダーに飛び乗り、鉄橋の向こうへと急ぐディケイド。

一方、乾はファイズに変身してファイズエッジを使用しながら応戦。火野はコンボの危険性を考えて、頭部をクワガタ、脚部をコンドルに変えた。

ークワガタ！クジャク！コンドル！ー

亜種形態ガタジャドル。

「士さんが来るまで何としても持ちこたえないと」

「言われるまでもねえよ！」

ファイズエッジ、タジャスピナー、コンバットナイフ、そして吸血^{ブルードザ}鬼^{オガ}。それぞれの持ち主が敵と競り合っているがなにしろ減る傾向を見せないで若干バテリを感じていた。

「ちょっときつくなってきましたね」

「くそっ！士のやつはまだか！」

「待たせたな」

—ATTACKRIDE BLAST!—

ディケイドブラストで敵を退け、アギトトルネイダーで僅かばかりの空間を作る。

「まったく、遅えんだよ」

「無駄口は後にしろ。火野、伊里野を頼めるか？」

「あっ、はい。じゃあ伊里野さん、俺の背中に」

「・・・・・・・・」

伊里野は幾分か不安そうな表情をしていたが、判断でオーズの背中に身を預けた。

「よっし、行くぜ！振り落とされんなよ」

「うおお！」

「変な声出すな」

レイジ、ファイズ、そしてディケイドが乗っているアギトトルネイダーは非常に狭い。なので誰かがバランスを崩すと他のヤツもそれにつれられる羽目になる。

で、結局のところレイジが空気の圧力に耐えられず足元を滑らせてしまった。

「うわっ！」

「バカかテメエは！」

必死にレイジの左手を掴むディケイド。右手は吸血鬼ブルードザオガーを握っている。
のでどうにもならない。

「いててててててててててて！腕がもげる~~~~~」
「!!!!!!」

「自業自得だ」

「ぜってえに離すんじゃないぞ。アイツらの餌になんたくなかったらな」

下を見るとアントロードがアリの行列の如く進んでいた。

漸く鉄橋の向こう側の通路まで到着した一行。オーズ達も合流した。

「ふえ~~~~~。死ぬかと思った~~~~」

「ったく、だから振り落とされんなったのに」

「向こうの通路は通れるようになったけどまだ力の余波を感じるわ」

「行くぞ」

道路を挟んで向こう側の通路に先程と同じルーンのカードがざっと数えて100枚程貼り付けられていた。

「この位なら・・・」

オーズはメダジャリバーにセルメダルを1枚投与し、スキャナーで読み込ませる。

— SINGLE! SCANNING CHARGE! —

「セイヤ~~~~~!」

オーズバッシュで目の前の空間が切断したように見えた次の瞬間に
ルーンは破け、それ以外は何事もなかったかのように元に戻った。

「あらかた片付いたか」

「そうね」

「よし！ 絶夢の手下をさっさとやっつけてヌードの続き見ようぜ
！」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「懲りないやつだな」

「アラストールにまで呆れられると、流石にちょっとへこむぜ・・・」

道路を渡ろうとするとその行く手を阻むように3本の火柱が上がった。

「うわぁ！なんだこりゃ！炎の魔法！？魔法使いか！？」

「そうだね。確かに僕達は『魔術師』だけど？」

声のする方を振り向くとシャナにも劣らない真っ赤な髪に黒い神父の服。何より2メートル近い身長を持つ男が、道路の鉄橋と逆側から現れた。その表情はこれまで戦ってきた絶夢の手先の様に何かを企んでいるかのごとくニヤついていた。

「ステイルⅡマグヌス!? この世界での登場はもつと後のはずなのに!」

「絶夢の力は、何でもありの無茶苦茶だからね」

「ということは、偽者・・・?」

「本物のステイルⅡマグヌスが喉から手が出るほど欲しがっている禁書目録を手に入れて・・・僕がステイルⅡマグヌスになる。禁書目録は完全無欠のステイルⅡマグヌス、唯一の弱点だそうだからね・・・さあ、始めよう。『本物』は手加減もするけど、僕は違うよ?」

「そんな事させてたまるか!」

「ふん、まあいい。君達ライダーの相手もそろそろ到着する頃だろう・・・」

「!?!」

道路の反対側。奇妙な呻き声が聞こえたかと思いきや、津上と士は

それぞれ見覚えのある敵に視線を送っていた。その中でも3体には

「人ハ人ノママデイイ。人ノママデ・・・」

「人ガ人以上ノ力ヲ持ツコトハ許サレナイ」

「人ガ神ニ近付クナ！」

「いよいよこちらも大将の出番って訳か」

「とりあえずてっぺんを潰す事に専念した方がよさそうだな」

「・・・」

アギトは黙りこみ、オーズはメダルを基本の3色に変えた。

「タカ！トラ！バツタ！」

「タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！」

「行くぜ！」

ディケイドのその声を合図に皆が一斉に前へと突っ込む。

戦いが始まった。

魔術師は塔に降り立つ？

戦闘（ライダーサイド）

敵の中でも先頭で進んでいるのがバッファロード、クイーンアントロード、そして火のエル。そしてその後ろをまるでゾンビの様に歩いてくるアントロードの群れ。

「ちんたら相手をしている時間はないってことか」

「なら、前の世界でやったみたいにすれば・・・」

「馬鹿言うな！あんなの二度と御免だぜ」

「口動かす前に手を動かせ」

とうとう正面衝突する距離まで来、敵も火のエルが炎の光弾をこちらに飛ばしてからバッファロードとクイーンアントロードが武器を構えて攻撃を開始した。

「アギト、貴様ハ許サレナイ。人ガ神ニ近ヅクナ！」

「相も変わらず口五月蠅いやつらだぜ」

—ATTACKRIDE SLASH!—

「しつこい事を言うヤツは嫌われんぞ」

デイクイドはライドブツカーをソードモードに、ファイズはファイズエッジを、オーズはメダジャリバーを構え、アギトはグランドフォームのまま敵勢との距離をゼロにして肉弾戦を始めた。

「はぁ！」

「やっ！」

「んなろ！」

「せいっ！」

アギトがクイーンアントロードの鎌を潜り抜けて脇腹を蹴って怯ませ、ファイズが追い打ちで斬りつける。

オーズはバッファロードに切りかかるが、硬い皮膚で簡単に弾き返

され、突進で反撃を受けてしまう。

「ぐあっ！」

「火野！」

ディケイドもライドブッカーで火のエルを攻撃しようとしたが受け止められ、オーズの元まで叩かれる。

背中合わせになるディケイドとオーズ。

「ちっ！牛野郎と女王蟻はともかく、あの赤い奴は格が違うぜ」

「それにあの手下の大群ですからね」

「お前、水に特化した姿にはなれないのか？」

「なれない事はないですけど、アレは体に負担が大きいのでやるなら終盤のみです」

「アイツの火力は桁が違う。ちよつとの水じゃあ対抗できない」

「じゃあ俺がバッファローの方を早目に片付けます」

「頼むぜ」

「人間ヨ。人ガカヲ持テバ、必ず過チヲ犯ス。人ハタダ人デアレバ
イイ！」

再びそれぞれの敵の方に向き直ったディケイドとオーズ。

メダルを変える。

ーライオン！ゴリラ！チーター！ー

亜種形態ラゴリータ。ライオシャネルでバッファロードの視界を盲目にし、距離を詰めてゴリバコーンで強烈パンチを叩きこむ。

「はあっ！はっ！」

一方のディケイド。

「我等ニ従エ。人間ハ我々ガ守ル」

「お前もキノに劣らず大きな世話を言うやつだな」

ディケイドはライドブッカーから黄色い目のバンパイアがモチーフのカードを抜き取る。

「変身！」

—KAMENRIDE KIVA!—

「気休めにしかないだろうが、攻撃には充分だしな」

そして同系統の体が紫のカードを抜き取る。

—FORMRIDE KIVA DOGGA!—

パワー重視のドツガフォームとなり、専用武器のドツがハンマーを引きずりながら敵に近付く。

「我ニ従ウナラバ、無駄ニ命ヲ落トス事モナイノダ。自ラノ力ヲ捨テ、我等ニ従エ」

「お断りだ。人の人生はそいつ自身が決めるもの。お前達がやろうとしているのは人間の心を消す事と全く同じだ」

「我等ノ意思ハ伝ワラヌトイウ事ダナ」

「元からそうだろうが！」

ドツガハンマーを振り回し、火のエルに強打を叩きつける。

「おりゃあ！」

その頃アギトとファイズは、

「まったく、女王蟻なら女王蟻らしく地面で家来が餌を持ってくるのを待っていやがれ！」

「貴様タチヲ見逃ス訳ニハイカナイ。我々ニ齒向カウ以上、死ヲモツテ制裁サレヨ！」

「それは、お前達が決める事じゃない！」

「ナニ!？」

「俺達は一人で戦っているんじゃない！例え一時迷う事があっても必ず傍に誰かがいてくれる。俺はその人の為に、そして皆の居場所を守るために戦うと決めた！」

「津上・・・」

「戯言ヲ」

「戯言なんかじゃないぜ」

オーズはバッファロードを、Dキバドツガフオームは火のエルを投げとばして二人の元へ集う。

「人は確かに多くの過ちを犯す。だがな、それだから見つけられる

事もある。お前達は人の中にある光を恐れているだけに過ぎない」

「黙レ！貴様、一体何者ダ！」

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ！」

再び構える怪人。が、その背後には見るのも億劫な位のアントロ
ドが迫ってきていた。

「どうします？このままあの子たちにも支障が」

「・・・俺がヤツらを一掃する」

「えっ？」

「アンだけの数をか？いくら何でも無謀だぞ」

「切り札は使う時に使うから切り札というんだ・・・その代わり、
ヤツらを任せられるか」

「・・・やりましょう！」

「おい火野！」

「迷ってる余裕はありません。だったら賭けてみましょうよ。士さんの手に」

「・・・分かりました。俺も士さんを信じます」

「・・・ちっ、死ぬんじゃないぞ」

「こんな所で俺は終わるつもりはないぜ。何せ俺は・・・悪魔だからな」

一同が突っ込んで行く。

溢れ出さんとするアントロードの相手をするディケイドに変わってアギトが火のエルの相手をする。

「さて、まさかコイツをこんなに早くから使うとは思わなかったがな・・・」

士はライドブッカーから10のライダーの紋章の形をした穴が開けられた黒いカードと何やら画面が付いた携帯の様なものを取り出す。カードをセットし、紋章をタッチしようとするするとアントロード達が邪魔しようとはかりに襲ってきた。

「ちっ、ヒーローが変身する時は待っているって暗黙の約束をしらねえのかテメエらは！」

そう言いながらも避けながら画面をタッチしていく。

— K U U G A A G I T O R Y U K I F A I Z B L A D E
H I B I K I K A B U T O D E N — O K I V A —

— F I N A L K A M E N R I D E D E C A D E ! —

全てをタッチし終わるとディケイドの前に自身のカードが現れ、数匹のアントロードを弾きとばす。

そしてそのカードが額に到達すると、胸部にクウガからキバのカードが装着される。

バックルを取り外して右腰にセットし、代わりにケータッチを装着。

ディケイドの本当の姿。ディケイドコンプリートフォームである。

一瞬怯んだアントロードだったが武者震いをしながらディケイドの元へ突っ込む。

それらをライドブッカードで無情にも切り捨てる。

「ふんっ！やあ！」

その立てに切りつける様は姫シンケンレッドに似ているかもしれない。

自分があの手鐙になるのかと後退りを始めるアントロードの大群。

ディケイドは真ん中のマークそしてFをタッチする。

—KABUTO! KAMENRIDE HYPER—

その音声の直後、ディケイドの隣にカブトハイパーフォームが出現する。その手にはガンモードにしたパーフェクトゼクターにザビー、ドレイク、サソードのゼクターを集結させてある。

「お前達のファイナーレだ」

ライドブッカーから黄色のカードを抜き取り、右腰に装着したバツクルに装填する。

—FINAL ATTACKRIDE KAKAKAB
UTO!—

ディケイドはライドブッカーを銃の様に構える。すると剣先とパーフェクトゼクターにエネルギーが集束。敵にめがけてマキシマムハイパーサイクロンが発射される。

「はああああああああああああああ!!!!」

その威力を物語るかのようにそれまでの道を埋め尽くしていたアントロードが跡形も残さず姿を消した。

それを見届けるとハイパーカブトは姿を消した。

「さて・・・」

その頃、彼らの戦いも大詰めを迎えようとしていた。

ファイズはファイズエッジにセットしていたミッションメモリーを取り外し、代わりに右腰のファイズポインターにセットする。

—READY—

それを右足にセットして、ファイズフォンのENTERを押す。

—EXCCED CHARGE—

フォトンブラッドが赤いラインを通過してファイズポインターに到達し、エネルギーの充填完了。

こちらに向かって来るクイーンアントロードに右足をつき出すとポインターに貯まったフォトンブラッドの一部が円錐形になって敵の腹部を突き刺す。

「たあっ！」

ファイズは高く飛び上がり、空中で一回転して、右足に力を込めてフォトンブラッド内に突っ込む。するとそれに反応する様に赤いフォトンブラッドが高速で回転してガリガリと音をたてる。

一瞬消えた様に見えたファイズがクイーンアントロードの背中から現れた時、ファイズの「クリムゾンスマッシュ」がきまり、敵はΦのマークを浮かべ爆発した。オルフェノクではないので灰も何も残さずに。

アギトはバッファロードの大振りな攻撃を鮮やかにかわしながら、的確にパンチをして、距離を作る。

両手を広げて構えの態勢に入る。クロスホーンが開き、2本から6本に増える。

床にアギトの紋章が出現し、左足を一步下げて腰を落とす。

紋章が両足に吸収されその場から飛び上がる。バッファロードも立ち向かわんと如く態勢を無理矢理立て直して突っ込んで行く。が、そんな状態で必殺技を受けて無事でいられるわけがなくアギトの「ライダーキック」を腹部に受け、膝をついてもがき苦しみながら、頭上に光を浮かべて爆死した。

「残りは厄介なアイツだけか」

残された火のエル。それに応戦するオーズは再びメダルを変えていた。

ーシャチ！ゴリラ！ゾウ！ー

「ココマデ我ト渡リ合エタノハ褒メテヤロウ。ダガオ前ノ体ハモウ限界ノハズダ。ソノ力ヲ捨テテ、我ニ従エ」

「相当バカにしているな、人間つつうのを」

ディケイドのライドブッカーで背後から二度斬りつけられ、ファイズとアギトのダブルパンチを食らった火のエル。

「タダノ人間風情が我々に逆ラウナド・・・」

「お前らの道案内は必要ない！人は自分の意志で生きるもの。それがどの世界でも変わらない不変の事実。お前らは所詮、光が恐いだけの負け犬と同じだ！」

「黙レ！コウナレバ貴様等ヲ灰モ残サズ燃ヤシ尽クシテクレル！」

「士さん、今ならコンボが使えますよ」

「コンボでも何でもいい。コイツにはお前が決めろ」

それを聞いたオーズはゴリラとゾウのメダルをゆつくりと抜く。そして代わりに青いメダルをはめ込み、ドライバーを30度傾ける。一瞬だけメダルが輝き、スキャナーでスライドする。

「シャチ！ウナギ！タコ！」

その模様が合わさって一つになる時、火のエルが放った巨大な炎の塊を防ぎ、そしてオーズの元へ。

「シャツ シャツ シャウタ！ シャツ シャツ シャウタ！」

水彩系コンボ、シャウタ。

「オノレ！」

「これで終わりだ！」

— SCANNING CHARGE! —

ウナギウィップを腕に絡みつかせて拘束し、タコレッグが8本に分裂し、一つのドリル状のキックを放つ。火のエルは抗おうと火の球を放つが、ただでさえダメージを受けて本来の力を出しきれないの**に**必殺技をかわしている余裕はない。

「あああああああああああああゝゝゝゝゝゝゝゝ、せいやあああああ
あああああああああ！！！！！！」

シャウタの必殺技「オクトバニツシュ」が敵の腹を貫き、ぽっかりと穴があいて向こうの様子が良く分かる。

「グアアア・・・コレデ終ワリデハナイ。オ前達ガ我等ニ抗ウ以上、待ッテイルノハ自滅ノ未来ダ！」

「ならその未来にも抗うぜ。誰も人の未来を奪う事は出来ないんだからな」

魔術師は塔に降り立つ？

戦闘（ライダーサイド）（後書き）

シャウタ登場！

銃火器でも無く、何処ぞの兄弟の五男でもないシャウタです。

感想宜しくお願いします。

魔術師は塔に降り立つ？ 戦闘（レイジサイド）（前書き）

今回ちょっとグダグダかもしれないです。

魔術師は塔に降り立つ？ 戦闘（レイジサイド）

「アイツは炎の使い手。とすれば同じ炎を使う私は相性が悪いわ」

「ならレイジさんとシャナさんで近距離攻撃をして、僕と伊里野さんで援護射撃をするというのでどうですか？」

「おお、それいいな」

「うん・・・」

「私も異論はないわ。それでいくわよ！」

「一箇所にまとまってくれるなら僕も手っ取り早く倒せて楽なんだけどね」

偽・ステイルは炎の塊の様なものをこちらに向かって手から投げ出した。

反射的に4人はその場から散る。炎の塊はもといた場所で爆散した。

「あれがこの世界の魔術・・・」

「そう、前座としてはこんなものかな。それじゃあ次に行くよ!」

偽・ステイルが何かを口で咥くと彼の右手に炎で出来た剣が具現化した。

「はあっ!」

「うおっ!」

咄嗟に吸血鬼^{ブルードザオガ}を縦に構えるレイジ。

「その刀では思った様に身動きが出来ない様だね」

「くっ!」

「はあああ！」

そこへシャナの応援が。

「その油断が命取りになるわよレイジ」

「あ、ああ。すまない」

「次行くわよ」

シャナが偽・ステイルとの間合いを詰める。

「邪魔！」

「くっ！」

「おりゃあ！」

「ちい！」

シャナとレイジの組み合わせで二本の剣術が偽・ステイルを後退させる。

「意外に気が利くわね」

「えっ、そうか？」

「よそ見している余裕なんてないだろう？」

偽・ステイルは再び炎の塊を二人の元へ投げつける。シャナは翼を使ってかわしたがレイジはタイミングが出遅れた。このままでは大火傷・・・と、その戦闘に関わっているものは皆そう思った。

が、その炎は残骸も微塵も残さずかき消えた。

「何っ!？」

そこには吸血鬼ブルードザオガーを突きたて、右腕を突き出しているレイジが。

「炎が消えた・・・」

「・・・」

「物理的には考えられません」

「まさか・・・貴様、イマジンプレイカー幻想殺しを宿しているのか!？」

偽・ステイルは予想外の事実に相当苛立っている様だった。

「イマジンプレイカー幻想殺しだか何だかしらねえけど、何か直感で右手を出したらこんな事が出来てみたいだけだな」

「ならその手を焼き切るまで!」

先程と同じように手に炎剣を構える。その温度は3000℃。人肉なら掠ただけでもとけてしまうほどの高温である。

が、

「それだって魔術である事に変わりはないんだろ」

「黙れド素人が！」

偽・ステイルにとって余程の予想外だったのか今までの余裕は消えてしまった。

「冷静さを失えば判断力が鈍るだけですよ」

「その通りね。一気に畳みかけるわよ」

「あああああああああ！！！！」

半分自暴自棄になった偽・ステイルは炎の剣をがむしやらに振り回しながら迫ってきた。

「少年の剣はまだ大振る舞いで隙が多い。シャナにまず任せ、隙を突くのだ」

時は同じころ、ディケイドがあのアントロードの大群を木端微塵に吹き飛ばした時、

「向こうのスペースが空いたか。コレは丁度いい」

黒い神父服の中からあのルーンのカードを取り出す。数は分からないがぱっと見数百枚はありそうだ。

「気をつける。何が起こるか分からぬぞ」

それを無造作にばら撒くと、各々が意思を持ったようにあらゆる場所の壁や床に貼り付く。

「使用枚数は4500枚。数の上ではそんなに大したものではないけど、君達を潰すだけなら十分かな」

そして何かを唱え始めた。咄嗟に皆、身構える。

「一世界を構築する五代元素の一つ（MTWOTFFTO）、一偉大なる始まりの炎よ（IIGOIIIOF）。―それは生命を育む恵

の光にして（IIBOL）、一邪悪を罰する裁きの光なり（AII AOE）。一それは穏やかな幸福を満たすと同時（IIMH）、一冷たき闇を罰する凍える不幸なり（AII BOD）。一その名は炎（IINF）、一その名は剣（IIMS）。一顕現せよ（ICR）。一我が身を喰らいて力と為せ（MMBGP）・・・『魔女狩りの王』
！！」

それが終わると同時、彼の背後に巨大な怪物が出現した。体全体が炎で出来ている為、その姿がどんなものかははっきりとは確認できない。が、そんな事は今は関係無かった。スペースが広くなったとはいえ、敵のそれは自分達を丸呑みするのに十分すぎる大きさを持っているのだから。

「『イノケンティウス魔女狩りの王』よ。我が敵を灰も塵も残さず焼き尽くせ」

「皆、一箇所に固まったらダメ！バラバラになって！」

シヤナは紅蓮の翼で避け、伊里野は走って範疇から出たが、ブルードザオガーレイジは吸血鬼の重さが原因で、キノは普段モトラドに乗っているせいで走力があまり高くなかった。

「うわぁ！」

危うく巨大な炎の怪物に呑み込まれそうになった時、

「キノっ！」

レイジが空に向かって右手を突き出した。

『イマジンプレイク』

そこを起点とする様にイノケンティウスは消滅した。

「すみませんレイジさん」

「いって事よ」

「よそ見して雑談しているなんて余裕だね」

二人が声のする方に視線を移すと、何とついさっきレイジが右手で消滅させたはずのイノケンティウスがそのままの大きさと瞳の中に入った。

「そんな・・・俺が消滅させたはずなのに・・・」

「ふっ、その程度とは僕も舐められたものだね。この『魔女狩りの王』は力の源、つまりルーンを全て破壊しない限り何度だって蘇るよ。君の右手を使ったとしてもね」

「くっ！」

「形勢逆転・・・ってところかな」

何度右手で打ち消しても一瞬で復活してしまう。

レイジはそのことに集中しているため、その場から動くことができない。

「君達の相手は僕だということを忘れていないかい」

偽・ステイルが前方数メートルの所に迫ってきている。が、イノケンティウスが身を乗り出して自分達を呑み込もうとするのを防ぐので精一杯だった。

「終わりだね。灰も残らず焼き尽くしてあげよう！」

「っ！」

シャナは空中にいる。急いでも間に合う距離ではない。キノでは応戦は不可能。ここまでかと思われた。

「・・・させない！」

か細い伊里野の声が聞こえると同時、コンバットナイフで黒の神父服を真横に切り裂いていた。

「貴様！」

切り裂かれた袖から隠し持っていたルーンのカードの束が零れ落ちた。

「あっ！」

咄嗟に拾い集めようとする偽・ステイルだったがそれを見逃す程敵は優しくない。

キノは素早くパースエイダーに弾を込めて連射。

ルーンに火が点き、もう使い物にならない。紙屑も同然だ。

更に追い打ちをかける様な事が起きた。

オーズのシャウタコンボが必殺技『オクトバニッシュ』を放った際に大量の水が放出され、その水が一部のルーンにかかりインクを落としてしまったのだ。

その結果、イノケンティウスの大きさが5分の1ほど小さくなった。

「何っ!？」

「これで終わりね」

「なっ!」

空中で回避していたシャナと伊里野の連係プレイに偽・ステイルは

後方へと追いやられる。

「止めよ！はああああっ！」

シャナの「必殺の斬撃」により、膝をついた偽・ステイル。同時にイノケンティウスとルーンも消えた。

「くっ・・・ふっふっふっ・・・」

「何がおかしいんだよ」

「所詮この程度のか・・・まあ、絶夢に生み出された時からこうなることは予想してたけどね。本物よろしく、魔術が使えたただけでも良しとする・・・か・・・」

そして偽・ステイルは煙の様に消えた。

「終わった様だな」

士達も駆け寄ってきた。津上は火野を背負っている。

「火野さん、どうかしたんですか？」

「大事に至る様な事じゃない。気にするな」

「さあ、早くみようぜ続きを」

先程の少女は何故か破ける前と全く同じ真っ白な修道服を身につけていた。

「歩く教会の防御力は法王級なの。簡単に言っちゃえば要塞みたいなね。私が敵なら、理由はどうかあれ、要塞が壊れたと分かれば迷わず打って出ると思う」

「ちょっと待てよ。だったら尚更放つとけねーだろ。オカルトなんざ、今でも信じられねーけど・・・とにかく、誰かが追ってきてるって分かってんのにお前を外になんか放り出せるかよ」

「あゝっ！あの子安全ピンで服直しちゃってんじゃん！」

「残念でしたね」

「ざまあみろ」

「静かに！次が大事なんだから」

少年の主張に対し、白き小さな修道服の少女はこう尋ねた。

「・・・・・・・・じゃあ・・・・私と一緒に地獄の底まで着いてきてくれる？」

「地獄の底まで着いて来い・・・・か」

「あんな可愛い子に裸を見せてもらった上に、ああ言われて断れるヤツいねえゝよなあ」

「あの少年の心を解き、断ち得ぬ絆を結ぶ。創造者はその為にこそあの娘の『ことば』を創り上げたのだ」

「そういうこと。さ、帰るわよ」

次の瞬間、彼らの姿はその世界に微塵も残っていなかった。

魔術師は塔に降り立つ？ 戦闘（レイジサイド）（後書き）

漸く禁書の世界終了！

次回ほのぼのを書いて、2話後に次の世界に行きます！

感想宜しくお願いします。

呼び寄せられた者達

あの図書室に戻ってきた一行。

「みんなおかえりなさい」

「キズナ・・・帰ってきて早々悪いが、ちょっとコイツ絞めてやってくんねえか」

「えっ、どうして？」

最初は士の突拍子な話に驚いたキズナであったが、士と乾の話を聞いているうちに顔が真っ赤になって表情がどんどん怒りに変わっていった。

「じゃあレイジ。アンタ女の子の裸を目当てに戦ってきたの？ウワ
ゝ最低！」

「いや違うって！」

「違いますよね？」

「違うない」

「キノもシャナも士さんも巧さんも！何で喋っちゃうんだよ！結局見られなかっただろ！それに今までのパターン考えたらあの子来ちゃうんだぞ！ばれたらどうするん・・・」「・・・？バレたらどうするの？」うわぁ！」

今レイジが最も聞きたくない声が背中から聞こえた。恐る恐る振り返ると、あの白い修道服の少女、インデックスが本棚と本棚の間の通路からこっちに来ていた。

「いやいやいやいや！何でも無いって・・・」

インデックスの顔を見た瞬間、彼女が十字架に架けられている光景がレイジと士の脳裏でフラッシュバックした。

「痛い・・・またか・・・」

その頃、

??????????

「ふむ・・・戦闘能力の高いコピーでもダメでしたっ」と

「自分達を力量を過大評価するからこういう事になるんだろねえ・
・・」

「でも絶夢って意外と見る目があるっすね。この俺を雇うだなんて、
中々いいセンスしてるっすよ」

「絶夢と同じであっちも成長しちやってるからなく。やっぱ人間は
生きているんだからさ。心を揺さぶらないとね・・・作・戦・
変・更！人の心も利用していきましょ」

「その隙について、僕は英雄になるんだ・・・」

―電撃学園―

キズナや夏海に一通りの説明を受けたインデックス。キズナはレイジのアレな所については特に強調して説明しており、レイジはその度に凹んでいた。

「そういうのはサイテーって言うんだよ？」

「はい・・・反省してます・・・」

「これに懲りて調子に乗らない事だな」

「でもでも、大体話は分かったよ。そっか、絶夢か。大変だね・・・」

「……えっと、だから俺たちその絶夢ってのと戦っててさ」

「うん、それは分かってるんだよ？ 大変だね」

「話が無限ループしそうだな」

「いや、あのさ……こういう場合、『力になるよ!』……とか、『一緒に戦おう!』……とか、そういう台詞が出てくるもんなんじゃないんですか？」

思わず丁寧語になってしまいうれいジ。

「??? あゝ、そう言われればそうかも。じゃあ手伝うよ」

「調子狂うなあ。なんか頼りないんだけど……」

「そんな事ない。彼女にも必ず凄い力がある」

「それはインデックスも創造者の創造物だからか？」

「そうよ」

「シャナちゃんが言うんでしたらきつと大丈夫ですよ。で・・・次はどうするんですか？」

「次は・・・多分ここ」

シャナがレイジに手渡した本。そこに描かれていたのは赤と白を基調とした制服を身に纏ったお嬢様という言葉がピンと来る少女の物語だった。

「『乃木坂春香の秘密』・・・それに多分ってどういう事だよ？」

「よく分からないの」

「改ざんそのものは進んでいる様だが、少々これまでとは状況が異なっている様だ」

「行ってみないと分からないと・・・？少し不安ですね」

「まあ今までもそうだったんだから心配ないって！」

「相変わらず楽天家ねえレイジは。じゃあ準備を整えてきなさいよ」

「盛り上がっている所悪いんだが・・・お前らまさかこの後すぐに行くつもりじゃねえだろうなあ？」

「えっ？それってどういう事？」

「先ず外を見てみる。どう見ても時間的に夜だ。今までのところ回った世界は3つ。異世界とはいえ、当然ここでも時間は流れる。それに火野もあの状態だ。すぐに動ける状態じゃない」

「うむ。確かに改ざん阻止を速やかに行わなければならないとはいえ、無理は禁物だ。何事も準備万端でなければな」

「俺もくたびれてるしな」

「何だかよく分からないですけど皆さんお疲れでしたら先に休んで下さい」

「えっ、貴方はどうするんですか・・・って言うか、貴方は誰なんですか？」

夏海がそう問いかけたその時、

「あのすいません！」

と、奥の扉から声がした。女の人のものであった。

「あの此処って一体・・・って翔一君!？」

「真魚ちゃん!？」

風谷真魚。翔一が元いた世界でかつて共に居候して知り合った仲だった。

「あれ、真魚ちゃんまでここに来ちゃったの？」

「こっちってどういう事？大学の講義が終わって帰ろうとしたら周りが変になって気付いたらこんな所にいたんだけど・・・」

「んー、俺もあんまり詳しい事は分からないんだけどね・・・」

「知り合いか？」

「あつ、はい。ちょっと前まで同じ所に居候してた真魚ちゃんです」

「で、この人達誰なの？」

「何でも世界の改ざんを止める為に俺達が集められたらしいんだけどね」

「いいわ。貴方にも状況を説明してあげる」

シヤナが真魚に一通りの説明をした。

「えっとつまり、その絶夢の改ざんを止めるために翔一君や皆さんがこの世界に集まってきたって事なんですか」

「まあ、そういう事」

「でも信じられない。翔一君みたいな力を持った人が他にもいるとか、別の世界だなんて・・・」

「俺も最初は別のアギトの力を持った人だと思ったんだけど皆姿とかが違っててさ」

「というより未だに何故小説の世界の話に俺達ライダーが呼び出されたのか、それが不明なんだけどな」

「・・・・・・・・」

乾の呟きに士は口を閉じた。何故なら彼、正確に言うなら彼とユウスケ、夏海には思いっきり思い当たる節があるからだ。

そんな彼等を遠くで見ている男が。黒ぶちの眼鏡をかけ、歳は中年位。昔の探偵の様な恰好をしている。

「ディケイド、何れこの世界も貴様のせいで破壊される。貴様のせいで・・・・」

そう呟くとオーロラの中に姿を消した。

それからして一同は時間が時間だけあって寝る事にした。体育館にあった運動用のマットを布団代わりに持ち運んだ。アंकはどうやら外がいいと一点張りだったが、比奈の怪力の前に苦々しい表情をしながらも渋々従った。

・・・そして翌日。

「んっ、ん~~~~~!!!!」

家庭科室に行ってみると・・・

「あっ、士さん。おはようございます」

「ああ・・・つか、何してんだお前」

「何って朝御飯の支度ですよ。腹が減っては何とやらって言いますし」

「・・・お前、貴重な天然ポケ属性だな。まあいい、出来たら呼びに来てくれ」

「フア〜イ」

「・・・・・・・・」

その頃には皆一斉に起きだしていた。

レイジは早速、インデックス以外にあの世界の人物が来ていないかを調査していた。

「おはようインデックス」

「うん、おはようなんだよ。絶夢って言うのがやろうとしているのは創造者の創った楽しい世界を壊そうとしている事で、それを止める為に私達が呼び出された・・・・って事なんだね？」

「そうそう。そういう事・・・・らしいぜ。俺なんかシャナに説明されてもすぐには分かんなかったのにさ・・・・軽く説明されただけなのにアンタ飲み込み早いなあ。見かけによらず頭いいんだ」

「・・・・・・・・むゝ、この場合の見かけによらずって褒め言葉じゃないと思うんだよ？」

「それにしてもインデックスの世界の人は今のところ見えていないけど・・・お前は見かけたのか？」

「ううん。今のところ、誰一人知り合いを見かけていないんだよ。いりややきのは元の世界の知り合いがいたらしいんだけど・・・私ちょっと探してみる」

「あつ、おいインデックス！」

元いた世界ではどうなのか知らないがやけに行動的なインデックス。一部屋一部屋探して行き、遂には屋上に。

そこには、

「一体ここは何処なんだ。インデックスも勝手にどっか行っちゃうし、俺は俺で何処か分からない場所に飛ばされちまうし・・・不幸だ・・・」

と、何やらぶつくさ言っているツンツン頭の青年が。

「とうまー！」

「あん？・・・ってインデックス！？お前何でこんな所に」

「知り合い見つかったか？」

「うん」

「あれ、アンタがインデックスを此処まで連れて来てくれたのか？」

「あはは、イヤそういう訳じゃないんだけどな・・・」

「って言うかここは何なんだ。何で俺達こんな所に」

「うーん、私も全部を知っている訳じゃないんだけど掻い摘んで説明すると・・・」

と、インデックスが自身に教えられた事を当麻に説明した。

「はぁ・・・絶夢ね。それはロープレで言う所のラスボス的なものでせうか？」

「とうまの使う単語は時々よく理解できないよ。ろうぷれ？らすばす？」

「わかんねーならいいよ。とりあえず暫く元の世界にや帰れねーんだな？」

「皆そう言ってるよ？」

「あー、じゃああのビリビリ女からは解放されるって訳か。そりゃいーや。そう考えればい世界も悪くねえな」

「ビリビリ女って？」

「あー、俺な、元の世界である女につきまとわれてさ。異世界にいる方があのビリビリ女にストーカーされるよりずっとマシ！暫くのんびりさせてもらおうっと！」

と、そこへ

「あつ、ここにいたんだ。朝御飯出来たよ」

「わあ！ご飯♪ご飯♪ご・は・ん♪」

「随分と御機嫌みたいだな」

「まあな。アイツああ見えて結構な大食いだぞ」

「シスターが大食いって・・・いいのかよそれ？」

「まあいいじゃないですか。食べない事には成長もしないし」

こうして学校の購買部に集合した一行。その中にはやや空気化していた浅羽や園田真理、シズもいた。

「しかし津上って料理が上手かったんだな」

「そりゃそうですよ。翔一君は私達の世界ではレストランを開いているんですから」

「へえ、それは是非行ってみたいわね」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「しょういちの料理も中々手が込んでいるんだよ」

「つくか、すんげえ食欲だなオイ」

「なんか・・・カザリが最初にヤミーを作った人の事思い出しちゃ
うよ」

「はんっ！人間が欲望の塊だって言った時のアイツか」

アंकは何処から調達したのかスティックアイスを頬張っている。

「おいおいアंक。こんな所でアイス喰うなって！」

「・・・お前、約束忘れた訳じゃあねえよな」

「それとこれとは話が別だって」

「あれ、乾さんは食べないんですか？」

「・・・だ」

「は？」

「俺は猫舌なんだあああああああああああ！！！！」

「ちょっと巧！朝から大声出さないでよ」

「話に聞いた事はありませんが、猫舌の人に会えるとは思っていませんでした」

「異世界の者が作った食事というものの中々良いものであるのう」

「気に入った様だな、ホロ」

「こいつら・・・緊張の糸を完全に解いた様だな」

「そんないつまでも気を張っていたら体が持ちませんよ土君」

「そうだぜ土。それよりさ、次の世界で出てきそうなライダーは分かるのかよ？」

「確かにそれも気になっている事ではあるな。毎度あの絵が頭を過ぎるんだが・・・お譲様に関わりのあるライダーなんて俺には想像がつかねえぞ」

「あつ、もしかしたら土君に憑依した事のあるあの白い鳥のイメージとか」

「ジーク・・・電王か。その可能性も否定は出来ないが根拠としては少し弱いな。というより俺にはもう一つ、気になっている事がある」

「気になっている事？」

「これだ」

土がポケットから取り出したもの。大きさはディケイドが使うカードと同じ位。しかしそこに描かれていたのはインデックスだった。

「門矢士。それを一体何処で？」

「お前らがあの長身野郎を倒した時に落としていったからな。何かの手がかりになるのかも知れんと思って拾っておいた」

「このカード・・・私達の世界とはまた別の、特殊な力を感じるわ」

「しゃなもつかさもそんな神妙な顔してどうかしたの？」

お茶碗にご飯を山の様に盛ったインデックスが尋ねた。

「お前の絵が描かれているしな。何か分かるか？」

インデックスがそれに手を触れた。

「・・・何かの力は感じる。でも、魔術とは全く別のもの」

思い悩んでいる所に声をかけてきたのは・・・

「お主ら、何をしておるのじゃ？」

声の主はホロ。そう言えばそろそろ商売の準備が出来た頃合いだと聞いていた様な気がする。

「これなんだよ」

「む・・・むっ、これは！」

「何か知っているの？」

「うむ。準備が出来てお主らにそろそろ販売しようと思っておったのじゃが・・・まさか盗み出したのではあるまいな？」

「コレはレイジがインデックスの世界で拾ったものよ」

「そうか。しばし待っておれ・・・」

ホロが購買の方へ引っ込んだと思ったら、何かの袋を抱えて出てきた。

「ほれ、これがこれからわっちがお主たちに販売しようとしていたものじゃ」

その袋の中にあつたものは小説のタイトルを絵柄にしていたカードだった。

「コレを一体何処で？」

「すまぬがそれは企業秘密で教える事は出来ぬ。が、一応信頼は出来るルートからのもの、そこは心配要らぬ」

「でも、コレをどうするの？」

「わっちも詳しい原理は知らぬのだが仕入れた者によると、『器となりしものに刺激を与え、それを極限まで高めた時、扉を開く』と言っておった。だがそれには欠片を全て集める必要があるらしい」

「欠片？」

「その絵札の力は器となるものと、器を変化させるもの、そして元から特殊な力を持つものがある様での、たとえば・・・」

『とある魔術の禁書目録』には下の方に小さく『闘』と書かれていた。そこに『知』と書かれた『カクレヒメ』を重ねた。すると……

カードが光り輝き、収まった時には別のものになっていた。

『魔滅の声』に。

「これが……欠片？」

「どうもそういう事らしいな」

「これからまた別の世界へ行くのであろう？ ならばついでに色々揃えておくが良いであろう」

そうしてカード数種類を購入し、色々と試してみた。

そして、そのカードの力を引き出す事が自らの特殊な力であるインデックスはその内の『じゃえん』、『欠陥電気^{レディオノイズ}』、『ロクシエ空軍の腕章』、『アリスのクラッキング』を所持した。

「取り敢えず準備としちゃあこんな所だな」

「火野さん、もう大丈夫なんですか？」

「あつ、はい。一晚寝かせてもらったんで、もう大丈夫です」

「じゃあキズナ、次の世界の説明を頼むぜ」

「はいはい。『乃木坂春香の秘密』は私達の世界とよく似ているの。戦いや魔法なんかとも無縁な平和な世界だし、そんなに危険には見えないけど・・・」

「でも絶夢っていうのが関わっている以上、油断はできませんね」

「うん、絶夢はそんな世界にも戦いを持ち込もうとしてる」

「で、その世界へ行って何をすればいいのかな？」

「小説の名前からするとその乃木坂なんとかの秘密を守るとかそんな所か？」

「まあそんな所かしらね。白銀の星屑ニユイ・エトワレと呼ばれる学園のアイドルの秘密に関するみたいね」

「白銀の星屑・・・っつーことはその秘密がその秘密が誰にもバレない様に守ればいいって事だな」

「『誰にも』かぁ・・・んゝ、それはちよつと違うのよねえ。まっ、行ってみれば分かるでしょ」

「じゃあ皆、行くわよ」

「でも本の世界へどうやって行くんですかね？」

「こうやってよ！」

いつもの如く、足元が紫色に光った。

「えっ、なんですかこれ！うわぁ！」

「わぁっ！」

今回が初めてである翔一とインデックスは驚愕しながらその姿を図書室から消した。

呼び寄せられた者達（後書き）

それぞれのカードの説明は完結してからプロログ形式で説明しようと思っています。

久々の6000字越え・・・疲れたあ・・・

感想、お願いします。

白銀の星屑（ニュー・エトワール）（前書き）

キーワードは

？ミス白城学園

？容姿端麗 才色兼備

？完全無欠のお嬢様

白銀の星屑（ニュー・エトワール）

白城学園の図書室。この世界での名門校だけあってそこ一箇所だけを取り上げても相当な本がある。本棚のてっぺんは上の壁まで届いているのかもしれない。

とはいっても何もお譲様専用の堅苦しい本ばかりが置いてある訳ではない。取り敢えずは共学である。

場面はとある放課後の図書室でのものだ。とある本を借りた乃木坂春香。だがその様子はいつもとは違っていた。人目に触れるのを避ける様に手続きを済ますと自分の鞆の元へと小走りに急いだ。が・

偶然か何か、その光景を目にしていた人物がいた。勿論図書の係りの人ではない。

彼の名は綾瀬祐人。これと言って特徴のない男子生徒だったがその日、偶々図書館に足を運ばせていた。

祐人の姿を見るなり驚きの表情に変わり動揺する春香。

• • • • •

• • • • •

• • • • •

「え．．．．．ど、どうして此処に？ い．．．何時からいたんですか？」

「えーつと・・・ちよつと前から」

「み……見ましたか？」

「? ? ? 何を?」

「その……私が何を借りたのか」

そこで映像は終わり、一行が降り立ったのは学校の校門らしき場所だった。建物にも相当な予算が掛けられているのか嚴重な扉とレンガ建ての建物が嫌でも目に付く。

「だんだん世界を飛ぶのにも慣れてきたな」

「うゝ……私はまだ慣れていないよ？」

若干顔が蒼くなっているインデックス。なにしろ世界を移動するのは某宇宙人未来人超能力者を探している物語の時間移動以上の衝撃

が来るのだ。

「平気ですよ。きっとすぐに慣れます」

「さあ、ニュ……ニュ……えーっとなんだっけ？ニュ……あれ？」

「ニュー・エトワール白銀の星屑……」

「そう、それぞれ！それを守りに行こうぜ！」

「緊張感が足りない！この世界で何が起こっているのかよく分かっていないというのに」

「絶夢の生み出した偽物が改ざんを行うという単純な話ではないのやも知れぬぞ」

「あんまりカリカリしても意味はねえだろ」

そう言ったのは乾だった。

「何が起こっているが分かってないとしても俺達がやるべきことは変わりねえだろ」

「そうですよ。そんなに肩に力入れていたら疲れて必要な時に体が動かなくなっちゃいますって」

「津上翔一が加わってから何か調子が狂わされるわ」

「元がああなのやもしれぬ。元々我らが少々せっかちであるからちようどいいのではないか」

「アラストール・・・」

「取り敢えずこの世界の事を調べるのが先決だな」

「それに、この世界に来ている仮面ライダーも気になりますしね」

映司は軽めの口調で言ったが、

「確かにそれも気になるな。今までの世界は物語の共通点が分かりやすかったから出会うライダーも想像しやすかったがな。だが平和な学園生活に出てくるライダーなんて聞いたことがねえぞ」

厳密に言えば士が以前訪れたファイズの世界は学園生活そのものだったのだが、キノの世界で乾に会ってしまった以上、その可能性はない。

そんなことを考えているとライドブッカーが輝き、1枚のカードが飛び出した。そのカードとは・・・

「カブト・・・」

赤い一本角に水色の複眼の一瞬の世界で戦う戦士、仮面ライダーカ

ブトだった。

「あれ、このカードって士さんが何度か使っていましたよね？」

「ああ、コイツのモチーフは見ての通りの虫。という事は、この世界で出てくるライダーの敵はワームか」

「ワーム？」

「ワームには大きく分けて二種類ある。緑色をしたサナギ態と脱皮した成虫態だ。脱皮した成虫態はクロックアップを使ってくる」

「クロックアップ？何だそりゃ」

「簡単に言えば乾、お前が使うファイズのアクセルフォームの様に超高速的な動きで攻撃を仕掛けてくるって事だ」

「えっ、あんな素早い動きを敵がするんですか！」

「ああ。オーズのチーターですらそのスピードには追いつけない。だからオーズとアギトは敵の一瞬の隙について強力な技でないと倒せない」

「それは・・・ちょっと厄介ですね」

「だがもう一つ厄介な事がある。おい、ここからはシャナ達も聞いてくれ」

「出来るだけ手短に頼むわ」

「ワームの厄介な点、それは本物そっくりに擬態する事だ」

「ぎ、擬態!?!」

「つまり、本人になり済ますという事ですか?」

「そうだ。だから万が一の時に備えて自分が自分であるという証拠を何かしら用意しておけ。ただし、合言葉や体にキズを付けるとい
うのではダメだ。ワームは擬態する人間の全てをコピーする。それがインデックス、お前の壊された『歩く教会』だったとしてもな」

「うう・・・それはちょっと厄介かも」

「取り敢えず学園に入ってみましょう。まず動かないと」

「そうだな」

こうして一行が校門を通ろうとした時、

「そう言えばシャナ、学園のアイドル、ニユイ・エトワール白銀の星屑の秘密って一体何なんだ?」

「それは・・・」

シャナが口ごもった次の瞬間、周辺の登校中と思われる学園の生徒

達が揃って顔を強めた。

「ヒソヒソ・・・白銀ニュー・エトワールの星屑の秘密ですって！？春香様の秘密って何？」

「ヒソヒソ・・・何でアイツらが春香様の秘密なんて知っているんだ？」

「ヒソヒソ・・・でも春香様の秘密を知っているなんて・・・」

「ヒソヒソ・・・もしかして春香様のストーカー！？」

誰が言ったのかは定かではないが『ストーカー』という単語が出てきた途端、彼等から物凄いオーラが醸し出ているのを一行が皆、感じていた。

「ヒソヒソ・・・おい、親衛隊を集めろ！あのストーカー野郎を逃がすな！」

綺麗にドッジボールの試合でもやるかのように分かれる線引き。

「まったく、ヒソヒソじゃねえよ・・・まる聞こえだっつーの！」

「で、でも皆さん相当殺気立ってますし・・・しかも何か誤解され

ているみたいだし・・・このままだとヤバいかも・・・」

「本気と書いてマジってトコですかね？」

「あのー、津上さん。流石にそんな事を言っているいい雰囲気ではないと思いますよ？」

「何度も繰り返すようだが、異世界の住人と面倒を起こすのは好ましくない」

「そうね、裏口へ回ってみましょ」

「決まったなら善は急げだな」

逃げるが勝ち、士達は校舎の方へ走りだした。

「あっ、逃げた！待てーこのストーカー野郎！親衛隊逃がすな！追えー！！！」

シヤナが機転を利かせ、何とか上手く裏校舎へ全員到着する事が出来た。

「ゼエゼエゼエ・・・な、何とか撒いたみたいですね」

「ヒィー、流石学園のアイドル！人気もガードも凄そうだな・・・」

「あんなに一生懸命に追いかけてくるなんてビックリしたよ」

「よくインデックスは修道服が足に引っ掛かんかったもんだな・
・けどあんな連中を相手にしている暇ないぜ。どうすんだ？」

「あの裏口なら正面切って入るより他の生徒達に見つかる可能性は低いはず。白銀ニユイ・エトワレの星屑の秘密を守るべき場所は図書室よ。忘れないで」

「よし、じゃあアイツらが追っかけてこない内にさっさと中に入ろうぜ」

・・・と、意気込んだのはよかったのだが・・・

裏口。悪戯心のある人なら小中高生の内に一度位遅刻しない様に通った事があるのではないのだろうか。レイジ達がまさにそこを通ろうとしているのに、肝心の扉は鍵が掛って入る事が出来なかった。

「おい！ここまで来てこのオチはねえだろ」

「困りましたね。ここから通れないとなると正面から入らなくては
いけませんし」

「いえ、そうでもないわ。私に鍵のありかに1つ心当たりがあるわ」

その言葉に従い向かった場所は・・・

何と乃木坂邸だった。まず第一に豪邸という言葉が良く似合う。生

い茂った森の木々の間にキッチンと道が整備されており、間に休憩所や、池、小さな滝があり、その先には立派な建物が。

「うわっ！ 凄い豪邸だな！ なんだよ此処？」

「この世界のヒロインの自宅よ」

「自宅って・・・城じゃないんだからさ・・・」

「お話中のところすいませんが、あんまりのんびり構えてる時間はなさそうですよ」

「・・・ちっ、もう追いついて来やがったか」

「後ろ・・・」

鉢巻をしめたもの、竹刀やら野球のバットやらテニスラケットやらそれぞれの部活のものらしきものを持ち構えている者。

「しつけえ奴らだな」

「お前達！ 連絡が来ているぞ！ 春香様のご自宅を狙うとはやはりストーカーだな！」

「みんな、春香様をお守り出来るのは私達だけよ！」

「わわわっ！こんな所まで押し掛けてくるなんて！騒ぎが大きくなる前にさっさと鍵を見つけて学校に戻ろうぜ！」

「アイツら・・・何にも知らねえくせして好き勝手言いやがって・・・」

「親衛隊までいるなんて・・・本物のアイドルみたいだな」

「乃木坂春香という人にそれだけの魅力があるという事ですな」

「ニュー・エトワール白銀の星屑の名前は飾りじゃないって事だね」

「つうかあの森一体どう抜けるんだ。結構複雑に道が入り組んでるぞ」

「じゃあやっぱり・・・」

火野はタカカンロイドを二つ取り出してプルトップを開いた。

タカ・カン！

タカ・カン！

「あの建物までの道を探してきて」

「「キィー！」」

二匹（二機？）が飛び去ったのを確認すると、

「さて、俺達は俺達でいくぞ。油を売っている暇はないからな」

「とはいえ、こんなに広い場所からどうやって学校のカギを探しだすんだ？」

「確かに英国のバッキンガム宮殿に巻けす劣らずって感じだよ」

「確かにお城みたいですな。手入れも行き届いていて素晴らしいです。けど、これだけ広いと探すのは骨が折れそうですね」

「誰かに在りかを聞いてみるのはどうかな？」

「それが最善だろうな」

「となると、余計に早目にあの屋敷に着いた方がよさそうね」

「本来ならまた二つ位に分けて進みたいところだが、そうするとワームに擬態される恐れがあるからな・・・今回はかたまって行くぞ」

深い森だった。

「ちよつとどころじゃねえな。複雑過ぎんぞ」

「この森は家に侵入するのを防ぐために用意されたものらしいわ。専属のメイドとか一部の人しか正しい道を知らないみたいよ」

「・・・」

士がふと立ち止まる。

「どうかしたの、つかさ？」

「……いるな」

そう呟いて静かにディケイドライバーを装着する。

「お前らも準備しとけ。どっから来てもいい様にな」

—KAMENRIDE DECADE!—

—STANDING by—

—COMPLETE—

—タカ！トラ！チーター！—

ライダー勢はそれぞれの基本形態。ただしオーズだけは亜種形態のタカトラーター。

「グリュリュリュリュリユ……」

奇妙な呻き声と共に緑色の異形が。入ってきた方を見るとワームが5、6匹こちらに迫ってきていた。

「な、何なのアレ!？」

「アレがワーム、今はサナギ体だけか。脱皮したやつはいない様な」

「あの蟻みたいなのもそうでしたが、今回のも気味が悪いですね」

「脱皮されると面倒だ。さっさと片を付けるぞ」

と、ライダー勢がワームの軍に突っ込もうとした瞬間、

シャキン！シャキン！

と赤い残像を残しながらワームの横を刃物が切り裂く音が聞こえ、切り裂かれたサナギ体は緑色の爆炎と共に小さく爆発した。

「な、何ですか今の」

「・・・アレがクロックアップだ。そして・・・」

—CLOCK OVER—

超高速の世界からやっと人間の視界でハッキリ姿が見える様になって現れたソレは・・・

刃を下に下ろしこちらに背を向けているが間違いなく仮面ライダーカブトだった。

が、

「・・・・・・」

こちらに無言で振り向いたかと思いきや

—CLOCK UP—

腰のクロックアップを発動させるスイッチを押してあっという間に何処かへ行ってしまった。

「あっ！」

「どっか行っちゃまいやがった」

「な、何となく話し掛け辛そうだな・・・」

「士、どうするつもり？」

「・・・アイツは俺がどうにかする。それよりも今はここを抜けて鍵を見つける事の方が先なんだろう？」

「うむ、そうだな」

そこへ丁度いいタイミングで、

「キッ！」

「キッ！」

と甲高い声と共にタカカンロイドが戻ってきた。

「どうやら道が分かったみたいです」

「よし！じゃあ行こうぜ！」

白銀の星屑（ニュー・エトワール）？

タカカンロイドの誘導によって森の中間あたりに差し掛かった一行。

「それにしても絶夢がこの世界で操っている手先があゝの親衛隊に紛れ込ませたヤツらだったとはなあ」

「そうやって攪乱させることが目的なのかもしれないわね」

「しかもさっきはわーむに擬態しているのもいたんだよ。自分達があんな風になっちゃったらと思うとちょっとゾツとしちゃうかも」

森の中という不安定な地形。しかも敵が前方から来るとは限らない。

「しかし森の中というところでも響鬼が思い浮かんでしょうかねえな」

「えっ、響鬼って何ですか？」

「ん、お前らと同じ仮面ライダーの一人だ。ちょっと変わっているがな・・・何れお前らも会う事になる筈だ」

「・・・おい、何か出口っぽいものが見えてきたぞ」

乾が指さす先に整備された道の様なものが見えた。

「や、やつとだな・・・それにしても今まであんまり気にしていなかったけど吸血鬼ブルードザオガって案外重たかったんだな・・・」

「というより、お前のその剣はしおりに出来るって坂井ってヤツに教えてもらったんだろ。だったらその方法を活用させるって事ぐらいには頭を働かせろ」

「ひ、酷い言われようだ・・・」

「ま、まあまあ。取り敢えずここから出ましようよ」

映司の気の利かせで再び真っ直ぐ移動する一行。

そこからでも結構な距離はあったが何とか抜けきる事が出来た。

そこには小さなものではあったがもみの木が中心に一本植えられ、そこから十字に道が出来ていた。

「やっぱり間近で見ると結構大きいですね」

「もしかしたら俺等の学校より広さがあるんじゃないか？」

「・・・・・・」

「お前ら無駄話してていいのか？」

「鑑賞に浸るのは後よ。早く鍵を手に入れないと」

士が代表でその扉を押す。

「何で俺が・・・別に構わねえけどよ」

屋敷内には見事な装飾の絨毯じゅうたんが敷き詰められ、屋敷にありがちな左右どちらからでも上り下りできる階段、そして一目見ただけでも十分わかる部屋の数。

が、その前に少し変なものがいた。具体的に言うなら髪は銀髪で服装は黒のストッキングに純白のエプロン、そして頭にはカチューシャ。某何処かの音楽アニメのキャラが着て「萌え萌えキュン」とアピールすれば大抵の男のハートは射抜かれるのではないだろうか。凄く似合いそうな恰好。銀髪とその顔立ちから恐らくではあるが海外で雇われた乃木坂家専属のメイドなのであろう。そのメイドが玄関近くでウロウロと同じ所を行ったり来たりしている。表情から焦っている事も丸分かりだった。

「あああ・・・一体どうすれば・・・私の底無しのウツカリのせいで・・・いつそ死んでお詫びを・・・」

どうやら顔立ちの割に日本語はペラペラの様だ。

「喧しい奴だ。沈むなら控室かどっかで一人でやれよ」

「死んでお詫びって穏やかじゃないなあ。どうかしたんですか？」

「実はウツカリ春香様の大切な・・・あっ！申し訳ございません！春香様のご友人ですね？」

「え・・・え〜とお・・・ご友人という訳では・・・」「はい！そうです！ご友人です！」「ええ・・・そうなの！？」

「で、俺等はまあこいつらの兄貴分みたいなものだ」

「ちよっ・・・そこまで言っていいいんですか」

「（違うけど別にいいじゃんよ。友達って事にすれば丸く収まりそうなんだから）・・・で、実は俺達、春香さんに頼まれて学校のカギを取りに来たんですよ」

「学校のカギでございますか？ ああ・・・以前その様なお話を伺った気も・・・でも今は私のウツカリでなくしてしまった春香様の大切な3冊の楽譜を探さないと・・・明日の春香様の演奏会に間に合わないかも！ あああ・・・いっそ死んでお詫びを・・・」

「楽譜とカギ、一度に探すとなると厄介だなあ。大体俺達じゃどっちのありかも見当つかないし」

「・・・では僕達は楽譜を探す、メイドさんにはカギを探してもらおう。それでどうです？」

「あああ！ 助かります！ それでは私はお2階でカギを探してまいりますので楽譜探しをどうか宜しくお願いします！」

そう言うのと涙を袖で拭いて、エプロンを抱えていそいそと階段を上って行った。

「よっぽど切羽詰まっていたんだな、大慌てで行っちゃったよ。じやあ俺達も楽譜を探そうぜ」

「でもここを一斉に探すとなると大変ですよ。皆で分担をした方が早いのでは？」

「確かな。が、ワームの事もある、擬態されたらどちらが本物かを判断するかは容易じゃないからな・・・火野、緑の空き缶は幾つある？」

「あの・・・空き缶じゃなくてカンロイドなんですけど。えっと一応、ライダーの皆さん用の分は用意しておいてありますよ」

「ということは4つか。それにお前らは5人。となると・・・」

士は慎重に人選を考えた。他の敵ならまだしも擬態能力、そしてクロックアップを使ってくるワームが出てくれば、ライダーなら対応できたとしてもレイジ達で対処が出来るかといえばそれは甚だ怪しい。

その結果、士が決めた人選は士とインデックスとキノ、乾とレイジ、津上と伊里野、火野とシャナだった。

各部屋は士組と津上組が2階、乾組と火野組が1階を担当する事にした。

「それじゃ早速楽譜を探しに行こうぜ」

「いいか。くれぐれも判断を迷う様な事があったらすぐに俺を呼べ。それから乾、お前は1階の部屋では最も責任が重い。クロックアップに対応できるのは俺を除いては今のところお前以外にはいないかな」

「まったく、面倒事を押しつけやがって・・・まあしょうがねえか」

「楽譜を見つけたら何処に集まろうか？」

「この入り口でいいんじゃないんですか」

「だな。んじゃ始めるぞ。出来るだけ迅速にな」

「「「おう！！！」」」

各人はそれぞれ担当の場所へと足を運んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2773r/>

仮面ライダーディケイド×電撃学園 Cross of world

2011年11月14日22時18分発行